して雲首座に末後の句を問はしむ、他如何んか說く。」師云く、「和尙の尊命に依りて之に問ふ。他に足を濯ふ水を澆潑せらる。」堂云く、「他更に別の語なしや。」師云く、「他什麼の末後の句か有らん」と道ふ。堂云く、ヌ「那那、我儞に向つて道ふ、他會得す」と。師是に於て釋然たり。雲首座は閑極和尙なり、虛堂上首の弟子として高行あり、ヒ虎丘に住して終ふ。

平江定惠の住持因大方は、天台の人なり、法を ソ古林に嗣ぐ。細事を檢せず、ツ疎宕自如たり。郡守周侯義卿と善し、大方既に院事を謝して、靈岩の老宿華公の房に寓す。至正戊戌九月八日、周、事を以て山に入りて之を訪ふ。大方の云く、「某此の月十四日、卽ち此の山に ネ火化せん、ナ侯それ我が爲めに證明せよ。」周、戲に之を諾して別れ去る。十三日に至りて、ラ偈を以て周に寄せて云く、「昨日巖前拾得薪。今一朝幻一質化爲レ塵。慇懃寄二語賢侯一道。碧落雲收月一痕。」周、偈を得て亦いまだ之を信せず。是の夜華を請じて ム燥薪を以て高棚を爲り、仍りて一ウ龕を借りて坐し去る。華謂く、「薪は則ち命に從ふ、龕はすなはちあることなし。」遂に華の坐する所の木 ヰ榻を指して曰く、「これ亦足れり。」華其の言の如くす。十四日晨に起きて ノ殿に登り畢つて、衆僧と與に訣る。復た偈を說いて曰く、「前身本是 オ石橋僧。故向二人間一供二愛憎一。憎愛盡時全體現。鐵蛇火裏嚼二寒氷一。」遂に燥薪を袖にして行いて柴棚に陞りて、自ら ノ乘火す。薪火を得て烈焰 ヤ熾然たり。火聚の中に於て、マ祝香して曰く、「靈苗不レ屬二陰陽種一。根本元從二劫外一來。不二是休居親說破一。如何移向二火中一栽。」 ア數珠を フ度して華に與へて云く、「聊か遺囑に當つ、火焰到る所多く コ設利を得たり。」周之を聞いて驚嘆して已まず、既に爲に設利塔を靈岩に建つ。復詩を爲つて以て之を悼むといふ。

元の兵江南に下る、エ金山の賢默庵、テ伯顏に脅はれて幕中に置く。從つて武林に至る。時に フ中竺の珂公 サ雪屋、キ宋鼎の已に遷るを以て、卽ち寺事を謝す。默庵雅より公を知る、且其の道行を尊む。因りて之を伯顏に言ふて、公を請じて ユ靈隱に陞住せしむ。默庵親しく メ請疏を持して、公の門を扣く。公關を抽んで半面を露して問うて云く、「汝をば誰とかする。」默庵の云く、「和尙の故人某甲なり。」公關を落して云く、「我儞を識らず」と。蓋し公世外に處すと雖も、忠節を以て自ら持す、故に靈隱の命を

り、又和上ともいふ。

リ首座。「シユソ」と讀む、禪宗寺院の一役僧の役名。六頭の首、僧堂の第一位。

ヌ雲首座。閑極と號す、虛堂に嗣ぐ、承天に住す。

ル摩捋。なでさする。

ヲ末後の句。肝心要めの。

ワ開示。說ききかせよ。

カ澆潑。すすぎかける。

ヨ指。「ムネ、」旨意。

タ那那。安きこと乎。

レ虎丘。支那の名刹蘇州平江府にあり、十刹の一なり、雲巖寺といふ。

ソ古林。諱は清茂、橫川に嗣ぐ、宋の禪宗名僧。保寧に住す。

ツ疎宕。大まかなこと。

ネ火化。火定に入ること。

ナ侯。周公義卿を指す也。

ラ偈。僧詩なり、梵語伽陀。

ム燥。「かれかわく」なり。

ウ龕。棺。

ヰ榻。椅子の類、曲彔などか。

ノ殿。大殿、すなはち法堂。

オ石橋。趙州にあり。

ク乘火。「ヒンコ」と讀む、死人の引導するとき、遺骸に火をつくるかたをするをいふ。又下炬ともいふ。

ヤ熾然。火のもえあがること。

マ祝香。香を拈じて語を唱ふ、禪宗の法式の一なり。

ケ數珠。念珠。

フ度。わたす。

コ設利。「セリ」と讀む。又舍利とも、設利羅ともいふ、梵語なり、譯して骨身といふ。

エ金山。宋の名刹、甲刹の一、揚子江中に在り。

テ伯顏。元の將軍。

ア中竺。宋の名刹なり、十刹の一、杭州に在り。

サ雪屋妙珂。薩石田に嗣ぐ、中竺に住す。

キ宋鼎。宋の王業が元にうつる

肩ともせず。而して深く之を拒むことかくのごとし。時に座下に首座某といふものあり、年八十餘、歎じて曰く、「我宋に生れて宋に老ゆ、乃ち死を宋に得ざらんや。」遂に粒を絶して死す。

叢林の中、道聽の說、皆徵とするに足らず。後世傳ふ、㋓大惠と佛智と同じく㋒圓悟に參ず。悟偏に㋐佛智を愛す、大惠常に不平なり。後に佛智育王に住す。大惠其の席を踵ぐ。託するに㋑沙水利あらざるを以て、其の塔を發く。而も眞身壞せず、鑊を以て其の腦を鑊破し、油を灌いで之れを焚くと。果して爾らば謂つべし、慘戚の甚しと。常の人すら尙ほ爲るに忍びじ、而も大惠之を爲すに忍びんや。嘗て佛智の塔の銘を讀むに、乃ち㋔閣維して設利を葬る、いまだ嘗て全身塔に入るの事あらず。又㋕翁育王に住す。工に役し廢を起して暇日なし。適々天童、席を虛しくす。都堂省旨を奉じて師を遷して之を補せしむ。師育王土木の功いまだ就らざるを以つて、宰相に上書して免を求む。天童は卽ち育王、育王は卽ち天童といふの語あり。蓋し翁㋖淸規嚴肅にして、㋗衲子犯すことあれば恕することなし。命を辭することを見るに、相皷合して謗りを造る。乃ち錢十萬を將て、天童を買ふの語あり。今に至

㋐靈隱。支那五山の一、杭州臨安府に在り、後に斷江恩詩あり云く、雪屋今亡四十年、高風凜凜尙依然、伯顏丞相拜二床下一、不二肯爲一渠來二冷泉一。

㋑請疏。入院をすすめる文章。

㋒大惠。普覺禪師、圓悟に嗣ぐ、宋の名僧　徑山に住す。

㋓圓悟。克勤、五祖法演に嗣ぐ、宋の名僧、天寧に住す。

㋔佛智。端裕、圓悟に嗣ぐ、育王に住す。

㋕沙水。塔の沙水なり、沙水は洒水と同意か。

㋖閣維。火葬。

㋗淸規。百丈和尙の立てし禪宗公式の法規、叢林の規則。

㋘衲子。禪僧のこと。

るまで知輩なし。相傳へて、以て口實と爲す。予前に元の㋑重紀、至元の間に、雅景文を普福の敎寺に訪ふ。景文、翁の宰相に上る書の眞墨を出して以て示す。始めて前謗の非たることを徵す。無文の文集の中の行狀、三塔の塔の銘を讀むに及びて、其の言に、師天童を辭すといふ、皆書の意と同じ。夫二師の道は、猶日月の天に麗くがごとし、照を蒙らずといふことなし。無謂の謗、師を汚すに足らずと雖も、然も亦辨せずんばあるべからず。

靈隱の㋺千瀨和尙は、淛右の人なり、㋩愚極に嗣ぐ。書を讀み文を綴るに眼當世を空ず。嘗て㋥扶宗顯正論を著す。其の邪正を剖拆し、是非を訂定すること、極めて觀るべきことあり。但其の中、宗師の㋭拈椎竪拂を以て譚柄と爲す。晉の㋬王衍、玉㋮塵尾を握つて、手と色を同じくするの事を引きて證と爲す。夫れ宗師の拈椎竪拂は乃ち㋯向上の一着を激揚す。豈細事ならんや。千瀨以て談柄となす。惟だ自家の正眼を昧失するのみにあらず、抑々亦後人を疑誤せう。

元既に宋を滅す、楊璉眞加を以て、江淮の釋敎の都總統と爲す。命を奉じて宋の南渡の諸陵を越の山陰に發く。演福の住持澤雲夢は、眞加に從つて獨り㋰理宗の遺屍を凌辱す、必ず夙怨ならん。雲

㋐重紀。元朝に至元といふ年號が二度ある、世祖の時と今の順宗の時となり。

㋑千瀨。善慶禪師、愚極惠に嗣ぐ、靈隱に住す。

㋒愚極。智慧禪師、淨慈寺に住す、石田に嗣ぐ。

㋓扶宗顯正論。一卷。

㋔拈椎竪拂。禪宗の說法の樣子にたとへていふ。椎は衆を集める器、拂はほつすなり。

㋕王衍。字は夷甫、晉の人。

㋖麈。音「シュ」「ほつす」なり。

㋗向上の一着。禪宗の悟の一端。

㋘理宗。宋の天子也。

夢が意は眞加に諂順するにあり。亦左の足を以て、其の脇を蹋る。いくばくもなくして楊州に人あり、暴死して閻羅王界に到る。卒に報ず、陽間天子來ると。閻王、殿を下りて迎へ見ゆ。黃屋左㋓纛車馬駢塡す、世主の儀仗と異なることなし。既に坐定まる。暫くありて鬼卒あり、一僧を枷械して、引いて殿前に至る。陽間天子責め問うて曰く、「朕位に在ること四十年、國を治め民を治むるに、固に大いなる過なし。汝が敎法に於て、いまだ始めより流通をなさずんばあらず、卿と讎なし、卿なんぞ迺ち眞加に阿りて、亦朕を過辱するや。」遂に猛士に勅して、鐵錐を以て、其の左足の拇指を錐す、高く揭げて之を捶つ。其の痛苦の聲、酸嘶慘戚聞くべからず。須臾にして退きて去る。暴死の人怪みて問ふ、「陽間天子は誰とかせん。」人あり對へて曰く、「宋の理宗皇帝なり。」「捶たるゝ僧は誰とかせん。」曰く「杭州の演福の住持澤雲夢なり。」暴死の人甦る。こゝにおいて演福に到りて、其の事を詢うて以て所見を驗む。雲夢が左足の拇指、瘡を發して治すべからず、已にして殂す。

近代吾宗卓絕の士、其の臨機の施設、古人の舊轍を踏まず、而も能く己が智を運らし、人の心を開いて、敎法をして頓に九鼎の重きことを增さしむるもの、固に多し。何ぞ今の見ること罕なるや。杭下天竺の鳳山儀法師、前の元の㋛延祐の初め、際遇せられて、三藏㋜鴻臚卿の號を賜ふ。其の祿を食まず、敎門少くも齟齬することあれば、必ず之を整理す。高麗の㋝駙馬瀋王、旨を被りて寶陀

㋓纛。「はなぼこ」なり。
㋛延祐。元の武宗の年號。
㋜鴻臚卿。外賓を接待する役。
㋝駙馬瀋王。朝鮮の侯伯也。

の觀音を禮す。杭に過りて㋞褚中の錢を出して、明慶寺に就きて齋を設け、諸山の住持に齋す。省官以下諸の衙門官、躬らその事を董す。班列の位次に及びて、瀋王を以て講堂法座の上に中居せしめ、衆官次いでを以て法座の下に班し、諸山兩廡に列す。既に坐定まりて、師後に至る。竟に座上に趨りて王に問うて曰く、「今日の齋會何の爲めぞ。」王曰く、「諸山に齋す。」師曰く、「大王既に諸山に齋すと言ふ、主人今位なし、而も王自ら尊位に處し、諸山兩廡に列す、地に席して坐するものあるに至りて、濡齋と何ぞ異ならん、禮に於て恐らくは然らじ。」王之を聞いて惶愧して請ひ謝す。卽ち法座を下りて、前んで諸山を揖して、賓主を分つ。而も衆官退きて兩廡諸山の位に就く。齋畢りて王、師の手を握りて曰く、「吾が師にあらずんば幾んど禮を成せじ、噫所謂機に臨む設施、而も能く人の心を開くものは、鳳山其の人か。」

㋟虛谷和尙㋠仰山を辭して徑山に赴く。袁州の城裏に到る。四遠の檀信、金錢楮幣を賸りて、委積して前に滿つ。虛谷徐くに之を謝して曰く、「吾れ不敏なり、兩浙の諸山、吾が頗る宗趣を諳んずるを以て、徑山の席を虛にして吾れを處らしむ。吾が㋡開堂說法して、宗趣を闡揚せんことを欲するのみ。豈貧窶を以て嫌はれんや。諸君の贐るところの物還さんと請ふ、庶はくは新華嚴の誦を免れん。」侍僧に囑して、道具を囊にして身に隨ふのみ。

㋞褚。「ふくろ」のことなり。
㋟虛谷。希陵、仰山雪岩欽に嗣ぐ、徑山に住す、宋の名僧。
㋠仰山。支那名刹甲刹の一、袁州宜春縣にあり。
㋡開堂。入寺のはじめにする說法なり、大殿に於てする式をいふ。

予天曆の間、一源靈禪師に湖の鳳山に參ず。因りて趙州勘二臺山婆子一話を究むるに破れず。一日侍する次で、擧して以て師に問ふ。師云く「我れ早年にして、台州瑞岩の方山和尚の ソ 會中に在りて、ツ 維那に充てらる。亦曾て ネ 扣くに此の公案を以てす。山云く、『靈維那、爾一轉語を下せ看ん。』我れ當時口に隨つて便ち道ふ。『盡大地の人、者の婆子を奈何ともすることなし。』山云く、『我れは則ち然らず、盡大地の人、趙州を奈何ともすることなし。』我れ當時饑ゑて食を得るが如く、病んで汗を得るが如し。自ら慶快なることを覺ゆ。乃ち云く、『侍者爾別に一轉語を下せ看ん。』予當時箇の問訊を打して便ち行く。嘗て記す、師初め ナ 入院の ラ 上堂に、世尊陞座文殊 ム 白槌の公案を拈じて云く、「世尊是を以て錯りて說く、文殊是を以て錯りて傳へ、新鳳山今日是を以て錯りて擧す、會すや。字は三寫を經て烏焉馬と成る。」其の時竺元先師、六和塔に隱居す。之を聞いて ウ 歆艶して曰く、「宣政院許多の長老を擧す、惟鳳山些子に較れり。」師は寧海の人、徑山雲峰 ヰ 手度の弟子なり、出世して方山に嗣ぐ。人となり慈忍にして容あり、提誨して倦まず。 ノ 示寂するに、人の識ると識らざるとともに、嗟悼せずといふことなし。

佛經の中に說く、「海中に魚あり、大いさ山のごとし、背上に大樹を產す、

ソ 會中。善知識の下にといふこと。
ツ 維那。禪宗役僧の役名。
ネ 扣。たづぬる、又きはむるなり。
ナ 入院。住持となる。
ラ 上堂。大殿の須彌壇上に登りて說法する。
ム 白槌。法を說くのを證明する爲にたたく禪宗の道具。
ウ 歆艶。うらやむ、欽羨と同じ。
ヰ 手度。みづから弟子にすること。
ノ 示寂。僧の死するをいふ、寂を示す。
オ 業風。まへからのつみとが。

晝夜 オ 業風に鼓撼せられて、痛苦喩へ難し。」 ク 莊生も亦云く、「北海に魚あり鯤といふ。鯤の大いさ其の幾千といふことを知らず」と。至正癸卯に人あり、奴兒于より來る。言ふ、「彼の處に近ごろ魚あり、大いさ山のごとし、海中より過ぐ、 ヤ 鬣鬣を揚げて脊尾を水面に露はす、北に背いて南に投ず、隱々として去る、四日四夜、始めて其の身を盡す。」此れ所謂大身の衆生、夙業の所感かくのごとし。然も マ 阿修羅王、大海の中に立つて、身 ケ 須彌山と齊し、手を以て日月を簸弄す。其れ此の魚を視ば、則ち小鮮ならん。世人其の耳目の及ぶ所に局局として、耳目の外、皆以て誕なりとおもへり。吁。

禪門宗要は乃ち フ 雪山曇公の作するところなり。雪山宋の淳祐の間に於て、 コ 方山禪師に台の瑞岩に依りて、すなはち其れ此の集を成す。豈苟もせんや。余少かりし時、嘗て鳳山の靈公に依る。夜參の次で、公忽ち言うて宗要に及ぶ。其の中古人不到の處を提撥するに、餘は及ぶこと能はず。故に一冊を授けて、命じて之を讀ましむ。後四十年餘、天衣の淸業海といふもの、重ねて爲に板に刊る。志固に尙ぶべし。既に自ら序し、復た用章俊公に求めて之に序せしむ。みないふ、「雪山他人の成集を盜んで、己となして刊行す」と。恩公斷江を指して、一言證を爲さしむ。又爲に分ちて十卷となして、篇ごとに本篇の一語を取つて題となす。牽き合はせて破碎して、旨を失すること頗る多し。

ク 莊生。莊子のこと。
ヤ 鬣鬣。「たてがみ」のこと。
マ 阿修羅王。佛法外護の荒神。
ケ 須彌山。蘇迷盧、世界の最高山、妙高と譯す。
フ 雪山。祖曇、斷橋に嗣ぐ、大門に住す。
コ 方山。文寶、倫斷橋に嗣ぐ、潯慈に住す、無見覩の師、宋の名僧。

余來者の其の由を審かにせずして、反つて業海を然りとして、雪山を陋とせんことを患ひて、故に之を記す。

㋓虎丘の東州、靈隱の獨孤、同鄕同學にして、交義はなはだ厚し。㋔東州、虎丘に住する日、適々在城の㋕萬壽に主を闕く。諸山㋖獨孤を擧して、之を主らしめんと擬す。時に獨孤湖州の㋗天寧に住す。階を歷て陞る、躐ゆるにあらず。東州力めて之を沮む。獨孤之を聞きて、以て意とせず、年を踰えて、東州緣化して湖州に到る。之に見えんと欲するに、自ら內慚を負んで見えず。其の我れを㋘甚し、我が緣事を敗らんことを恐れて、ことさらに其の亡きを瞰つて、往きて之に見ゆ。獨孤報を得て亟かに歸る。禮を盡して㋙館穀す。又私㋚帑を捐てゝ、之が爲に先を牽く。從容に交義を叙べて、昔と少しも異なることなし。東州の虎丘に歸るに泊んで、深夜に方丈の致爽閣の中に於て、且つ行き且つ自ら訟めて曰く、「獨孤は君子、㋛壽永は小人」と。予今の業林の中、朋友たるものを觀るに、一語の隙、一絲の利を爭へば、謗㋜讒を造りて相擠陷し、恨むに至る。卽ちその命を斷つて、以て心を快しとせず。獨孤の寬厚、東州の自ら訟むるがごとくなるを求むるに、幾んどまれなり。凡そ弟子の其の師に於けるや、惡を掩ふて善を

㋓虎丘。クキウ、支那名刹、十刹の一、蘇州平江府にあり。
㋔東州。壽永、橫川珙に嗣ぐ。
㋕萬壽。支那の名刹十刹の一、虎丘と同所。
㋖獨孤。朋、虎岩に嗣ぐ、靈岩に住す、宋人。
㋗天寧。支那の名刹、甲刹の一、秀州嘉興府にあり。
㋘甚。敎なり。
㋙館穀。接待すること。
㋚帑。くら、私財。
㋛壽永。東州の諱。
㋜讒。痛怨「そしり」なり。

揚げ、是に順じて非に背く。これ之を孝といふ。善を掩ふて惡を揚げ、是に背きて非に順ずる。之を不孝といふ。苟も師善の揚ぐべきなくんば、嘿して可なり。强ひて善を以て之に加へば、人をして竊議せしめて、反りて其の不善を訐かん。是の順ずべきなくんば、諍ふて可なり。强ひて是を以て之に從はゞ、人をして竊議せしめて、反りて其の非を訐かん。亦不孝なり。切に近來大㋝方尊宿の遷化を觀るに、其の弟子㋞具狀を爲りて、名公に求めて其の塔に銘するに、必ず書す。生するとき父母、異夢を得、死するとき火後、牙齒數珠等壞せず。設利無數と、此の數端なければ、尊宿と成さず。これ皆不肖の子、正理を明めず、妄りに僞言を立て、其の師を玷辱す、孝といふべしや。㋟傳燈一千七百の善知識、設利あるもの十四人のみ。㋠寂音尊者、僧寶傳八十一人、設利あるもの數人のみ。且吾が宗に重しとするものは、惟だ宗通說通にあり。向上の爪牙ありて、人の爲めに粘を解き縛を去く、之を傳法度生といふ。餘は皆末事なり。しかのみならず火化して、間に諸根壞せず、設利珠を流すものあるは、蓋しその平日修する所の純淨の驗なり。また豈得易からんや。余懼らくは、後來遞に相彷らひ効つて、僞言を造合し、妄りに其の師を美めて、之を石に鐫り、異敎の人をして、之を讀みて、反りて先喆の靈異あるものも、亦僞りを成すと疑はしめん。害を敎門に遺す、固に小々にあらず、痛ましいかな。

㋝大方。諸方に同じ。
㋞具狀。一一細かに書くこと。
㋟傳燈。支那宋時代の著述にして、印度支那等の禪宗高僧の傳記なり、三十卷あり。
㋠寂音。洪覺範、眞淨文に嗣ぐ、宋の名僧、淸涼に住す、寂音は別號。

㋑東暘㋺道場に住す、㋩廊僧に誣ひて事を以て、㋥宣政院に訟へらる。院檄して本覺の住持了庵に委す。郡守と同じく其の曲直を理す。了庵の曰く、「東暘確く㋭規繩を守りて、衆を馭すること嚴肅なり。下にあるもの、㋬縱肆することを得ず、故に妄りに詞訟を興して、之を去けんと欲するのみ。今吾が群に則る、㋣有司府廳の上に閑坐し、而も東暘こゝに㋡鞠べらる。吾れ何を以てか堪へん。」すなはち南堂に退居す。㋯楚石嘉興の天寧に住す、有司の重ねて官宇を作り、木石を闕くに値ふ。村落無僧の廢庵を取つて、需むるところに應せんと欲す。因つて諸寺の住持を集めて之を議す。時に楚石力めて不可なるものを陳べて之を沮む。有司聽かず。遂に退鼓を撾つて、海鹽の天寧に歸る。二老皆義を行ふに勇む。師席の尊きを弃つるを視るに、啻弊屣を棄つるが如くなるのみにあらず、今荐に禍患己に嬰ると雖も、而も猶ほ濡忍して戀々たり。またひとり何んぞや。

㋱雲外和尚は昌國の人、生れて身裁㋲眇少なり。精悍餘りあり。說法よく巧みに譬へ傍く引いて、俯して學者に就いて、曲に之を成さんと欲することを貴ぶ。㋳奔軼㋴絕塵に至りては、鶻眼龍睛といへども、また窺瞰する分なし。㋶洞上一宗の傳、ひとり之に賴る。㋷晚に天童に住す。四海の㋸英衲俱に萃まる。師㋹倨傲せず、貪積せず、私食せず、施利を得れば、隨つて人にあたへ、後生を見て之を敬ふと愈々つゝしめり。任を宗門に期す、二時の粥飯、必ず鉢を掌つて堂に赴く。既に寂して餘資なし。禪者錢を率めて㋺津送す。後事の弟子・聘大方・昇獨木・省愚庵・證無印の四人、其の宗を大いにするに足れり。但だ位德に稱はず、其の法を嗣ぐものなし。惟だ無印の下、僅かに一二人あるのみ。

㋻溫日觀は、測らざるの人なり、知歸子と號す。早に㋼教庠に游び、尋いで禪肆に入る。性を縱にして道を樂む。小節に拘らず、ひとり心を㋽安養國に係く。造次顚沛といへども、いまだ始めより、暫くも忘れず、晉帖を臨し、葡萄を寫すことを喜ぶ。二つのもの、ならびに其の妙に臻る。凡そ㋾諸刹に到れば、別れに臨んで必ずこれに錢を索め、得るところに隨つて、屠沽の家に詣して、酒を沽ふてひとり酌む。餘錢は街坊の小兒に散與す。前導をなさしめて、聲をひとしうして、喝して云く、「相公來。」是の故に小兒之を見れば、輒ち追逐して羣隊を成す。詩偈を作爲して、前古に度越す。後に西湖の㋿敎寺に終ふ。或人いはく、「白湛淵が家に託生す」と。豈世緣いまだ了せずして之を了ずるか。

㋑東暘。德輝、晦機に嗣ぐ、道場に住す。
㋺道場。支那十刹の一、湖州に在り。
㋩廊僧。禪寺役僧の名也。
㋥宣政院。裁判所の類か。
㋭規繩。叢林の法規。
㋬縱肆。ほしいままのこと。
㋣有司。役人。
㋡鞠。鞫決なり、罪をとりしらべらるること。
㋯楚石。楚琦、徑山元叟に嗣ぐ、天寧に住す、宋人。
㋱雲外。曹洞宗の人。
㋲眇。一目少さきをいふ、「すがめ」なり。
㋳奔軼。ゆきもどり自由のこと。
㋴絕塵。たぐひなし。
㋶洞上。曹洞禪。
㋷晚。晚年。
㋸英衲。秀才の僧。
㋹倨傲。不遜にしてかまびすしといふこと。
㋺津送。葬儀なり、津は野なり。
㋻溫日觀。名は子溫、南宋の人。
㋼教庠。天台門の學。
㋽安養國。淨土。
㋾諸刹。刹は梵刹といふより寺なり。
㋿敎寺。天台寺などか。

竹莊嵓公、台の㋐兜率に住す、生れて氣量あり、前輩を平視す。故に之を嫉むもの衆し。㋑前朝天壽の節、おのおの州縣に、必ず諸山の住持一人を擇み請じて、說法せしむ。竹莊たま〳〵其の任に當る。嫉むもの多く、㋒禪客に㋓購つて、いでゝ問話せしめて、其の機を挫かんと欲す。知事の人知りて具に白す。竹莊の曰く、「戶門の庶務は㋔知事の人之をなせ、㋕陞座說法は、乃ち住持の人の任なり、汝多言することなかれ。」明日天寧に到りて、方丈客位の中に坐す、㋖諸山と談笑自若なり。鼓の鳴るに逮んで、輿に乘じて㋗法堂に至る。衆官に對して、㋘祇揖して座に登る。祝香し罷んで衣を斂めて座に就く。僧出でゝ問話㋙衰々として輟まず。竹莊之に答ふること流るゝが如し。又能く其の語に就いて之を反徵す。自ら退㋚衄するものあり、是くの如くにして四五人を更ふ。衆官久立を厭ふ、叱して其の餘を止む、出でゝ問話することを許さず。遂に㋛提綱㋜舉話、風飛び雷厲しく、電卷き星馳す、人みな㋝劫劫として我れ獨り餘りあり。彼の之を嫉むもの、縱ひ一人に千萬の舌を具すとも、亦讚者の口に勝つこと能はじ、惜しいかな壽命永からず、叢林の福にあらず。

㋐兜率。支那の名寺、宋時代。
㋑前朝。元朝、天壽節、天長節。
㋒禪客。禪宗の問答するときの役僧たち、十二人又は六人。
㋓購。求め償ふなり。
㋔知事。禪寺の支配する役僧。
㋕陞座。上に說く如く、高座にのぼりて法を說く。
㋖諸山。五山の外の本山。
㋗法堂。禪宗の法を說く堂なり、「ホッタウ」と讀む。
㋘祇揖。つつしみて、禮儀をすること。
㋙衰衰。水の絕えざる貌。
㋚衄。鼻より出る血にたとへる。
㋛提綱。說法の要領。
㋜舉話。古人の公案の一則をあげてとなへること。
㋝劫劫。つとめて息まざること、又汲汲のことしといふこと。

黃岩靈石の新古帆、初め東州に虎丘に見ゆ。嘗て委するに㋟藏鑰を以つてす。次に笠元先師に鴻腦に見ゆ。一夕、方丈に㋠請益して云く、「某甲、㋡狗子無佛性の話を看るに、㋢入頭の處なし、望むらくは和尙垂示せよ。」先師聲を厲して云く、「我が爲めに說かずんば、卽ぬ下り去れ。」古帆堂中に歸りて詬罵して云く、「我が爲めに說かずんば、卽ち休まん、何ぞ嗔らるゝことを得る。」人あり先師に說向す。先師の云く、㋣「他向後みづから會し去ることあらん。」古帆之を聞いて、當下に廓然たり。出世の一香、先師の爲めに拈出す。

寶雲の文宗周は、象山の人なり、敎觀に淹博にして、持律甚だ嚴なり。尋常人とものいふ、㋤塞訥して口を出さず、陞座竪義に至りては、講說滔滔として、㋥建瓴の水のごとし、之を禦ぐことなし。臨終陞座十六觀經を講ず。卷を終へて衆と訣れんと欲す。左右進前して啓して曰く、「和尙の後事いまだ曾て分付せず、奈何ぞ寂を告げん。」宗周が曰く、「衲僧家行かんと要すれば、すなはち行く、什麼の後事かあらん。」啓するものますます懇にす。是において座を下りて方丈に歸り、一一之を條盡す。すなはち㋦合掌して、西方四聖の尊號を稱念し、㋧回向發願しをはりて、遂に入滅火化して、設利燦爛たり。

㋟藏鑰。鑰は「かぎ」なり、藏主といふ禪寺の役僧の名にして、一切經、又は書籍を司る。
㋠請益。「シンエキ」、「シンヤク」と讀む、問ひたづねること。
㋡狗子無佛性話。趙州の公案。
㋢入頭。ニットウ、悟りかけるといふこと。
㋣他。古帆を指す。
㋤塞訥。謇と同じ、どもること。
㋥建瓴。かめの水。
㋦合掌。手をあはす、佛をながむかたち。四聖。阿彌陀等の四佛。
㋧回向。エカウ、同心向大の意味をもつていのること。

㋭竺元先師、如一菴の淛西より多く文籍を購つて、太白に歸ると聞いて、すなはち書を寄せて、一了堂に與ふるにいへることあり、「聞く一菴多く文籍を買うて歸ると。想ふに別事なし、只幾個の㋑雛僧に敎へんと欲するのみ、爾他に向つて說くべし、何ぞみづから休し去らざる。譬へば兎を逐ふ犬のごとし。終日之を逐うて、其の跡を失はず、之を半途に逐うて、又麋鹿を見て、兎を棄てゝ鹿を逐ふ。ふたつともに得ず。㋺好憿懼。」予徑山の㋩蒙堂に居せしとき、嘗て拜書して、先師の起居を問ふ。答ふるに手簡を以てして云く、「汝蒙堂の中、火爐頭にありて、火筋を拈弄する處、語言談笑の處、契湯契水の處、みなこれ汝が自己、更に別人に非ず、直截の工夫、こゝを出でたることなし。」予想ふに、先師當時必ず我を以て、庸鄙にして惡辣の挙踢を承くるに足らずとなして、ことさらに曲に此の說を示す。正にこれ黃葉を拈じて、金に當てゝ小兒を悅ばしむるのみ。然らずんば何ぞ泥を拖き水を帶ぶることの此くの如きや。嗚呼、先師入滅、已に三十餘年、此の訓言を述するに、對面に如同す。

誠道元は俗に處して、石塘の胡先生に從つて游ぶ、塵を出でゝ虛谷公に徑山に參ず。嘗て性學指要十卷を著す。大いに世敎に補あり。至正丙申、嘉禾の高士明、編次刊行す。其の時、張士誠蘇州に據りて擅に王と稱す。鄭明德・陳敬初・倪元震が輩あり、之を輔く。諸儒其の書を以て㋥晦菴に㋭駁ふるに性を論じて旨を失ふ、之を士誠にいふ。士誠命じて其の板を毀る。それ性は虛廓寂寥冲漠として朕を絕す。豈善惡を以てすべけんや。善惡混じて三品を分つは、氣質等と之を論ずるなりといふは、すなはち道元が之を辨ずるなり。固に宜し、吾れ聞く、㋬「禹善言を聞きしときは拜し、顏子一善を得るときは拳々服膺す」と。今諸儒みな禹顏を推し尊ぶものなり。而も所行、禹顏と同じからざることは何ぞや。

㋮古林和尙、保寧に住す。道望隆重にして、當時㋣大師の位に據るもの之を忌む。大方に席を虛しうする處ありと雖も、肯て之を擧ぐること鮮し。天童の雲臥死す、袁文淸公、時に㋟翰林にあり、特に書を以て、明州の萬壽、莊雪崖に抵して云く、「古林翁曩し虎丘にありて一識す、機鋒峭峻にして、議論氷雪なり、頹風を扶激すべきに足れり。今天童席を虛しくす、雪崖宜しく一を擧すべし。㋭桷、俗子なりと雖も、深く爲に腕を扼す。是に由りて㋯遴選の數に與ることを得たり。而も又中るに及ばず、惜しいかな。」

雪竇の常㋰藏主は、橫山の弟子なり、貌寒陋にして眼に丁を識らず、惟だ禪定を習ふ。作するところの偈頌、事理混融、音律調暢して、大いに人を啓迪する處あり。故に同時の人、皆常達磨を以て之

㋭竺元。妙道、橫川に嗣ぐ、萬年に住す、この本の作者恕中の師。
㋑雛僧。小僧。
㋺憿懼。はぢかくこと。
㋩蒙堂。モウダウ、首座以下の諸役僧の居る寮舍、ここでは首座のことをさす。
㋥晦菴。宋の朱熹先生。
㋭駁。まじふるなり。
㋬禹善言を。孟子の卷二に出づ。
㋮古林。諱は淸茂。
㋣大師。高僧に賜ふ尊號。
㋟翰林。文學のつかさ、儒官の極位。
㋭桷。淸公の別名か。
㋯遴選。諸人の中にて最適任の人を選ぶの意か。
㋰藏主。上にある藏鑰と同じ。

を稱す。余少年徑山に於て之を識る。今尚ほ其の作るところの頌四首を記得す。鐵牛と曰ひ、海門と曰ひ、苦笋と曰ひ、息菴と曰ふ。

鐵牛に曰く

百煉爐中輥出來。頭角崢嶸體絕埃。打又不行牽不動。這回端不入胞胎。

海門に曰く

業風吹起浪如山。多少漁翁着脚難。拚命捨身挨得入。方知玉戶不曾關。

苦笋に曰く

紫衣脫盡白如銀。百沸鍋中轉得身。自是苦心人不信。等閑咬着味全珍。

息菴に曰く

百尺竿頭罷問津。孤峯絕頂養閑身。雖然破屋無遮蓋。難把家私說向人。

大凡住持の人は、須らく僕隷を鉗轄することを要すべし。亦宜しく時々に善を以て之に訓ふべし。庶はくは惡を爲さずして累なけん。千澥嘉興の天寧に住す、㋐僕隷街坊の人の犬を盜みて、煮て之を食ふ。千澥狗を煮るの名を得たり。荆石姑蘇の㋑承天に住す、舟に駕して檀家の請に趣きて墅落を經、僕隷居民の羊を盜み、煮て之を食ふ。荆石羊を煮るの名を得たり。夫れ狗を盜み羊を盜むは、二人において何ぞ與らん。其の惡名に當りては、蓋し尋常鉗轄嚴訓を失して、然ることを致す。後の人、亦當に彼の二人を以て戒となすべし。

㋐僕隷。隷は伴についてあるく僕。
㋑承天。支那の甲刹の一、蘇州平江に在り。

夫れ住持は、蓋し一切菩薩の智所住境に住して、諸佛正法の輪を護持す。所謂佛子住持すと、而も百丈斯の名を立つ、豈偶然ならんや。近代住持と爲つて、焉を名とし焉を利とするもの、其の係るところの重きことを知らず、間に好みて俗子と交り、飲啖に從事するあり、吁惜しむべきをや。台州洪福の琛石山、近寺の俗子方公權と交る。互に相治具して、日に飲啖を事とす。寺僧方監寺といふものあり、庫職を掌らんことを求む。すでに喏す、公權私の憾を以て、譖つて之を沮む、方㋒監寺懷㋓鞅々たり。方丈の僕に賄ふて、毒を茶中に置いて、公權に毒す。公權石山を敬ふて、己か茶盃を轉じて先づ之に奉ず、石山毒を受けて死す。方監誤つて石山に毒するを以て、常に憂疑を懷く。一日㋔桑扈鳥の鳴くを聞くに、みづから其の聲を配して、方監殺我と爲す、憂懼ます〳〵甚し。遂に病んで天光を見ることを畏る。㋕藁薦を嚙んで死す。其の始めを原ぬるに、只石山が職分を守らずして、俗子と交るがために、而も其の言を聽いて、遂に輕く自身を喪す。後の人戒めざるべけんや。桑扈鳥は、田埜の人呼んで鍛磨鳥となす。春暮に始めて鳴く。俗其の聲を配して、張監鍛磨と爲す。此の僧以て方監殺我と爲す。提葫蘆・婆餅焦・脫布袴・泥滑滑の類のごとし。皆聲に因りて名を得たり。

㋒監寺。禪寺の役僧の名。
㋓鞅鞅。悩ばぬこと。
㋔桑扈鳥。斑鳩の異名。
㋕藁薦。わらむしろ。

合尊大師は、宋の幼主瀛國公なり。既に大元の㋙薩禪皇帝に歸附す。命じて薙髮して僧たらしむ。㋚帝師躬ら㋛摩頂を爲す。秘密の戒法を授く。精煉堅確、已に應驗多し。英宗の朝に至りて、大師適與に詩を吟じて云く、「寄レ語林和靖。梅開幾度華。黃金臺上客。無二復得一レ還レ家。」㋜諜するもの、その詩の意、江南の人の心を諷動するにありといふを以て、之を上に聞す。上收へて之を斬る。白乳流れ溢る。上悔いて內帑の黃金をいだして、泥となして、江南の書をよくする僧儒に詔して、㋝燕京に集めて、㋞大藏經を書して庸て冥福を助く。首夏に駕して上都に幸す。暑を中途に避けて、㋟弑に遇ふ。新書の經、いまだ㋠半藏に及ばずして、乃ち已む。

至正辛丑、陝西に民家の小兒あり。甫めて三歲、一日村巷の中、縣官㋡喝道の來るに遇ふ。衝き前んで其の名を呼んで、㋢揖を作して曰く、「相別れて頗る久し、尙ほ恙なしや。」縣官驚訝して曰く、「此の小兒焉んぞ我が名を知らん。」乃ち進んで之を問ふ。小兒爲に前生の姓名を言ふ。又連りに舊と與に酬唱する詩數首を擧す。縣官始めて其の故人たることを信ず。復た縣官の爲に言ふて曰く、「君と別れてより、今人身となることを得ること、已に三生を歷、初め死して狗となる、自ら之を厭ふがゆゑに、主家の兒を囓む、主家怒つて我を殺す。再生して鶉となる、又之を厭ふて河に投じて溺死す。今人となることを得たり、公と再び相見す、萬幸なり。」聞く此の兒、前身易を玩ぶことを喜ぶ。太極未動以前の一着を受用す。故に出生入死、生死の移換を受けず。麻衣、易を名づけて心易といふ。慈湖、易を名づけて己易といふ。旨あるをや。

㋣破菴和尙、資福を退いて徑山蒙菴の招に赴き、委するに㋤立僧首座の職を以てす。寶上座といふものあり、大知見を具す。住持首座の開堂に遇ふては、必ず橫機捷出、鋒を迎へて勝つことを取る。一日破菴開室、寶上座至る。破菴垂語して云く、「乾坤の內、宇宙の間、中にあり。」寶㋥擬議す、打出せらる。其の時寶、破菴の語を擧し盡すを待つて、乃ち進語せんとす。既に中にありといふ處に於て、打出せらる。破菴故に我を摧くとおもへり。㋦衣單下に歸して㋧脫去す。火後鄉人㋨舍利を收めて破菴に呈す。破菴拈起して云く、「寶㋩上座饒ひ儞舍利八斛四斗あるも、之を一壁に置く。我に生前の㋪一轉語を還し來れ」といふて、地に擲つ。惟だ膿血を見ると。之を先輩に聞く。

元の至正丙申、張士誠蘇州城を破る。其の弟九六といふもの、先づ城に入つて居第を擇む。承天寺の深邃爽朗なるを見て、心に之を樂しむ。易へて以て宮室となさんと欲す。士卒に命じて㋫殿中の

㋙薩禪皇帝。世祖。
㋚帝師。巴思八。
㋛摩頂。得度。
㋜諜。探り言ふ間諜のこと。
㋝燕京。北京。
㋞大藏經。一切藏經五千餘卷。
㋟弑。貴族をころすことにもちふる字なり。
㋠半藏。一切藏經の半分。
㋡喝道。日本のしたにしたにならん。先ぶれなり。
㋢揖。禮義。

㋣破庵。祖先、應庵に嗣ぐ、臥龍に住す、宋の名僧。
㋤立僧。首座の役を立てて問答をなさしむ。
㋥擬議。ゆきつまるなり。
㋦衣單下。修行僧の居る座席。
㋧脫去。死すること。
㋨舍利。設利と同じ。
㋩上座。僧を敬稱するにつかふ。
㋪一轉語。ひとつの、答へのかはりしさとりのことばを、雨といへば風といはぬ、水といへば月といはぬなり。

佛像を毀る。士卒罪福を畏れて、敢て命に從はず、九六怒つて自ら弓を挽いて㋐中尊の面を射て、卽ち盡く毀る。士誠を迎へて之に居らしむ。

丁酉、今朝の大兵、呂口の黃埭を攻む。兵を督して出でゝ戰ふ。敗して擒に就く。右の臂を斷たる。然して後に之を殺す。戊戌、方國珍、江淛の省分省參政を行ずるが爲に、屯して明州を守る。左右の司官、劉仁本といふもの、頗る文學を嗜む。自ら平昔作する所の詩文を編して帙と成し、板に刊つて印し行ふ。在城僧寺の藏經を取つて、糊して㋑書衣となし、經文を揭げ去つて、自らの詩文を寫す。吾人之を見て、心酸骨苦すと雖も、之を如何ともすることなし。吳の元年、大兵明州を取る。國珍降す。朝廷仁本が不忠の罪あるを數へて、其の背に鞭つ。潰爛して肝臟を現して死す。九六は一勇夫のみ。罪福を明めず、尙ほ宥むべし。仁本は孔子の業を習ふ、而も之をするに忍ぶ。孔子の曰く、「神を敬すること神の在すが如くす」と。況んや吾が佛三界の大聖人たるをや。故に二人、ひとりはその像を毀り、ひとりはその書を廢す。踵を旋さずして、俱に極刑の報を受く。夫れその報ずべき所を報ずるものは、實に自ら報ずるなり。吾が聖人の之を報ずるにあらず。

鄞城官講の所に、二僧あつて同居す。一僧鼠を苦んで、大小の二桶を以て、照鏡を㋒裝ふて鼠を撲つ。機發すれば鼠撲を受く。僧急に去つて、水を携へて之を㋓淹殺せんと欲す。同居の僧忍びず、

㋐殿中。佛堂。
㋑中尊。本尊。
㋒書衣。本の帙のるゐ、表紙のるゐ。
㋓裝。つかね、つつむなり。
㋓淹殺。おしころすなり。

潛かに桶を揭げて縱し去らしむ。明日鼠を撲つ僧他に出づ。是の夕僧獨り宿す。羣鼠の喧聒常に異なるを見て、僧厭ふて云く、「我れ他夕汝を縱す、汝反つて我を㋔聒するや。」早に起きて榻前に㋕青條一事を拾ふ。心はなはだこれを疑ふ。數日の後、僧條を以て腰を束ぬ。隣僧指して云く、「此は是吾が物、嘗て之を臥內に失ふ、公奚よりか得たる。」僧所以を陳ぶ。始めて知る是の夕、鼠羣を集めて隣僧の條を竊みて、以て德を報ず。故に喧聒なるのみ。

覺範の僧寶傳、始め百禪師の傳と名く。大惠初め見て之を讀んで、爲に一十九人を剔出して之を焚く。厥の後、覺範書を致して、黃檗の智和尙に與へて云く、「宗杲竊かに吾が百禪師の傳を見て、輒ち焚き去るもの一十九人、知らず何の意ぞ。」覺範一時悅ばずと雖も、彼の十九人、終に以て卷に預らず。多く人の議するを見るに、僧寶傳八十一人に止むは、九九の數に準ぜんと欲す。乃ち燕人燭を擧するの說なり。

鐵鏡和尙、何山に住す。㋖座下に恭㋗都寺といふものあり、四明の人なり。廉介みづから持し、精しく㋘梵行を修す。日に法華經一部を誦して、臨終に疾苦なし、衣を更へて坐逝す。㋙闍維舌根壞せず、湖海の人偈を聲して追悼す、今に至るまで能く之をいふものあり。嘗て夜坐偈あり、云く、「點ニ盡山窻一盞油一。地爐無レ火冷湫々。話頭留向明朝一。道者敲レ鐘又上レ樓。」鐵鏡特に爲に陞座して、之を稱賞す。

㋔聒。かまびすし。
㋕青條。うちひも。
㋖座下。門人。
㋗都寺。禪宗の役僧名。
㋘梵行。僧の修業。
㋙闍維。火葬すること。

余㋑南堂を本覺に訪ふ。夜坐の間、言ふて言句を做るに、練纒痛快の殊ありといふに及び、却りて先休居の僧に送るの偈を擧して云く、「如二蠶作レ繭自包纒一。百匝千重在二面前一。裂得破時全體現。渾家送上二渡頭船一。」東州韻を次で云く、「動靜何曾涉二蓋纒一。何須更透二未生前一。故園千里今歸去。陸有二征途一水有レ船。」復た云く、「休居は精密なりと雖も、練纒を覺ゆるに似たり。東州の痛快なるには若かず。」

予早年にして、鳳山の㋺擇木寮に居す。飯後困を遣つて、朋友と選佛の圖を擲つ。一源和尚之を聞いて、㋩淨頭をして送りて偈を至らしめて云く、「百千諸佛及衆生。休下向二圖中一強較量上。心印當陽輕擲出。堂々高坐寂光場。」次の日清朝に問訊す。乃ち云く、「古人剪爪の工なし、汝後生の輩、唐しく光陰を喪することを得るに忍ぶ。且つ選佛の圖を擲つ。極めて合殺の時に到つて、一箇の印を擲ち得て出せば、便ち歡喜して云く、『我れ成佛し了れり』と、殊に知らず一切時一切處、皆これ成佛の處なることを、皆これ汝が成佛の處なることを。汝卻りて知らず。」

仲謀和尚、溫州の仙岩に住す。天下正に太平、㋥衲子參訪のもの、虛日なし。予明性元・瑞瑩中と、三人同じく仙岩に至る。性元・瑩中尚ほ侍者となる、余すでに㋭藏を典る。恰も月望に値ふ。陞堂に云く、「一默僧に酬ゆ、雷轟き電激す、三呼旨を領ず、玉轉じ珠回る、七十三、八十四、㋬築著磕著、人を礙塞殺す。」㋣主丈を拈じて、「昨夜西風枕簟秋。無レ限蟬聲噪二高樹一。」後結集の人、礙塞殺の三字を改めて、能く幾くか有るとなす。其の言を立つることの難きを知らざるが爲に、妄りに淺見を以て、先輩の語を改め易ふ。大いに㋮水潦鶴を以て、諸佛の機に易へるに似たり。

黃巖濠頭の丁安人、諱は覺眞、竺心と號す。初め田絕耕に委羽山に參じて㋯省あり。遂に家屬を棄てゝ菴を結んで自ら居る。古愚に湧泉に見ゆ。愚の云く、「良家の女子、東走西走して作麼せん。」對へて云く、「特に來つて和尚に見ゆ。」愚の云く、「我が者裏、儞を容るゝこと得じ。」丁手を拍つこと一下して云く、「三十年の用處、今朝捉敗す。」愚休し去る。無際に雁山の春雨菴に見ゆ。門に入つて曰く、「春雨膏の如し、行人其の泥濘を惡む。」際云く、「不是不是。」進語せんと擬して、喝出せらる。晚年邑中の明因寺の前に就いて、㋱接待を開く。僧あり㋲包を提げて直に臥內に入る。之に問うて曰く、「儞は什麼の僧ぞ。」僧云く、「行脚の僧。」問うて曰く、「儞が脚下の草鞋㋳綊斷す、甚としてか知らざる。」僧無語。卽ち其の包を擲出して云く、「者裏儞が足を措く處なけん。」又僧あり、纔かに門に入る。丁云く、「達磨大師來や。」僧云く、「我不是。」丁云く、「是なることは固に是な

㋑南堂。了庵清欲、古林に嗣ぐ、本覺に住す、南宋の人。
㋺擇木寮。禪堂の寮舍の名。
㋩淨頭。さうぢのかしら。
㋥衲子。雲水僧。
㋭藏を典る。藏主のこと。

㋬築著磕著。けつちりかつちりなり。物にゆきあたること。
㋣主丈。正しくは拄杖と書く、禪宗說法のとき用ふるもの。
㋮水潦鶴。水潦はあまみづ。
㋯省。悟入するをいふ。
㋱接待。宿もすれば茶もまゐる所。
㋲包を提げて。包は禪坊主の荷物。
㋳綊。履中の紋はなをのことか。

り、只これ鼻孔同じからず。」一日明因の尼奎長老と相見す。問うて曰く、「聞く長老夜來、兒子を生じ得ると、是なりや否や。」答へて云く、「且く道へ、是れ男か是れ女か。」丁云く、「鷄啣ニ燈盞一走。鱉咬ニ釣魚竿一。」と。

育王の勉侍者は、余が族姪なり、年少うして參學に志あり、不幸短命にして死す。嘗て偈を作りて、一侍者の台鴈に游ぶに送るに云く、「鳥窠吹ニ布毛一。侍者便悟去。雖レ不レ涉ニ言詮一。早已成ニ露布一。天台嶺上雲。雁宕山中樹。此去好商量。莫レ觸ニ當頭諱一。」臨終に偈を書して云く、「生本不生。死亦非レ死。秘魔擎レ叉。俱胝竪指。」予嘗て其の悟入の由を詰る。對へて云く、「勉曾て玉几に、栴檀林經案の側に坐す、偶々珪藏主の僧と講論するを見る。僧問うて云く、『如何なるか是れ向上の事。』珪藏主兩手を以て拳頭を揑つて頭上に置いて、仍りて ㋐合掌して云く、㋕『蘇嚧蘇嚧。』此に因つて箇の歡喜の處を得たり。狼忙として蒙堂に到つて、達首座に擧向す。他笑つて云く、『儞又來るや。』此より胸次自覺了了たることを。」予後に珪藏主を見て、擧して以て之に問ふ。惟だ其の面頰に紅を發することを見、敢て對へず。徐くまた之に問ふ。乃ち曰く、「我當時、這般の模樣を做して此僧に戲る、實は自ら如何とすることを知らず。」信に知る、此事言說の上に在らざることを。風㋓運き塵起り、雲行き鳥飛ぶが如きに至るまで、皆是れ人を入處に控く。自ら是れ當面に蹉過す。今

㋐合掌。手をあはせて敬意を表するなり。
㋕蘇嚧蘇嚧。音なり、そろそろ也。
㋓運。動に同じ。

珪藏主の此僧に戲るを觀て、而も勉侍者箇の歡喜の處を得たり。正に㋖佛の會中に、少年の㋛沙彌、皮毬を以て、戲に老㋝比丘頭を擊つて、他のために四果を證せしむるが如き、事以て並び按ず。

方山和尚㋟淨慈に住す。衆の爲に開室、僧に問うて云く、㋠「南泉猫兒を斬卻する時如何。」僧下語、皆契はず、一僕の傍に在るあつて云く、「老鼠大を做す。」方山の云く、「好一轉語、不合に儞の口裏より出づ。」東嶼和尚、靈隱に住す。開室垂語して云く、「魚は水を以て命とす」と、甚に因つてか水中に死在する。」一僧云く、「河裏に錢を失して河裏に撫ふ。」師深く之を肯ふ。石室和尚、雪竇に住す。開室垂語、人の㋣下語することを許さず、三尊宿の人の爲めにする用處、同じからざることありと雖も、心を剖き膽を露すことは、未だ嘗て同じからずんばあらず。後の覽るもの、宜しく眼を具すべし。

刀鑷の張生、名は德、鄞縣下水の人、世大慈の㋡供堂たり。好んで禪學を習ふ、常に衆に隨つて法を聽く、自ら省あることを覺ゆ、人之を知ることなし。因に天雪ふる、小童雪を團にして、佛像を作す、㋤禪流各偈を爲りて之を詠ず。生後へに隨つて偈を吟じて云く、「一華擊出一如來。六出團々笑臉開。識ニ得髑髏元是水一。摩耶宮裏不レ投レ胎。」針工丁生は天台の人、方山和尚に瑞岩に參じて、曾て印可を蒙る。琉璃を詠ずる偈に云く、「放下放下。提起提起。一點

㋖佛の會中。釋尊の在世中。
㋛沙彌。少年禪僧。
㋝比丘。僧といふに同じ。
㋟淨慈。大寺淨慈のこと。
㋠南泉。普願、馬祖に嗣ぐ、趙州の師、唐の禪宗名僧。
㋣下語。轉語に同じ。
㋡供堂。寺へ出入する商家。
㋤禪流。禪學者。

靈光。照二破天地一」二偈事を借りて理を顯すこと、俱に切到なり。余並せて之を錄するものは、蓋し人を以て言を廢せざればなり。

護聖の啓迪元は、臨海の人、書生たりし時、叔父堅上人を里の寶藏寺に拜す。偶々その几上の㋕首楞嚴經を閲して、「山河大地皆是妙明眞心中所現物」といふ處に至りて、卷を置いて細かに繹ぬ。良久して、自ら肯ふ。父母に白して出家を求む。徑山の寂照を禮して師となし、頭陀の行を服す。久しうして益々勤む。護聖に出世して緣順はず。

㋖東堂に退居すること七年、書を著はして大普幻海と曰ひ、法運通略と曰ひ、贅談と曰ひ、犹說と曰ひ、儒釋精華と曰ひ、大梅山志と曰ふ、總て若干卷。又佛祖大統賦を作る。是に由つて心の痨疾を得て卒す、壽四十三。

天童の㋑西岩和尚は蜀の人なり。南游徧參して、徑山に至つて㋔無準に見ゆ。機語相投じて、㋗入室を容す。藏主の職を授けんと欲す、㋘或者力を以て之を攘む。次の日㋙亡僧訥侍者の爲に㋚起龕す、衆を怯れて一辭も吐かず。無準すなはち維那をして、惠侍者を請じて起龕せしむ。惠龕前に至つて、連に訥侍者と喚ぶもの三たび、人亦怯るとおもへり。乃ち曰く、「三喚不レ應。果然是訥。頂門放出逸天鶻。」無準或者を黜けて、惠侍者を以て其の職に代ふ。惠侍者はすなはち師なり。師

㋖首楞嚴經。十卷。
㋖東堂。前住の居るところ、當山の前住なり。
㋑四岩。了慧、無準に嗣ぐ、宋人、天童に住す。
㋔無準。師範、破庵先に嗣ぐ、徑山に住す。
㋗入室。參禪すること。
㋘或者。僧の式職僧。
㋙亡僧。いまだ和尚にならぬ小僧なみの僧を、死すれば亡僧といふ。
㋚起龕。葬式の式の中の名。

先に妙峰に靈隱に依る。靈隱重ねて兩廡の壁面に五十三參の相を彩飾す。禪衲各偈を以て賀す、師も亦有り。而も之を妬むもの、以て卷に登さず。妙峰卷を閲して問うて曰く、「惠侍者何ぞ無き。」曰く、「有り。卷に登すに足らず。」妙峰の曰く、「試に擧せよ看ん。」既に擧す、妙峰、親ら之を卷首に書す。此より聲名爛熳たり。天童に住して幻知菴を搬めて、歸藏の計を爲し、別に祠を置いて妙峰に奉じて用つて知己に報ず。其の賀偈に云く、「幸是十方無二壁落一。誰將二五彩一繪二虛空一。善財眼裏生二花翳一。去二劫一重一添二一重一。」

浩靈江は古林和尚の弟子なり、古林饒州の永福に住する時、靈江㋐第一座たり。㋑結夏の㋒秉拂、禪客いでて問うて曰く、「一歩を進むる時如何。」答へて曰く、「墻に撞き壁に撞く。」「一歩を退く時如何。」答へて曰く、「坑に墮ち塹に落つ。」「進まず退かざる時如何。」答へて曰く、「立地の死漢。」人あり方丈に到つて讃歎して曰く、「首座の秉拂。禪客の三轉語に答ふ。盡く來機に赴いて好し。」古林の云く、「好什麼の處にかある、道ふことを見ずや、一句合頭の語、萬劫の㋓繫驢橛、然りと雖も、切に便ち恁麼に會することを得ざれ。」

湛天淵、天曆の改元に當つて、鳳山一源和尚の會中にあり、前板に居して秉拂、預め提唱の語を呈す。其の間に云へることあり、「翔鳳山前行看。白雲乍舒乍卷。禹泉亭上坐聽。流水或抑

㋐第一座。首座。
㋑結夏。九十日づつの修行者の禁足日。
㋒秉拂。拂子を拈じて說法する式。
㋓繫驢橛。驢を繫ぐ橛にて、煩惱、迷の甚のこと。

或揚。眼處作二耳處佛事一。耳處作二眼處佛事一。便見非二惟觀世音一。我亦從レ中證。」一源便見の二字を指して云く、「此二字ありて是れ別人の說話に與す。此二字なくんば、方に是れ自家の說話。」天淵覺えず席を避く。退いて人に謂つて曰く、「還丹の一粒、鐵を點じて金と成すは、㋐堂頭の謂なり。」天淵は東嶼和尙、室中の㋑龍象、風規凜々として人の敬畏する所なり。芝塘の明因に出世して終ふ。敏仲謙と名を齋しうす。仲謙、道勝れ德優にして、能く人に下る。洞庭の翠峰に出世して終ふ。造物者をして、二公の壽を假さしめば、必ず能く雙清の宗を恢いにせんこと、㋒晦堂の㋓死心㋔靈源あるが如くならん。

奕休菴は揚州の人、早歲にして淮甸燕京の五臺に遊ぶ。歲の饑うるに値ふて、商船に附いて明州に抵り、天童に客たり。壞衲を衣て日に一餐夜寢ねず、儼にして古德の風あり。奉化上の雪竇席を虛にす、衆㋕牘を削つて請じて住持と爲す。奕、欣然として一笠を携へて去る、方丈に坐して其の金穀を掌る。周歲ならずして盡く平昔の所爲を變ず。向の壞衲は、今已に鼎を列ぬ。左右稍犯すことあらば、必ず瞋怒して自ら起つて、犯者を撲つて地に仆し、拳を用つて舂き、脚を以て搗つ、氣伸び心暢ぶるを待つて始めて休す。既にして盡く常住の羨餘を括つて、鄞城に就いて民の房を貿ひて、易へて菴となして居る。日に資生を以て事をなす。竹林寺の僧と、屋を爭ふて官に訟ふ。對理直ならずして牢死す。今の緇門の中、善を假りて榮を要し、辱を大敎に貽す。豈止だ一休菴のみならんや。詩に云く、「麗レ不レ有レ始。鮮二克有一レ終。」戒めざるべけんや。

諺に云ふ、人に修すべきの福、延ぶべきの壽あり、此れ一世を以て論を爲す、いまだ其の原を究めんこととあたはず。如し確く三世を以て論を爲さば、能く其の原を究むあたはず、變ずるものは一世、以て三世を括るべし。三世現に之を一世に行ふべし。且三世の因果と、一世の因果と、久遠の殊なるありといへども、實に一心の作受を出でず。何となれば則ち多く世人を見るに、善を爲すものは反つて賤夭に、惡を爲すものは反つて福壽なり。蓋し其の前世、善を爲すこと重きものは、今世惡を爲すといへども、惡善に勝たず、故に福壽なり。前世、惡を爲すこと重きものは、今世善を爲すといへども、善惡に勝たず、故に賤夭なり。而も今世善惡の報、則ち又來世にあり。其れ或は前世に善を爲し惡を爲して、甚だ重からざるものは、今世爲す所稍之に勝つ。卽ち能く賤夭を變じて福壽となし、福壽を變じて賤夭となす。故に人宜しくその變に通ずべし。三世に礙へらるゝことなかれ。而もその現修に怠らば、一心の作受に昧きなり。

徑山の古鼎和尙、生禀、㋖侏儒、㋗唇㋘褰縮し、齒㋙齦を露し、聲㋚嘶噪し、膚㋛媵皴腊なり。相工之を相して曰く、「爾の四賤相、侏儒の軀に萃る、平生はいはずして知るべし。」師因にみづから誓

㋐堂頭。主席の住持。
㋑龍象。先輩名僧だちを崇めて云ふ。
㋒晦堂。祖心。
㋓死心。黃龍。
㋔靈源。惟淸。
㋕牘を削つて。書狀を認めて。

㋖侏儒。短身。
㋗褰縮。からげちぢみ。
㋘齦。はぐき。
㋚嘶噪。はしやぎきつたこゑ。
㋛媵皴腊。はだへしわ〳〵。

を立てゝ、之を觀音大士に禱る。日に聖號を持すること筭ふることなし。夜は聖像を禮すること千計を以てす。かくのごとくに之を修すること二十年、忽ち賤相化して福相となる。唇舒緩にして齒隱れ、聲圓潤にして、膚腠光㋺膩なり。後向きの相工と遇ふ。賀して曰く、「吾が師今の相、昔の相にあらず、いはんや㋑陰隲紋已に現ず。すなはち顯位に居して、大いに宗風を振ふべし。」其の年隆敎に出世す。隆敎より寶陀に遷り、寶陀より中竺の徑山に陞る。五年に滿たずして三たび遷る。徑山に居ること十二年、壽七十九。師の修禱感驗、ひとりよく福壽を增すのみにあらず、又よく其の形軀を變へること、物を以て人の庫藏に寄せて、就いて之を取ることの易きがごとし。亦吾人みづから怠るものの勉めとなすべし。

混源禪師、紫籜に住す、既に庫司の壁記を爲る。復其の後へに題して云く、「滴水粒米も、盡く衆僧に屬す、務めて人情を悅ばしむ、理支破しがたし。當に思ふべし、披毛戴角、歲月久長なり。因果を明らむる人は、幸に宜しく知悉すべし。」遺墨歲久しうして漫滅殆んど盡く。後に一山和尙來りて其の席を踵ぐ。重ねて其の壁を粉飾して、親ら爲に之を書す。今に至るまで尙ほ存す。惟だ利是れを圖るもの、自ら省せずんばあるべからず。

老素首座、一生關を掩ふて潛伏す、世に之を識るものなし。元の天曆の間、禪人あり、其の述懷山居偶書三偈の眞墨を得たり。歸源先師の着語を請ふ。先師の云く、「叢林皆その出世說法せざるを以て

㋺膩。あぶらぎる。
㋑陰隲。吉凶。

恨となす。今此の三偈を讀むに、金鐘大鏞の一擊すれば、衆響みな廢するが如し。之を說法せずと謂はば可ならんや。偈恐らくは久しうして聞くことなけん。」因つて目の如く之を記す。「傳燈讀罷髮先華。功業猶爭幾㋥絡叉。午睡起來塵滿レ案。半檐閑日落二庭花一。尖頭屋子不レ嫌レ低。上有二長林一下有レ池。夜久驚㋩颱掠二黃葉一。恰如二蓬底雨來時一。浮世光陰日不レ多。題レ詩聊復答二年華一。今朝我在二長松下一。背二立西風一數亂鴉一。」

鴈山羅漢寺の證首座、目瞽にして見道明白なり。朝ごとに掃地を以て佛事となす。僧あり問うて云く、「者の片田地、掃ひ得て乾淨なりや未だしや。」證苕帚を竪起して之に示す。又僧あり、問うて云く、「眞淨界中本一塵なし、地を掃ふてなにかせん。」證亦苕帚を竪起して之に示す。樂淸に山あり、九牛と名く。證嘗て之を詠ずるに頌を以てす。曰く、「四五成レ羣知幾年。春來秋去飽二風煙一。淸池有レ水何曾飲。綠埜不レ畊長自眠。箇々脚跟皆點レ地。頭々鼻孔盡遼天。尋常只在二千峰頂一。大地人來作麼牽。」

歸元、薦福に住す、一夕座下の僧と茶話す。師擧す、㋭東坡、㋬佛惠の泉禪師を蔣山に訪ふ、泉問うて云く「大儒の高姓。」坡云く、「姓は秤。」泉云く「是れ什麼の秤ぞ。」坡云く、「天下の老和尙の舌頭を稱る底の秤。」泉、㋻喝一喝して云く、「且く道へ者の一喝、重きこと多少ぞ。」坡語なし。師僧に命じて各

㋥洛叉。（Lakṣa）數の目、十萬に當る。
㋩颱。驚颱はときかぜ、强き風。
㋭東坡。蘇軾。
㋬佛惠泉。蔣山の名僧。
㋻喝。どなりつけるといふよりも、禪宗の眞意をあらはすため、臨濟和尙より用ひること多くなれり。

一轉語を代らしむ。時に之れに酬ゆるものなし。惟だ源藏主起つて燭を剪る。一侍者咳嗽すること一聲、師笑つて云く、「源藏主は燭を剪り、一侍者は咳嗽す。」隨つて定藏主といふものあり、師の自ら代らんことを請ふ。師の云く、「泊ど此には過ぎじ。」源藏主は、すなはち溫の壽昌の別源なり。一侍者はすなはち明の天童の了堂なり。二人同じくその法を嗣ぐ。定藏主はすなはち大慈の天宇なり、竺西の門に出づ。元の至正の間、江浙の行省丞相、達世鐵穆示公、兼て宣政院の事を行ふ。便ち行事を宣べて、特に兩度檄を馳せて、師を起して天童徑山に住せしめんと欲す。みな老病を以て辭す。

溫州壽昌の別源禪師は、奉化の人、久しく歸源に參ず。志ト擔荷を存す、餘蹤を躡ます。無際本公、江心に住す。晚に座を分つてチ衲を接せしむ。白鷺に出世するに蹔んで、無際以て禮を厚うして、其の法を嗣がんことを冀ふ。師笑ふのみ。酬恩のリ一鄉竟に歸源の爲に拈出す。叢林みな其人となりに服す。師三處に場を移す、門に入つては先づ客館を修繕す。凡そ須むるところの物畢く備はる。ヌ雲衲至れば私室に歸るがごとし。年六十七、微疾を得て、弟子仙巖の皓ル長老と、數語をヲ徵詰して、ワ奄然として逝す。

姑蘇承天の覺菴和尙、カ宗說兼通す、人之を稱して、小大惠と爲す。元の至元の間、ヨ華嚴宗の講主某あり。奏して、江南兩浙のタ名刹を易へて

ト擔荷。佛法を擔荷する。
チ衲を接せしむ。雲水僧を接得する。
リ一鄉。香なり。
ヌ雲衲。雲水の僧。
ル長老。年と德と共に高き僧を云ふ。
ヲ徵詰。こころみなじる。
ワ奄然。たちまち。
カ宗說。宗通、說通。
ヨ華嚴宗。華嚴經を主とする宗旨。
タ名刹。ここには禪宗の名ある寺をいふ。

華嚴の敎寺となし、敎のレ班資を陞して、禪の上に居らしめんと請ふ。旨を奉じて南に來りて承天に抵る。次の日、覺菴、陞堂に就いて爲に說法す。博く華嚴一經の宗旨を引いて、縱橫放肆、諸師の論解を剖析して、是非掌を指すがごとし。其の時華嚴講主の者、未だ聞かざる所を聞いて、大いに法益に霑ふ。且つおもへり、承天小寺の長老すら尙ほかくの如し、矧や杭の鉅刹の大宗師をや。因つて回り奏して、遂に前旨を寢む。實に覺菴の力なり。

僧導は吳興の人なり、元、江南を破つて、父は戮せられ、母は虜はれて北に行く。導乳を失ふ。伯父收へて之を育ふ。年十四におよんで、伯父に問うて曰く、「人皆父母あり、我れひとりなし。」伯父爲に所以をいふ。因りて發憤して母を求む。再び問ふ、「我が母の面目何にか類す。」伯父の曰く、「汝之に類す。」遂に鏡一ソ奩を携へて隨へ行く。髮を櫛る業を習ふて以て衣食を資く。十寒暑に涉つて得ることなし。忽ち河間府の狀元縣に至りて、牧馬の老軍に遇ふて與に語る。正に其の母を虜にする人なり、導を引いて家に歸る。坐未だ定まらざるに、俄かに老媼ありて外より入る。語南音を帶ぶ。導、鏡を出して自ら照すに、貌媼と類す。亟かに拜し亟かに呼んで曰く、ツ「娘々」と。媼鄉里姓名及び生時の歲月を問ふに、差ふことなし。是に於て母子相執つて大いに哭す。鄉民聚まり觀る。旬日を浹つて、導母を奉じて南に歸らんと欲す。其の家の老幼聽さず。因つて母を引いて、潛に遁れて楊州に達す。小

レ班資。列次を。
ソ奩。香合化粧ばこ。
ツ娘々。母のこと。

籃輿を置いて、母を輿中に坐ゑて、自ら負ふて行く。十歩に一たび置いて、必ず四方㋔膜拜し、然して後母を拜す。直ちに四明の補陀山に抵つて、觀音大士の現相を祈る。始めて故里に還る。既にして導出家を求む、母之に從ふ。久しからずして母死す。火化して灰燼の中に、小玉の觀音一軀を得たり。今に至るまで、宜興南門の外㋕精舍の中に留めて供養す。精舍は乃ち導が建つる所なり。

上天竺の我庵無法師は、黄岩の人なり、方山和尚に從つて落髮し、寂照に中竺に依る。箋翰に侍ることを獲たり。舅氏あり、敎庠の老成なり、之を挽いて宗を更へしむ。是に於て湛堂に演福に見ゆ。精を敎部に研く。寂照其の去ることを惜しんで、偈を作つて之に寄せて云く、「從レ敎入レ禪今古有。從レ禪入レ敎古今無。一心三觀門雖レ別。水滿二千江一月自孤。」後に出世して既に湛堂の嗣となる。仍つて一藁を爇いて、以て寂照に報ず。蓋し其の跡の異なるを以て、其の心を二つにせず。寂照示寂の時、師四明の延慶に住す。遺書して、其の力めて㋖大蘇㋗少林二家の宗趣を弘めんことを祝するのみ、餘は他の言なし。師又祭筵の中に於て、拈香して云く、「妙喜五傳最光燄。寂照一代甘露門。等閑觸着肝腦裂。氷雪忽作二陽春溫一。我思打二失鼻孔一日。是何氣息今猶存。天風北來歲云暮。掣電討二甚空中痕一。」年若干にして、疾なうして白雪堂に坐脫す。

㋔膜拜。兩手をあげ地に伏して拜す。
㋕精舍。寺也。佛僧の居所也。
㋖大蘇。諸注未だ詳ならず。
㋗少林。達磨の宗。

東岩和尚は江西の人、年八十一、四衆擧して、天童に住せしむ。維時天童㋘嚫弛の餘り、師年老いて此の重任を承くることを念うて、安處するに遑あらず。其の徒、東・圓・慶の三人を召して、分つて之に命じて曰く、「東我れ江鄉の士民と緣あり、汝往いて代つて吾が志を宣べて財を得て、爲に萬壽、乾元、寶閣を建て、範銅して千如來の像および供具を成せよ、汝其れ之に任せよ。」曰く、「圓汝吏事を諳んず、城中の官府、汝之を膺承せよ。」曰く、「慶汝心を小めて㋙謹愿なり、上下を㋚和燮し、㋛羸縮を考歷すること、惟だ汝爲に能くす。汝衣閣を守れ。」五年ならずして閣成り像備はる。餘貲を推して象山に就いて、海田一區を㋜隄して、以つて㋝齋盂を贍す。官府㋞恬熙し、上下㋟雍肅す。三人の力より出すといへども、苟に師の規訓㋠素あるにあらずんば、焉ぞ能く卒に之をして然らしめんや。近ごろ人の師となるものを見るに、務めて其の黨類を肥すに在りて、㋡常住の嚫弛を視ること、行路の人の、道旁の棄舍を視るが如し。略意と爲さず、惟しむべきをや。

㋢斷橋和尚、人と爲り峻硬にして、衲子に於て㋣許可を謹しむ。㋤國清に住せし日、泳象潭首座となり、垢㋥古田㋦書記となる、藏主は其の名氏

㋘嚫弛。やぶれとくる。
㋙謹愿。つつしみうやまふ。
㋚和燮。やはらぐ。
㋛羸。病弱。
㋜隄。堤に同じ、ふせぐなり。
㋝齋盂。盂は鉢盂。
㋞恬熙。安也、和也。
㋟雍肅。和欽なり。
㋠素。根本。
㋡常住。一山のことを一ケ寺のことにつかふ。
㋢斷橋。倫、禪師のこと。
㋣許可。悟道のゆるし。
㋤國清。天台山の寺名、台州に在り、甲刹の一。
㋥古田。諱は德垢、淨慈に住す。斷橋に嗣ぐ。
㋦書記。禪宗役僧の名。

を失す。結夏の秉拂、陞堂して謝を叙べて乃ち云く、「首座前輩に見え來る。稱譽にあらず。書記㋑提唱の語、人物を畫くがごとし、種々倶に備はる、但點眼を缺くのみ。藏主提唱の語、却つて箇の什麼を說くといふことを知らず、他時後日また老僧が㋺會中にありて、事を辨じ來ると道はん。」㋩是其の㋥主法を以て、己が任と爲して、肯て少しも威光を損し、後學を迷謬せず。之を抑すといふと雖も、實は之を扶けんと欲す。今の主法のもの、自家の眼既に明かならず、務めて甜糖蜜水を以て、悅を人に取る。其の相感じて、我が法嗣と作さんことを冀ふ。嗚呼斷橋をして、此の浮靡を見せしめば、豈惟だ唾罵するのみならんや。

鎭江普照寺の㋭喜吉祥は、山東の人なり。黑くして瘠せたり、肌㋬梵僧に類す。早歲にして父母に稟して俗を出でんことを求む。父母責むるに後なきを大とするを以てす。因つて從つて娶る。二子を育して始めて㋮沙門となることを獲たり。㋯唯識の業を習ふ。至元二十五年、薩禪皇帝、江淮三十六の御講所を剏立す。普照其の一に居る、師に詔して之を主らしむ。講說の外、日に華嚴を讀む、十卷を以て㋱常課と爲す。雲南の端無念と相友たり、無念は唯識宗の魁なり。師と佛理を詳論す、無念或は少しく失あれば、師言を正しうして之を救ふ。無念誠服せずといふことなし。臨終㋐火浴、舍利はなはだ夥し。其の徒骨石を留めて、貯ふるに㋑髹函を以てす。奉ずること二十餘年、始めて塔を丹徙の雩山に建つ。塔に入るるの日に逮んで、開きて視れば、但舍利の㋒函袱に㋓霑綴することを見る。蜂の屯し蟻の聚るがごとし。之に觸るれば㋔熠々然たり。鎭江の民、多く其の像を圖して、之を祠ることあり、稱して吉祥佛となすといふ。

明州海會寺の僧子安、元の至正癸卯の秋、山を買うて、寶旛市の上に庵を建つ。基を開く、古㋕葬三㋖竈を見て、土を以て之に實つ。庵成りて病を得たり。一夕夢に、酆都に入る、三人あり、衣冠甚だ古りたり。列して㋗獄帝の前に跪きて、安を訴へて曰く、「安㋘他生、姓は趙、名は仕宏、曾て吏と爲つて、私を以て我を屈して㋙流遠す。同じく屈を受くるもの四人、既に㋚肆赦することを獲たり。一人は生れて㋛白業を修し、死してすなはち超度す。惟我れ三人前後に死して、同じく此に葬らる。今來りて又我が陰宅を壞る、寃も亦深し。本力を共にして之を㋜殛す。念ふに其の吏たりし時、嘗て僧八十員を㋝供す。今乃ち僧となることを得たり、故に敢て爾らず。」獄帝安を召して前に致して、其の地を還さんことを責む。安責を受け、既に覺めて忽ち聞く。誠實の言、爽ふことなかれといふもの三聲、次

㋑提唱。說法の事に用ふ、古人の言を評唱するなり。
㋺會中。ついてゐる雲水中にと云ふこと。
㋩是。この字より、末尾の唾罵するのみならんやまでは作者恕中の慷慨のことば。
㋥主法。佛法を主すること。
㋭喜吉祥。鎭江普照寺の僧。
㋬梵僧。印度の僧。
㋮沙門。(Śramaṇa)僧侶のこと。
㋯唯識。唯識論を主とする宗旨。
㋱常課。毎日のきまり。

㋐火浴。荼毘なり。
㋑髹函。あかくろき、うろしのはこ。
㋒函袱。はこのふろしき。
㋓霑綴。ぬれつながること。
㋔熠々然。盛なる光。
㋕葬。葬ゐ。
㋖竈。地を穿つ穴。
㋗獄帝。閻魔王。
㋘他生。前生のこと。
㋙流遠。るざい。しまながし。
㋚肆赦。ゆるし。
㋛白業。佛法のつとめ。
㋜殛。きりころす。
㋝供。供養の略也。

の日㋙淨筵を設け、㋗榮枯木に命じて㋛說戒を爲さしむ。安が病隨つて愈ゆ。遂に庵を㋜拆いて、復た馬鬣を封じて去る。

史㋝僉事は鄆城の人、名は銓字は衡甫、父は憲夫、南臺の丈夫なり。至正辛丑、余と鄞に會す。極めて佛家㋞持誦の功德甚だ大なることを讃す。且ついふ、『親しく二事を見る、信に誣ふべからず。燕京に士人あり、常に㋟胝天の咒を誦す。忽ち一夕、㋠厖眉の老人あり、門を扣いて相告げて曰く、「某は人にあらず、乃ち龍なり、㋡行雨職を失するに因つて、㋢上帝譴むることあり、願はくは一㋣庇を求めん。」士人曰く、「我れ何の聖にしてか能く汝を㋤庇せん。」老人が曰く、「君胝天の咒を持す、功德無量。」いひ訖つて、老人見えず。後に數日、偶々左手拇指の甲下、隱々として微痛す。之を視れば一の細物あり。線の如くにして長け三四分、其の色紅にして狀龍の如し。士人呪を持すること故の如し。是の夜に於て、老人再び至りて謝して曰く、「庇に賴つて免ることを獲たり、願はくは公、卽今手を以て牕外に舒べ出せ。」既に之に從ふ、須臾にして雷雨大いに作る。但だ一龍の天を擘ひて飛び去るを見る。』

濟寧に信士あり、好く㋥打坐すること、凡そ二十餘年、一日家人に報じて言ふ、「我れ去らん。」是

㋙淨筵。きよき法のおまつり。
㋗榮枯木。高僧の名。
㋛說戒。佛の戒法を說く。
㋜拆。やめること。
㋝僉事。總理。
㋞持誦。經陀羅尼をよむ。
㋟胝天の呪。準胝佛母陀羅尼。
㋠厖眉。まゆげのあつきとしより。
㋡行雨。雨を降らす也。
㋢上帝。天。
㋣庇。ひさし、かげ、保護すること。
㋤庇。たすける。
㋥打坐。坐禪する。

に於て坐脫す。家人其の身を以て、推倒して枕に就かしむ。すなはち呼んで曰く、「かくの如くなることなし、かくの如くなることなし。」卽ち起きて躍りて池中に入つて死す。後に凡そ親舊に遇ふては、乃ちその姓名を呼んで、之と談論すること生けるが如し。或は酒を索めて飲む、人酒を以て池中に㋦滴瀝すれば卽ち謝して云く、㋧「構了。」かくの如きもの半年、後に僧あり、食を乞ふて其の家に至る。池中に人の語を作すことあるを聞いて、僧威を振つて喝して云く、「二十年の打坐工夫焉にかある。」此に因つて寂然たり。史公晚年禪誦、惟だ謹むことは是の二事の爲に、信を起すのみ

洪武五年、余上虞に客たり、蓋湖積慶の精舍に㋨夏す。偶々一朝、俞安人といふものあり、百官市より來る。前に㋩長跪して、自ら陳べて曰く、「吾吾夫と相得ず、㋪發心して㋫淨土を修す已に七八年、近ごろ一二年の中、毎に澄心靜坐の時に於て、空中の細樂及び鶴鸛の聲、洋々焉たることを聞く。余自らおもへり、勝境現前を爲すと、或は謂ふこれ魔境と、請ふ禪師之を決せよ。」予が曰く、「是汝、經中に風百寶の行樹を吹く、其の音百千の衆樂の如く、及び衆鳥の聲、一時に同じく作るといふの文あるを聞くに因つて、之を信ずること既に篤し。八識田中に根して、除き去るに由なし。靜定の中、乃ち發現するのみ。汝後に若しふたゝび此の境を見ば、勝想を作すことを得ざれ、亦魔の想を

㋦滴瀝。しづくがしたたる。
㋧構了。結構であつた。
㋨夏。安居を結ぶこと。
㋩長跪。ひざを兩つながら立てひざまづく禮儀。
㋪發心。志をおこして。
㋫淨土。念佛の業。

作すことを得ざれ、當頭に、他の興めに一坐に坐斷せば、すなはち惟心の淨土、本性の彌陀、全體みな是なることを見ん。豈十萬億遐方國土の外にあらんや。」俞手を以て自らの胸を指して曰く、「吾これより疑團㋓泮けぬ。」

台州廣孝、秋江の滿禪師は、黃岩斷江の人、幼にして、里の化城寺に㋔隷して落髮し、寺の右に岩壁あり、極めて高く聳ゆ、松巖と名く。其の巔に法輪寺の基あり、五代の唐の時、勤禪師の創する所なり。久しく廢せるを以て、遺址蕪沒す。師一日其の處に至りて、縱に觀て、覺えず悽感し、久客の乍ち歸るが如く、戀戀として去るに忍びず、是に於て傍の鉅石の下に就いて禪定す。鄉民之を聞いて相勸めて食を送り、資を出し工を僦ふて、興造數年ならずして叢林を成す。又寺の後岡に於て、塔を建て、歸藏の計を作す。忽ち一日、其の徒を督して塔を開く。尋いで人をして徧く請せしむ。凡そ往來の者、日を約して俱に山に到りて訣別す、期に至りて道俗坌の如く集まる。師是に於て、法輪の住持信道原等をして、饌を設けて生ながら祭らしむ。衆駭異して、年耄して潦倒すと以爲り。師之を促すこと愈々急なり。遂に草具を出して祭を致す。師堂上に坐して食を受く、餘は徒衆に與へて、一一霑味せしむ。信等文を讀み哭泣す、師も亦淚を墮す。是に於て、起つて行いて竈中に入りて安坐す。時に檀越、周衡之、觀音の像を以て讚を求め、及び衆遺偈を乞ふ。皆筆を迅して爲に書す。少頃ありて氣絕す、某の年四月二十三日なり。師遺命す

㋓泮。解と同じ。
㋔隷。屬する、つくと云ふ意。

らく、「肉いまだ冷えず、卽ち土を壅いで之を閉せよ。」衆忍びず、次の日始めて閉ぢ、塔を其の上に樹つ。師の族姓および嗣法出世の事、用章俊公の著はす所の傳に見えたりといふ。

道場の及庵信禪師は婺州の人、仰山の㋒雪巖に嗣いで、實行あり。四海の禪衲、生死を究明するに切なるもの、焉に從ふことを樂む。數尼あり、亦堂前に就いて、單を寄せて、衆に隨つて法を聽かんことを求む。不逞の曹、職を求めて允さゞるを用つて、誣ひて師尼に狎れて、私に相ともに亂るゝことを告ぐ。追はれて杭に到つて、五陌の家に拘はる。一夕疾なうして化す。闍維設利精瑩なり、誣ふるもの反つて坐せらる。靈隱の平山其の法を嗣ぐ。

仰山の雪巖和尙は婺州の人、志を立つること超卓なり。其の人に非ざれば與に交らず。早歲にして、㋖無準に徑山に見ゆ。鐘を鑄るに因りて㋗疏語を作らしむ。師偈を成して云く、「通身只是一張口。百煉爐中㋘袞出來。斷二送夕陽一歸去後。又催二明月一上二樓臺一。」是に於て命じて㋙侍司に居らしむ。職滿ちて準、別に職に代るものを請ず。師是の人と交承することを欲せず。準の送りて門に入るを望み見て、卽ち牕檻に伏して、嘔吐の聲を作すこと甚だ厲し、準其の情を知る。故に指して云く、「此の子福なし。」職始めて解き已りて、嘔血の病を得たり。大いに之を怒る、師絕だ意と爲ず。出世に暨んで、嗣法の薊、屢々拈出すと雖も、人に着かず。云へること

㋒雪巖。祖欽、無準に嗣ぐ、宋の名僧。
㋖無準。「ぶじゅん」とよむ。
㋗疏語。鐘を鑄る勸化の文章。
㋘袞出。袞は流れて盡きざる貌。
㋙侍司。侍者。

あり、「破蒲團上に、地裂け天崩る、人より得ずと云々」。復香を懷にして座に就く。仰山に至りて、始めて無準の爲に焚却す。尙ほ準的あり準的なしとの語あり。余謂らく、雪巖年少うして、邁氣に使はる、無準一代の宗師として、忍を含むこと能はず。父子の情乖くこと此の如くなることを致す。凡そ大方に據つて、㊂塵拂を握るもの、亦自鑑に足れり。

中峯和尙は杭州の人、既に師に投じて㊃祝髮受具し、志を決して參究す。古人の堂奧に到らざれば已まず、時に高峰和尙、仰山雪巖の㊄左券を負んで、天目の師子岩に居る。死關を立てゝ、誓ふて衲を接せず。一たび師を見て大いに喜ぶ。授くるに話頭を以てす。師勵精咨決す。㊅金剛經を誦するに因つて、荷擔如來阿耨多羅三藐三菩提といふ處に至りて、恍然徹悟す。是より惠辨無礙、上君王宰輔に至り、下三教の俊英に至りて、誠を傾けて道を問はずといふことなし。著すところの書、及び語錄若干卷、弟子則天如、徧集して奏して大藏に入らしむ。普應國師の號を追贈す。師形模魁碩にして、稍首を俯すときは氣喘す。常に平目安坐し、凡そ法語を求めんと請はゞ、兩㊆頭陀を以て、紙を扛げて筆に信せて之に書す。

㊇布衲禪師は明州定海の人、旨訣を高峰に得たり。嘗て㊈永明山居の詩を㊉賡續す。其の意趣相上

㊂塵拂。拂子。
㊃祝髮。かみをきる。
㊄左券。印可證明。
㊅金剛經。一卷。
㊆頭陀。乞食、乞士と譯す、僧といふことに代用す。
㊇布衲。祖雍。
㊈永明。「やうめい」とよむ。
㊉賡續。韻を次ぐ。

下せず、而も句法圓熟して、間之に過ぐるもの有り、臨終に偈を書して、「中天竺の桂子堂に坐逝す、火餘設利すこぶる多し。」

誠止岩、杭の虎跑に住す。初布衲に參ず、次に天池の元翁信公に見えて省あり、其の法を嗣ぐ。虎跑產業素より薄し、僧數十人あり、師每日托鉢して之を贍はす、㊁祁寒溽暑にも少しも懈らず。年老いて疾を示して坐逝す。

珙㊀石屋、及庵に道場に見ゆ。後に吳興の霞浦山に隱居す。清苦を以て自ら持す、檀施に干らず、苟も食を絕して水を飲むのみ。人と爲り慈詳にして物を閔む。㊂伽陀を作爲して警發の語多し。眞に末世の善知識なり。

㊃無見禪師は仙居葉氏の子、世儒を業とす。俊才を以て、天寧古田の內記を掌る。方山禪師に瑞岩に參じて、盡く其の要領を得たり。翻然として可藏主といふものを㊄拉して、同じく華頂に至り、宋の高庵所居の故址を尋ねて、茅を結んで居る。是に於て道化大いに行はれて、學者雲の如くに集まる。道俗以爲く、田なくんば以て衆を蓄ふべからずと。往々に田券を持して來り施す。師皆之を卻く。冬夏一衲、食惟饑に充つ。麁細を分たず、遷化火浴、忽ち胸堂の中、清水迸り出でて瓶の注ぐが如し、舍利を得て大いさ菽の如し、人の目を光耀す。今に至るまで、山中に存して供奉すといふ。

㊁祁寒。おほいにさむし。
㊀石屋。清珙。
㊂伽陀。偈の梵語なり。
㊃無見。先覩。
㊄拉。つれると同じ。

斷崖義首座、高峰に參ず。語の契はざるに因り、峰之を㋑擠す、竟に懸崖の極底に墮す。この夕大いに雪ふる、衆其の已に死せるかと疑ふ。次の日雪晴る、同參の者、薪火を㋒賫んで、尋いで其の處に至る、就いて其の屍を焚かんと意へり。師古樹の下磐石の上に危坐す。之を撼かせば、乃ち目を張つて四もに顧る。殊に擠墮㋓雪寒の者ある事を知らず、歸つて復た峰に謁す。峰默して之を異とす。是より道譽日に振ひ、緇素歸依す。凡そ所問あれば、惟杖を以て之を打つ。言氣を露さず、其の自ら會せんことを要す。近代の宗師、多くは言說を以て人の爲にす、師獨り然らず、尙ぶべきのみ。

徑山の本源和尙、諱は善達、仙居の柴氏に出づ。蚤年にして及庵信公と行脚し、誓つて職を歷ず。西江に往いて雪巖に見ゆ。衆に隨つて入室す。一日、岩其の人物の㋔表々として進止度あるを見て、授るに堂司の職を以つてせんと欲す。師及庵に謀る。庵曰く、「我公と昔より誓あり、今違すべけんや。」師遂に止む。後に仙居に歸る、里人請じて多福を主らしむ。棄て去りて湖南に遊びて、福嚴に主たり。福嚴は唐の時の道觀なり、㋕思大禪師に至つて、易へて寺と爲す。道士多く樂まず、禪師誓ふて其の黨をして、後に皆住持となさしむ。中に一人あり、姓は木、名は達善、今師の姓名、適々相符ふ、惟錯亂するのみ。人是を以て知んぬ、師は乃ち木道士の再世なりと。後浙西に還つて、徑山の雲峰に見ゆ。入室省あり、適々惠雲席を虛にす、師

㋑擠。おとしいる。
㋒賫。携ふに同じ。
㋓雪寒。寒さも雪も知らぬ。
㋔表表。御手本なり。
㋕思大禪師。南嶽。

之を補す。一香始めて雲峰の爲に拈出す。後㋖保寧・淨慈・徑山に住す、皆成績の紀す可きあり。師凡そ住處、臥榻を設けず、夜はすなはち燭を秉り香を焚いて安坐し、旦に至つて衆に赴く。率ね以て常と爲す。又體の羸くる所人と異なり、嚴寒に遇ふときは則ち㋗絺綌を衣、熱には則ち緇絮を衣、餘貲を以て大圓院を徑山の東路半山に剏めて、雲侶を接待す。忽ち一日、自ら時の至ることを知つて、衆を會めて、平生行脚の事を敍べ畢りて、須臾にして寂す。叢林の中、或は其の職を歷ざるを以て、之を鄙む。百丈いまだ名職を立てざる以前に當つては、人惟だ道是を務む。心地を悟明し、力めて大法を荷ふに至りては、杲日天に麗き、疾雷地に震ふが如し。含識の流、其の照燭警發を受けずといふことなし。知らず當時何の職をか歷る、亦之を鄙むべきや否や。

易首座、字は無象、宋の將家夏氏の子、膂力人に過ぎて、武技最も精し。曾て父の爵を襲つて樂まず、官を棄てゝ、上虞の奉國寺に隷して出家落髮す。其の師心經を誦せしむ。三日に一字を記せず、因つて大いに之を惡む。俄に僧善妙峰といふものあり、其の寺に過ぎて、其の師に謂ふて曰く、「此の人既に字を識らず、惟だ危坐を好む、恐らくは是れ禪定の中より來るならん。以て我に與ふべしや否や。」其の師欣然たり、命じて與に俱にす。首め雪竇に抵りて㋘挂搭を求む。孜々として參究し、脇席に至らず。忽ち一日㋙定し去る、屹として枯株の如し。㋚隣單に正首座

㋖保寧。建康府に在り、甲刹の一。
㋗絺綌。絺はほそかたびら、綌はふとかたびら。
㋘挂搭。錫を挂く。雲水僧初めて入學するを云ふ。
㋙定。入定。

といふものあり、常に之を候ひ伺ふ。七日を經て、徐々として定を出で、慶快あるに似たり。清夜に廊廡の間に徐歩す。正云く、「且つ喜すらくは大事了畢。」易不レ答、見る所の鐘樓を指して、口を肆にして偈を說くと云々。又正の言を以て、黎明に卽ち錫を振ふて、程を兼ねて疾く馳す。纔に二日にして、華頂に抵りて溪西和尙に謁す。曛黑にして門已に閉づるに値ふ。遂に門外に止宿す。昧爽に門啓く、入つて溪西に見ゆ。往復勘對して旨を悟る。香椅を踢倒して卽ち行く。溪西喚び回せども顧へず、竟に山を下る。遂に杭の天目に往きて高峰に謁す。機語尤も契合す。首座となさしむ。至正の初め、明の海會に來つて一室に端居す。諸緣を㋒棧絕して影戶を出でず。道具側を離れず、人咸之を敬ふ。至正甲午正月、忽ち侍僧に謂うて曰く、「吾來月二十四日を俟つて、暫く江東に遊戲せん。」期に至りて、沐浴して衣を更ふ。行纏を索めて足に繫け、僧に命じて扶けて佛前に至る。禮三拜し退いて趺坐して、衆に告げて曰く、「吾れ前日豈汝に向つて、今日に在つて遊戲せんといはずや。」乃ち泊然として終ふ、壽九十九。龕を停むること七日、顏貌鮮明にして、手足柔暖なること生けるが如し。闍維惟だ火光迸散するを見る。衆丸の跳躍するが如し、絕して煙靄なし。既に燼して設利を獲ること、其の數を計らず。

㋒隣單。となりの席。
㋓棧絕。或は杜絕ともいふ。

國譯山庵雜錄上　終

國譯山庵雜錄下

天台沙門釋　無慍　述

湖州妙覺の㋑期堂僧淨は、吳江田家の子なり。幼にして學を失す、既に度を得て妙峯の玄に謁す、玄は㋺中峯の子なり。其れをして父母未生已前、那箇か是我本來の面目といふに參ぜしむ。淨如レ是參ずること三十年、所入なし。後に明州華嚴寺の僧照公、湖に至つて與に同じく處る。其れを勉めて楞嚴經の中、觀音圓通一品を誦せしむ。忽ち一日誦して「生滅既に滅して寂滅現前す」といふ處に至りて、豁然として省あり。通身歡喜して、口言ふこと能はず、惟手足舞蹈するのみ。或人問うて云く、「汝風顚するや。」答へて曰く、「寂滅現前す」と。洪武の初め十月二十五日、照公に謂ふて曰く、「十一月旦は是れ我が生日、此の日に於て死し去らん」と。期に至りて沐浴して衣を更へ、祝香三片し、一は釋迦文佛に奉じ、一は無量壽佛に奉じ、一は山主了公に奉ず。公は蓋し其の得度の師なり。且つ左右に囑して云く、「我れ死して後、三日にして茶毘し、七日にして骨を鍛せよ。但恐らくは鍛を受けざらんのみ」と。人皆其の言を疑ふ。骨を以て鍛に入るに及んで、骨鎔溢して汁と作る。火冷かにして結んで靈芝一枝と作る。

㋑期堂。明堂ならん。
㋺中峯。明本、高峯に嗣ぐ、元の名僧、天目山に住す。

光彩燁々として、五色相間る。之を扣けば聲を作す。雕鏤繪畫すと雖も如かざる所あり。今に至るまで靈芝、妙覺の㋑期堂に在り。

燕城慶壽寺の海雲大士、諱は印簡、山西の人、姓は宋、七齡にして父授くるに孝經の開宗明義の章を以てす。師問うて云く、「開くもの何の宗ぞ、明らむるもの何の義ぞ。」父之を異なりとす。携へて傳戒の顏公に見えしむ。公其の根器を觀んと欲して、㋺石頭和尙草庵の詩を以て、命じて之を讀ましむ。「壞と不壞と主元在り」といふ處に至りて、乃ち問うて云く、「主什麼の處にか在る。」顏云く、「什麼の主ぞ。」師云く、「壞と不壞とを離るゝもの。」顏云く、「此れ正に是客なり。」師云く、「主㋭に聲。」顏吟笑するのみ。卽ち往いて中觀の沼公を禮して、師と爲して薙落受具す。偶々一夕、空中に聲あるを聞くに、師の名を召して曰く、「印簡、大事將に成せんとす、行け、此に滯ることなかれ。」遂に㋻策を挾んで燕に之く。松鋪を過ぎて雨に値ふて岩下に宿す。因に同㋼行のもの火を擊つ、師火星迸散するを見て、遂に大悟す。手を以て面を捫つて曰く、「今日始めて知る、眉は橫に鼻は直なることを。」遂に慶壽中和の璋公に謁す。先きに一夕、公一りの異僧を夢み、杖を策いて徑に方丈に趨つて獅子座に踞すと。明日公所夢を以て左右に語る。且つ曰く、「今日㋽暫到の至るあらば、卽ち引いて我に見せしめよ。」日晡るるに迨んで師至る。公笑つて曰く、

㋑期堂。明堂か。
㋺石頭。無際希遷、唐代の名僧、青原思に嗣ぐ。
㋭聲。發音上の餘聲にて意なし。
㋻策。つゑ。
㋼同行。同じ行脚の連。
㋽暫到。新しくでてきたるを云ふ。

「此の衲子卽ち夜來夢むる所のものなり。」往復徵詰するに、師の機語捷出透脫して滯りなし。公喜んで命じて記室を典らしむ。智證益々深し、乃ち衣頌を以て師に授く。頌に曰く、「天地同根無二異殊一。家山何處不レ逢レ渠。吾今付ヲ與空王印一。萬法光輝惣一如。」出世して璋公の嗣と爲る。諸名刹を歷て、凡そ再び慶壽を主る。太祖より世祖に至るまで、㋾屢朝之を師として奉ず。位㋿僧統に至る、顧遇優渥、年五十六、忽ち風痺を患ふ。一日偈を說いて衆を辭し畢りて、侍僧を顧みて云く、「汝等喧しきことなかれ、吾假息せんと欲す。」侍僧急に主事の人を呼んで至らしむ。師已に吉祥臥して逝す。闍維設利を獲ること算なし。勅を奉じて、慶壽寺の側に葬つて、石塔を其の上に建つ。佛日圓明大師と謚すといふ。

至元二十五年の春、僧統楊耋眞迦、旨を奉じて江南の㋿教禪の諸德を引いて、㋾闕に詣して道を論ぜしむ。上問ふ、「禪何を以てか宗と爲る。」是に於て、徑山の住持妙高、進前して答へて云く、「禪といふは、淨智妙圓、體本空寂、見聞覺知の知るべき所に非ず、思慮分別の能く解する所に非ず。」上又云く、「禪の宗旨、歷說一遍すべし。」高云く、「禪の宗旨は、釋迦世尊、㋾靈山會上に在りて、一枝の金色波羅華を拈起して、普く大衆に示す。惟㋿迦葉微笑す。世尊の云く、『吾に正法眼藏、涅槃妙心あり、迦葉に分付す』といふより始る。此に由つて代相授受して、菩提達磨に至る。達磨、此の東震旦國に大乘の根器あることを望ん

㋾屢朝。何代も。
㋿僧統。僧の頭分。
㋿教禪。佛教を教禪に二大別す。
㋾闕。宮中。
㋾靈山。靈鷲山。
㋿迦葉。(Mahākāśyapa)十大弟子の第一。
㋾一番。まつ先に。

で、海に航して來る。文字を立せず、直に人心を指して、見性成佛せしむ。是を禪宗と爲す。」上之を嘉す。高因つて從容として進んで云く、「夫れ禪と敎と本一體なり、譬へば百千異流の同じく海に歸して、異味なきが如し。又陛下の坐ながら山河を鎭して、天下一統、四夷百蠻、方に隨つて至る。必ず順成門外よりして入る。黃金殿上に到り得て、親しく金面皮を覩るが如し。方に之を家に到ると謂ふべし。若し是敎家ならば、只文字語言に着するに依りて、玄旨に達せず、猶ほ是れ順成門外の人なり。若し是れ禪家、六七箇の蒲團を坐破すと雖も、未だ證悟を得ざれば、亦是れ順成門外の人、之を家に到ること俱に未だしといふ。是則ち敎を習ふものは、必ず須らく玄旨に達すべし。禪を習ふものは、必ず須らく自心を悟るべし。臣等が如くんば、今日親しく黃金殿上に登つて、面りに金面皮を覩ること ㋓一番、方に家に到る人と稱すべし。」上喜びて食を賜うて退く。

夢堂和尙、重ねて晉・唐・宋三代の高僧傳を修す、十科を易へて六學と爲す。禪學の中に二祖㋕可大師、臂を斷つて法を求むる事、禪書に之を載するもの一ならず。獨り㋖宣律師謂ふ、師は賊に遭ふて臂を斷たる。同居の琳法師にも、尙之を知らしめず、琳法師も亦斷臂の害に遭ふに及んで、可大師之が爲に包治す。運用不便なり、琳之を恠しむ。大師因りて曰く、「爾豈我も亦臂なきことを知らんや。」夢堂之に遵つて傳に入れんと欲す。余當時之に告げて曰く、「大師、大法未明の爲に、深雪の中に㋝僵立す、命も亦惜しまず、況んや一臂をや。苟くも斷臂は人の難む所といふ。今世の小丈夫、心根を操ること暴なるもの、往々に之を爲す。曾て謂ふ、大師、法の爲に軀を忘る、志を秉ること㋞懃懃なり、顧るに能はざらんや。假令盡く律師の所傳の如くなりとも、豈賊來りて人を傷くるに、專ら其の臂を斷つこと有るのみならんや。然れども臂既に斷つ、焉ぞ之と同居するもの、而も知らざることあらんや。又焉ぞ能く人の爲に、其の臂を包治せんや。此れ決して信ずべからず。」夢堂の曰く、「律師は乃ち肉身の菩薩、其の言豈誑ならんや。」余が曰く、「律師所傳の人、一一親しく其の行業を覩るに非ず、必ず他人の采集する事跡を藉らん。此を以て之を推せば、蓋し采集のもの、訛謬の在るあらん。律師必ず禪律を以て宗を異にして、誣ひて此の說を爲さざること㋟斷々せり。蓋し亦信は以て信を傳へ、疑は以て疑を傳ふるの意なり。然らざるときは、すなはち後の肝膽、吳越の者、妄りに更易を加へて、律師に假りて以て信を世に取るのみ。」是に於て夢堂首肯す。遂に傳燈に依りて傳に入る。

佛光の道悟禪師は、陝右蘭州の人、姓は冠氏、生れて齒あり、年十六にして祝髮す。後二年にして游方し、臨洮より歸りて、夜彎子店に宿す。梵僧喚び覺すと夢む。適々馬の嘶きを聞いて、豁然として開悟し、自ら吟唱して云く、「好也羅好也羅、遍二虛空一只一箇。」其の母に告げて曰く、「我れ夜來一物を拾ひ得たり。」母問うて云く、「爾何物をか拾ひ得たる。」答へて云く、「無始より以來打失底の物。」一日

㋕可大師。達磨に嗣ぐ、惠可也。
㋖宣律師。道宣。
㋝僵立。たふれたつ。
㋞懃懃。ねんごろ。
㋟斷斷。守りて變ぜざる、專一のこと。

知識に參訪せんと欲す、里人偈を師に覓む。師の偈に、「水流須レ到レ海。鶴出白雲頭」といふの句あり。熊耳に至りて、白雲の海公に謁するに及んで ㋐契合す。是より先、公に「何ぞ ㋑法嗣を擇ばざる」と問ふものあり、海答へず。徐く云く、「芝蘭秀發して獨り西秦に出づ」と。師の至る比、公空中に人の語るを聞くに、曰く、「來日郭相公を攝せん。」蓋し海の所住の寺は、乃ち郭子儀が建つるところなり、而も師は其の後身なり。海公歿して、師出世して鄭州の普照寺に住して、其の法を嗣ぐ。既にして竹閣庵に退居して、洛川に浮沈す。人之を測ることなし。嘗て人に謂ふて曰く、「我れ是れ凡と道へば、我れ聖位の裏に向つて去り、我れ是れ聖と道へば、我れ凡位の裏に向つて去り、我れ是れにあらず是れ凡にあらずと道へば、我れ儞が眼睛鼻孔の裏に向つて、七顛八倒し去る。」泰和五年五月十三日、疾なうして逝す。適々所居の屋上に、五色の雲の蓋の如くなるあり、中に紅光あつて、圓なること日の如くなるもの三つ。壽五十五。

呉興何山㋒著舊の僧某、權を擅にして衆を侮る。素行不軌なり、尤も殺生を嗜む。一日猪を宰して客に饌す、先づ首を以て鍋に入れて之を煑る。自ら去りて其の生熟を候ふ。忽ち一人の首、目を張り齒を咬んで、頭髮蓬亂して、沸湯の中に於て、翻覆するを見る。畏るべし、僧之を見て怖懼戰慄して、容るゝ所なきが若し。他人をして之を覘せしむるに及んで、猶ほ豬頭也、其の僧此に因つて、行を改め善に從ふ。

㋐契合。うまくあふ。
㋑法嗣。法の系圖をいふ。
㋒耆舊。ふるくから居て年まで古き人。

趙文敏公、寂照先師を杭州の廨宇に訪ふ。茶罷んで公近詩を擧す。「了二此清淨障一」といふの句あり、先師の云く、「清淨焉ぞ障有ることを得ん。」公曰く、「垢汚を厭ひ清淨を愛す、障に非ざることを得んや。」先師の云く、「將に謂へり、是れ箇の翰林の官人と元來是れ箇の冠巾の和尚。」公因りて云く、「老母某を誕するの日、一の異僧室に入るを夢む。平生禪宗向上の提持に於て、未だ盡く解すること能はず、然も經敎に載するところの若き、之を讀んで卽ち大意に通ず。」

輝東溟は黃岩の人、義方右丞の妻は母たり。勢を倚み强きを恃みて、先輩を蔑裂す。靈石の蓮一舟は、法を龍翔の笑隱に得て、宣政院の檄を受けて、本寺に住持す。東溟攘んで之に居る。又鴻福安國の兩刹を估ふて、一ら己れ三處の住持の事に任ず。意を恣にして非を爲す。一夕酒に醉ふて睡起し、眼に靈石の伽藍神、鬼卒をして、其の頸を扼ぎ、膝を以て腰を築かしむるを見る。其れをして跪かしめて、亂杖に之を捶つ。且つ自らの名を呼んで云く、「宗輝、此の回敢へて常住の物を盜まじ、神幸に我を宥めよ、神幸に我を宥めよ。」如是きこと三年にして始めて卒す。

鄞縣寶幢市の周婆は、生れながらにして淨土を修す。毎に歲首に遇ふて不語を持す、晝夜長坐して正月を盡す。盛暑に遇ふては、據會亭に就いて、茶湯を施して一夏を盡す。年七十餘、一夕夢に、大荷葉の徧く寶市一境を覆ふ、手に念珠を持して、荷葉の上に行道すと見る。既にして微疾を得、隣人、夜幢旛寶蓋の其の家に入るを見る、黎明に婆已に合掌念佛して逝す。嘗て聞く、佛のたまはく、

「末法の中、㋐南閻浮提の女人、淨土に生ずることを獲るもの、多くして雨點の如し」と。今周婆を以て之を觀るに、良に信ず。洪武庚戌の冬、奉化の田子中、余を太白に訪ふ。同居するもの久し。余偶々言ふ、「金剛般若經は、閻羅王界に稱して功德經と爲す、故に世人、亡者を薦むるに多く之を讀む。」子中誓ふて身を終るまで受持す。一日其の母の諱日に値ふて、心を發して此の經を誦すること百過以て薦む。晨に起きて松榻の上に坐して、方に誦して九遍に至る。鬼卒の一老媼を枷杻して、榻前に跪かしむるを見れば、髮㋑離披として面を覆ふ。熟々之を視れば、乃ち亡母なり。子中倉卒として爲る所を知らず、須臾に引き去る。將に枷を脫せんとするものの若し。是に於て、子中大いに泣く。恨むらくは卽時に經を輟めて、母と相勢問せざることを。余謂へらく、此の經功德の大なること喻を云ふべからず、子中心を發して持誦するが若くんば、卽ち冥に陰界に感じて、母子をして兩たび相見することを得せしむ。以て其の苦を釋す。嗚呼偉いなる哉。

育王の虛庵實首座、臥雲庵主に寄する偈に云く、「黃金園裏馬交馳。徑寸多成二按レ劍疑一。月晒二梅華一千樹雪。臥雲一枕夢回時。」天童の幻庵住首座、應庵の塔を拜する偈に云く、「眈々睡虎管窺レ斑。便把二中峯一作二靠山一。不レ得二破沙盆一箇一。子孫乞レ活也應レ難。」默中の唯西堂蠶を詠ずる偈に云く、「桑空柘盡始心休。綿密工夫一繭收。爐炭鑊湯拚得入。爲レ人只在二一絲頭一。」佛隴

㋐閻浮提。この我等の在る世界。
㋑離披。ばらばらにかぶる。

の宜行可雨を聽くの偈に云く、「檐前滴々甚分明。迷レ己衆生喚作レ聲。我亦年來多逐レ物。春宵一枕夢難レ成。」噫四人の學者の偈語、工みなりと雖も、當時に在つて、已に泯々として聞ゆることなし。余故に之を錄して以て、後學に示す。

竺元先師、老年にして、天台の紫籜山に閑居す、而も來學を策發して倦まず。嘗て謂ふ、「頌を做すは、須らく事理俱に到るべし。譬へば索を打するが如し、兩股緊緩同じからざるときは、則ち堪へず、㋒大川和尙、蜘蛛の頌を作る固に好し、但其の中の三字、理に於て固に害なし、事に於ては、則ち然らず、其の頌に云く、『一絲挂得虛空住。百億絲頭殺氣生。上下四圍羅織了。待レ無レ漏レ網話方行。』末後の三字、蜘蛛に於て却りて交涉なし。又㋓出山の相に題するに云く、『龍姿鳳質出二王宮一。垢面灰頭下二㋔雪峯一。誓願欲レ窮二諸有海一。不レ知諸有幾時窮。』雪峯を以て㋕雪山に易ふ、韻に拘はるのみ。而も此の地に雪峯あり、其の名既に顯はる、妨げあることを覺ゆるに似たり。所以に純ならず。」又云く、「㋖虛舟金山に住す、雪に因りて上堂に云く、『一夜江風㋗攪二玉塵一。孤峯不レ白轉精神。從レ空放一下例に隨つて顚倒す。其の所以を叩くに因る。』師乃ち云く、「古人の謂く、『雪覆二千山一因レ甚孤峯不レ白。』

㋒大川。普濟、徑山斷翁に嗣ぐ、靈隱に住す。
㋓出山。釋尊の雪山成道の圖。
㋔雪峯。福州。
㋕雪山。今の印度のヒマラヤ山。
㋖虛舟。普度、この本の作者と同參。金山。
㋗攪。かきまはす。

此は是れ一轉語なり、而も虛舟、以て孤峯實不レ白と爲るは誤てり。」又云く、「大凡入院の佛事、精妙を得がたき者は、蓋し作者多き故なり。東嶼、淨慈に住す、㋐山門の㋑佛事に云く、『清淨慈門。一湖秋水。入得入不得。虎咬ニ大蟲一。蛇呑ニ鱉鼻一。且移ニ他處一用不レ得。』竹泉㋒中竺に住す、㋓佛殿の佛事に云く、『㋔撥レ塵見レ佛。誰知佛亦是塵。罕レ逢ニ穿耳客一。多遇ニ刻レ舟人一。』甚だ體裁あり、學者法と爲しつべし。

元庵の會藏主は臨安の人、久しく淨慈の蒙堂に居る、雅より趙文敏公と善し。公嘗て與に其の作する所の詩を寫して、巨軸と成し、復た其の後に題す。人皆以て夸れりと爲す、元庵㋖漠如たり。寺僧澤藏山といふもの、資を出して、涅槃堂の把針板㋗疇所溺坑を繕修す。禪流謝するに、偈卷を以てす。元庵之を見て懌びず、衆其の作を請ふ。遂に偈を成して云く、「涅槃一路盡掀翻。觸處工夫見不レ難。洗面驀然摸ニ着鼻一。繡針眼裏好藏山。」時に㋘晦機和尚住持たり。特に上堂して之を稱美す。此の偈を以て之を推すときんば、則ち其の詩の精絶也知んぬべし。

中天竺の一溪和尚、諱は自如、福建の人、元の兵江南に下る。師年少く、游兵に虜はれて臨安に至りて、之を遺して去る。臨安の富民胡氏、收めて之を養ふ。其の子弟に伴つて、書を鄉塾に讀まし

㋐山門。禪寺の表門。
㋑佛事。入山上堂の式に山門佛殿等それぞれ法語を唱ふるは禪宗式なり。
㋒中竺。中天竺の略也。
㋓佛殿。本尊及び天牌等を安置して誦經するところ。
㋔撥。かきのける。
㋖漠如。おとなしきこと。
㋗疇所。洗面するところ。
㋘晦機。諱は元熙、徑山に住す、宋人、物初觀に嗣ぐ、大惠四世。

む。師隅に立ちて、神を凝して靜かに聽く、默識失する所なし。胡氏、喜びて因つて之を子とす。既に長じて、命じて里中の無相寺に隷して僧と爲す。雲峰に徑山に參じて旨を得たり。戒檢精嚴にして、法服㋙應器體を離れず。又能く楞嚴・法華・維摩・圓覺等の經を誦す。初め淛江の萬壽寺に住す。寺の後に富民黃氏あり、師の戒行を重んじて、常に供するに㋚伊蒲塞の饌を以てす。一日請じて其の家に歸る、進供愈々勤めたり。乃ち私帑を開いて、師に藏す所の金玉異寶を示して、其の心を動せんと欲す。師歸つて左右に謂ふて曰く、「彼の黃氏は帑中の寶を以て、我に示して我を眩して死し去つて、其の子と爲らんことを欲するのみ。殊に知らず、我金玉を視ること、瓦礫の如くなることを。古人此の轍に墮するもの、頗る衆し、獨り其の子となるのみに非ず、其の牛馬と爲るもの之あり。我此れより、其の黃氏を疎んず。」天曆の初、中天竺の住持笑隱訴公、詔を奉じて大龍翔寺を興建す。因つて舉して、代つて中竺に住せしむるもの三人、上御筆を以て師の名を點す、宣政院、疏を具して禮請す。未だ幾くなるざるに化し去る、靈異多しと。

饌塘の廣化寺の住持覺宗聖は、徑山の㋛本源所度の弟子なり。羣弟子の中、唯師最も少し、常に其の慢侮を受く。是に由つて志を勵まして、孜々として學を講ず、遂に夢堂に四明に從ふ。時に恠石大慈に住す、固く其れを招いて侍司に居せしむ。未だ幾くならずして、又㋜石室に從つて詩を學ぶ、詩日に其の奧に臻る。

㋙應器。應量器の略、鉢盂なり。
㋚伊蒲塞。最上の美味の名也。
㋛本源。徑山の名僧。
㋜石室。石室和尚詩に顯る。

趙公子昂・虞公伯生・張公仲舉が若き、皆之を稱賞す。尤も廉信に篤し、苟も一ら人に食まず、人と期すれば、風雨と雖も爽へず。中歳絶學の旨を究む。初め仲謀和尚に參じて㋒所入なし、遂に南堂に㋓本覺に叩く。南堂の曰く、「汝は自ら是了事の人、但聞見甚だ多くして、胸次に隘塞す、以て本地の風光、發現すること能はざることを致す。」是に於て、隨つて問うて曰く、「如何なるか是れ佛。」南堂の曰く、「晨朝粥あり、齋時飯あり。」再び進語せんと擬す。南堂手を以て㋔揶揄して曰く、「不是不是。」宗聖其の爲に明白に說破せざることを恨む。次の日謁して云く、「和尚大㋕爐鞴を開いて聖凡を鎔鍛す、我正に一塊の頑銅鈍鐵の如く、其の中に投入して、以て鍛鍊して美器を成就せんことを求む。若し能はざるものは、是れ和尚の爐鞴熱を欠くのみ。」南堂其の㋖虔懇を念ひ、曲に之を誘うて曰く、「我此の法門、只直截承當を貴ぶ、世智辨聰に在らず。若し能く決烈の志を發して、一刀兩斷せば、什麼の頑銅の鍛ふべきかあらん、什麼の美器の成すべきかあらん。此の二途を去けて、父母未生以前に向つて、一句を道へ看ん。」宗聖無語。後に古人に效つて、彌勒佛の像を頂き、旦暮行道して尊號を稱念し、兜率の內院に生れんことを祈る。仍つて詩を賦して以て自ら㋗見はす。年六十二にして疾を得たり、左右に命じて、平日の詩文藁を取りて、悉く之を火きて乃ち逝す。師は黃岩の人、族は蔡氏、恠石に嗣ぐと云ふ。

㋒所入。悟ること。
㋓本覺。本心妙覺の佛智也。
㋔揶揄。からかふ。
㋕爐鞴。ふいご、禪宗の說法の場處にたとへる。
㋖虔懇。熱心なこと。
㋗見。世間に知らしむ。

無言和尚、江心の㋑東堂寮に居す。榜を門に掲げて云く、㋺「齋前は看經坐禪、齋後は接客作務。」而も常住の庶事に於て、未だ嘗て言ひ及ぼさず。或は師に對して、當代の住持を讃毀することあれば、惟だ含笑するのみ。叢林の曲故宗門の綱要を論ずるに至るときは、亹々として笑譚し㋭終日倦むことを忘る。蓋し近代東堂の體たることを得たり。一日澡洗し畢つて、竹牀の上に偃臥す。乃ち自ら笑つて云く、「老いて不好なり。」之を撼せば已に化す。時に無際和尚も亦東堂と爲る。石室の岩公住事を領す。學問膚淺にして、眞率餘りあり。寺の耆舊は皆師の徒弟なり、師其の住持を慢らんことを慮る。凡そ㋻旦望に說法を聽き罷んでは、俱に師の處に詣して禮を作す。師必ず其れをして、上堂の語を擧せしむ。乃ち㋼唧々として云く、「今日長老好上堂、其の作、住持を成ずるに㋽方あり、徒弟を馭するに法を得たり。」岐上座といふものあり、乃ち明巖熙公、所度の子なり。一日郁山主、驢に跨る圖を持して、無際を請じて題せしむ。師筆を援いて偈を成して曰く、「策㋿蹇溪橋一蹉脚時。㋾悞將三豌豆一作二眞珠一。兒曹不レ解藏二家醜一。笑倒㋿楊岐老古錐。」乃ち問うて云く、「爾且く道へ、楊岐の㋿者の一笑、什麼の處にか落在する。」岐云く、「無レ風荷葉動。必定有二魚行一。」師掌して云く、「歸り去つて師の前に分明に擧似せよ。」其の方便人の爲にすること、又此の

㋑東堂寮。前住のをるところ。
㋺齋前。今の十二時前即ち食前。
㋭亹亹。つとめて倦まざること。
㋻旦望。一日と十五日。
㋼唧唧。蟲のなくこゑにたとへる。
㋽方。道。
㋿者。あしなへ、びつこ。
㋾悞。誤。
㋿楊岐。方會禪師、慈明に嗣ぐ。
㋿者。這のなり。

如し。岐上座は卽ち大梅の仲郎なり。

㋐虛谷和尙は婺州の人、淨慈㋑石林和尙の會中に、內記を掌つて記室に昇る。貧しうして苦學す、寒暑一なるが如し。嘗て夏を太白に度る、㋒東淨の手巾を竊んで褻衣と爲す。後出世して仰山を領ずること三十年、徑山六年、東淨の手巾に囑して、字を題することを許さず、意貧を贍はすに在り。早年にして夢むらく、淨慈の羅漢堂に入りて、東南の隅に至る、忽ち一㋓尊者、楣梁の間の詩を指して、師に示して云く、「一室寥々絕頂開。數峰如レ畫碧於苔。等閑翻二罷㋔貝多葉一。百衲袈裟自剪裁。」初め其の意を諭さず、二利を主るに迨んで、良に驗す。蓋し仰山に貝多葉の經あり、而も徑山に楊岐の衣あり、吁師の出處、彼の㋕應眞の者、之が前定を爲す。果位の中の人に非ずんば、能く是を致さんや。

溫州壽昌の絕照輝公、夏に淨慈の東淨寮に坐す。蜃壁の中、水墨の觀音の像あり、師每夜之を禮し、祈懇至切なり。忽ち㋖淨瓶の水壁より湧出するを見る。通身歡悅す、此れより造詣益々深く、智鑒益々明かなり。嘗て偈あり云く、「工夫未レ到二方圓地一。幾度憑闌獨自愁。今日是三明日四。雪霜容易上二人頭一。」志あるもの、其の偈を聞いて興起せずといふことなし。蓋し其の致誠人を感せしむること此の如し。譬へば㋗砒霜の全體、是れ

㋐虛谷。希陵、徑山に住す、仰山の雪岩欽に嗣ぐ、日本建仁の別傳の師。
㋑石林。行鞏、松源三世。
㋒東淨。太白の高僧。
㋓尊者。羅漢。
㋔貝多羅葉。ここでは單に經文たさしていふ。
㋕應眞。羅漢。
㋖淨瓶。座右におく法具の中の手を洗ふ水を入れるもの。
㋗砒霜。毒藥、今のHeratoze也。

毒なるが如し、苟も之を食せば、豈死せざるもの有らんや。

宋の㋘度宗、北兵攻め急なるが爲に、道士に命じて、大㋙醮を設け、章を天庭に奏して、國家の重事を問ふ。是の時高公章を伏す、久しく報を得ず、既に事を竭して、故を問ふ。高公が云く、「天門開けずして、徑山四十八代の住持を定むるが爲の故に、報を得ること遲し。」

㋚虎岩徑山に住す。寂照先師第一座と爲る。每に聞く、虎岩法座の上に、此の事を擧げて以て衆に夸つて謂く、「住持豈苟も然らんや、四十八代に至りて、尙ほ預め之を天庭に定む。」寂照頗る心に之を非る。寂照の徑山に住するに及び、適々其の代に當る。

昔雲居の卽庵和尙、土地神、夢を現じて謂く、「只一粥の緣のみあらん」と。已にして果して然り。凡そ諸方の住持として、皆報緣絲髮も差ふことなし。然も妄りに攘奪して、身を㋛囹圄に失するもの往々に有レ之、天庭に名を定め、土地神夢を現ずるの二事を聞いて、亦當に少しく㋜鋩鋭を戢むべし。

天目居山に魁㋝一山といふものあり、蘇州の人、博學多才なり、天童の平石翁と交り甚だ密なり。叢林全盛の時に當つて、人皆㋞翁々として進むことを求む。魁獨り岩谷に棲遲して世と接らず、古の㋟大梅、㋠懶瓚の風あり、獨り山下の檀越、洪家府の諸子弟往來することを許す。既に終へて洪氏

㋘度宗。宋帝の名。
㋙醮。祭の食。
㋚虎岩。淨伏、虛舟に嗣ぐ、松源四世、明極楚俊の師。
㋛囹圄。牢獄。
㋜鋩鋭。情識私欲のきつさき。
㋝一山。行魁、高峰妙に嗣ぐ。
㋞翁翁。職にたへぬこと、みなみな一致するの意。
㋟大梅。法常、唐の人、馬祖に嗣ぐ。
㋠懶瓚。唐の仙禪の僧也。

夢むらく、魁一の山轎に乘じて其の家に至ると。次の日一子を產す、應魁と名け、士元と字す。幼より學に入る、妻を娶りて子を育するに至りて、絕して前生の趣味なし。年三十にして、忽ち自ら猛省して、盡く平日所爲を變じて、一僧明維那といふものと、屋を東天目の絕頂に結んで、禪定を習ふ。至若、㋐舍を燒き食を乞ふまで、皆躬之を爲す。頭陀に老ゆるものと雖も、如かざる所あり。至正丁酉、猫獠徑山を㋒燒劫す。余奔りて其の所に抵る。士元肅容にして、禮度和雅、答對從容なり。徐く其の故を問うて、乃ち魁の後身なることを知る。因つて之に謂うて曰く、「公の前身と天童の平石翁と㋓莫逆の交りを爲す。今翁年九十に垂んとす、耳目聰明なり、公盍ぞ偈を作りて之に寄せざる。庶はくは、一夢兩覺して夢覺一如なることを見んか。」士元乃ち偈を作りて曰く、「寄レ語天童老平石。一念非レ今亦非レ昔。欲レ聽二楓橋半夜鐘一。吳江依レ舊連天碧。」偈未だ到るに及ばず、翁已に示寂す。

徑山の惠洲㋔提點は、虎岩の徒弟なり。頗る聰明にして㋕幹蠱の才あり。常住の衆務を掌ること三十餘年、一切の金穀、其の㋖糜費を恣にす。或は果報を以て之を諭せば、乃ち答へて云く、「滿載戴角し來るとも、洲只一雙を戴き得ん。」至正の初、高納麟、宣政院の事を行はんことを領ず。其の屬淨珂、狀を具して之を訴ふ。罪を杖に結して、斷つて俗に歸せしむ。既にして化城院に潛む。風痺の

㋐舍。あらた。
㋒燒劫。らんぱうす。
㋓莫逆。たがひに氣のあへる友。
㋔提點。諸注未だ詳ならず。
㋕幹蠱。幹は善なり、蠱は事なり、事を善くする幹事と同じ。
㋖糜費。亂用のこと。

疾を得て、㋗攣拳して㋘蝟の如し。兩手拳を握つて、其の兩頰を承く。兩脚反つて其の尻を承く。看病の人之を伸べんと欲すれば、痛み忍ぶべからず、日夜但だ㋙霍々の聲を聞く。是の如きもの三年、始めて氣絕す。洲平昔龐心を以て事に任ず、因果を輕視して乃ち言ふ、「滿載角戴し來るとも、只一雙を戴き得ん。」余謂らく、三途の報中、歲月長久なり、一雙去りて一雙來る、無量劫に至りて、此の角を戴く、何ぞ止だ一歲のみならんや。凡そ常住の金穀を司る人、宜しく洲を以て自ら鑒むべし。

洪武八年の秋、余同門の友、報復元を象山の智門寺に訪ふ。寺に提點彝㋚西堂といふものあり、四十餘年常住の出納を管領す。廉にして能く謀り、斷つて方あり、衆を撫して和易す。六代の住持を歷て、終始一なるが如く、是れ年七月二十四夜、夢むらく兩童子、榻前に並び立つと、之に問ふ、「何ぞ㋛幹く此に抵る。」答へて曰く、「提點の單帳を考算せんことを請ふ。」答へて曰く、「我に單帳の算すべきなし。」覺めて再び睡る。夢を得ること前の如し。次の日方丈に到りて、其の夢を說く。稟して云く、「夜此の夢を得たり、恐らくは、今歲庫司知事の人、懶慢して、常住の日黃簿未だ成らず、和尙宜しく之を促すべし。」其の言貌を觀るに、絕して愧赧の態なし。少選、彝房に歸りて、地上に㋜跌仆して、熟醉の如しと報ず。夜半に至りて始めて甦る。急に後事を處分して、然して後目を瞑す。彝智門寺に於て、謂つべし功ありと。臨終尙

㋗攣拳。ひきかがむ。
㋘蝟。いなご。
㋙霍霍。いたいいたいなり、急疾のこと。
㋚西堂。他山に在前住を西堂と云ふ。
㋛幹。よく。
㋜跌仆。つまづきたふれる。

ほ爾り、諸方執事の者、常住の物に遇ふては、鷹の拏ひ燕の趕くが如し。罪福を以て事と爲ず、此を聞いて、自ら須らく行を改むべし。

徑山の耆舊、諱は清泚、一溪と號す。壯年にして戒律を守らず、飲啖擇む所なし。中年に至りて自ら念へらく、人世に生れて、壽命能く幾何ぞ、一旦無常の殺鬼到らば、何を將てか排遣せん。遂に積む所の衣資を斂めて、普慶寺の東に就いて、觀音堂一所を建つ。白淨業を修して、淨土に生れんことを祈る。數載を越えて、手づから金剛經を書し、三千大千世界といふ處に至りて、筆を握つて身を正しうして、安坐して化す。至正丁酉、猫猝、普慶及び居民の房室を燒劫す。獨り觀音堂㋓歸然として獨り存す。佛、善惡の報應影響の如しと說く、渠信せずや。

處州麗水縣、㋔白雲山の白雲の度公、久しく華頂の㋕無見和尙に參じて平生打硬に工夫を做す。一切時一切處、㋖卓々地として語言に從事することを喜ばず、苟も學者ありて、法語を求むれば、但だ徑に己躬の大事を以て之に示す、餘は他の說なし。近代山に居つて化主と爲るもの、多くは是れ古人の遺言を採摭して、以て己より出づると爲して、後學を狐媚す。㋗明眼の人に遇うて、其の語に就いて之を詰れば、恰も盜を爲すもの、主家の物を盜みて、復主家に售らんことを求むるが如し、贓證明白なり。更に他の詞なし。惟面頸に赤を發して、身を藏すに地なきことを恨む。諦かに度公の機用を觀るに、天地懸かに殊なり、其の室に入るもの頗る多しと聞く。知らず、能く其の旨を領ずるものありや否や。

㋓歸　巍然に同じ。
㋔白雲。度、無見に嗣ぐ、華頂に住す。
㋕無見。先覩。斷橋三世、宋人。
㋖卓卓。すぐれたること。
㋗明眼。さとりひらきし人、大宗師をいふ。

海會翁は臨海の人、年三十にして、家を捨てゝ道に入る。徑山の虎岩に投じて披剃し、初め栴檀林に至りて歸堂す。巡按して其の擧止を見ることあり、㋘山野竊かに之を譏誚す、師發憤す。翌日卽ち天目に往いて、中峯の誨示を求む。是に於て餐を忘じ寢を廢め、力を殫して參究す、夜深け睡重うして遣り難し、數珠を摘んで暗地に撒して、足を摸して數へて乃ち已む。久しうして所入なし。時に東州虎丘に住し、古林開先に住し、東嶼楓橋に住す。師蘇州に如いて、三老の門に出入して、漸く智證に臻る。㋙龍華に出世して、法古林に嗣ぐ。年九十三、育王に抵つて、橫川の祖塔を守れり。俄に平地に左足を㋚跌損す、履を運かすこと能はず、牀に坐する每に、淸夜に當りて、古人の偈語を朗吟す。其の徒文渙問うて曰く、「一生の參禪、此に到つて受用すること能はず、卻つて吟詠に託して自ら遣る。」師曰く、「見ずや大惠和尙、疾に因りて呻吟す。」左右の云く、「平生佛を呵し祖を罵る、今乃ち爾り。大惠の云く、癡子呻吟、便ち不是か。」渙禮拜す。既に寂して火化し、異香人に襲ぐ。

㋘山野。自分の事を卑下していふ。
㋙龍華。寺名。
㋚跌。つまづき。
㋛東山。前出す。

東魯山は四明の人、人と爲り剛介にして食らず、人之を敬畏す。出世して㋛東山に住す。凡そ受業房の中の己資、悉く携へて東山に至りて以て土木の需を助く。何くもなうして衆宇を一新す。忽ち疽

背に發す、左右醫を善くするものを請じて、之を治せんと欲するに從はず、但安坐して常住の庶事を處分す。且つ言く、「我死せば、衣物送終の外を除いて、悉く㊁公帑に歸せよ。」寺僧の謂く、「師新度の弟子十餘人、萬が一も諱ます、孝服出す所なし。」師應へず、再び請ふ。乃ち命じて各穀一石を與ふ。終るに及んで寺衆嗟悼して已まず。竊に近代の師席に、據るものを觀るに、大率初め事を領するとき、卽ち衆㊄佃を關集し、倒に契帖を換へて、錢を得て應に常住を支ふべし。時日を剋んで㊅贏羨を取る、死に臨むに迫んで、衣物盡く私徒に分與す、送終するときは則ち常住を㊆靠損す。吁、其の魯山を視るに間あり。

如一庵は永嘉の人、姓は袁氏、誕より先き五日、父夢むらく、一りの異僧梵經を持して至ると、問ふ、「何れよりか來る。」曰く、「五雲山。」姓を問へば、「姓は殷」と曰ふ。名を問へば、亦「姓は殷」と曰ふ、且つ謂く、「後五日にして當に再來すべし」と。經を留めて信を表す、期に至りて果して師を誕す。師頭骨㊇嶄聳にして、目光人を射る。年十五にして、方山和尙を師とし事へて、出家登具す。久しく竺元和尙に依りて、其の要領を得たり。保福に住して、西磵庵に退居すること十年、道望益々隆なり。師早年にして志を發して、首楞嚴經を暗誦す、第五卷に至りて、嘔血の疾を得て乃ち輟む。疾瘳えて一夕夢に、未だ誦せざる所の經、皆金書にして、空中に布くと見る、聲を厲して之を讀む。既に覺めて猶存す、時を移して始めて隱る。故に師再び誦して此の一經を足す、毎日誦すること一過、終りに至りて替らず。

㊀公帑。寺の藏。
㊄佃。耕田。
㊅贏羨。餘りの利益。
㊆靠損。損失といふに同じ。
㊇嶄聳。たかくそびえる。

㊉斷江禪師諱は覺恩、族は慈溪の顧氏、師形模㊈脩瘠にして、操履清峻なり。幼にして雲門の廣孝寺に依りて落髮す。後に明の延慶の聞法師に從つて、四敎儀を受く。七日にして之に通ず、驚訝せずといふことなし。時に橫川和尙、育王の中興に住す、禪宗の學者輻湊す。師往いて香を炷いて入室し、機語相投ず、命じて內記を典らしむ。是に由つて、德業日に彰はれ遐爾名を知る。師の製する所の詩頌、典雅蒼古なり、宋の提刑牟公獻之、首めに之が序を爲す。一時の士大夫、趙文敏公・鄧康莊公・袁文清公の若き、皆相友とし善し。蘇の天平に出世して、橫川和尙に嗣ぐ。後開元及び明の保福に遷つて、越の天衣に終ふ。一日丈室に坐する次で、杖に扶かつて言うて曰く、「老僧㊋嶽空倚ニ杖黎一。分明畫出須菩提。」侍者を顧みて曰く、「會すや。」曰く、「會せず。」卽ち杖を擲つて蒲團に倚つて逝す。

至正庚子、定海白沙の夏太三、運粮を以て燕に如く、海に溺れて死す。後十六年、洪武乙卯に當つて、其の妻陳氏、子の善と太三を追念するに、性禀酷暴にして、下を馭して恩少なし、非命に死にき。孤魂の沈滯、曷に由つてか昇濟せん。遂に貲を斂めて、鄞の十字港庵に來りて、道場を嚴設して種々殊勝なり。淨行の僧十人を延いて、叶萬宗を請じて之を主らしむ。梁皇の㊌懺法を修禮す。陳氏虔懇

㊉斷江。覺恩、橫川に嗣ぐ、保福に住す。
㊈脩瘠。ながくやせる。
㊋嶽空。たかし。
㊌懺法。觀世音懺法といふて、一つの懺悔の文を誦して、罪業消滅を願ふ法式。

懸至なり、初めより道場に入つて、衆敷陳するを聽いて、感泣せずといふことなし。是の日禮二卷、中夜に至り、少しく寢に就く。僧宜便といふものあり、忽ち驚呻寐語す、之を撼せども寤めず、惟其の苦辛憂怖の狀多きを見る。是に於て、萬宗等其の甦らざるを懼れて、悉く起つて咒を持す。良久しうして疾く之を呼べば、乃ち甦る。故を問ふに惟泣くのみ。再び問へば乃ち言うて曰く、「神人あり、㋐章天の若きもの、冠帶甚だ偉にして、傘蓋劍戟の衞甚だ嚴なり、我をして同じく夏太三を取りて、此に來つて薦度を受けしめんと逼む。道蟹浦を經て、神威凜々として、行くもの遠く避く、備さに諸險を歷て大海に臨む。鬼物の㋕戢々として、大海に充滿して怖るべきを見る。神人我に命じて、海に入りて太三を㋙提挈せしむ。太三首に元の帽を戴きて、波浪の間に浮沈す、既に手を著け難し。又神ありて㋚勒す、我に錢を要めて、乃ち放す。適々錢の我手中に在るあり、遂に之に與ふ。又力を盡して、太三を扶けて將に岸に登らんとするに、汝等に喚び省せらる」と言ひ訖つて又泣く。蓋し涉歷に苦めばなり。吁、罪を滅し亡を薦むるは、此の懺の功に出でたるはなし。余故に之を記して、以て世の勸と爲す。

㋐章天。章駄天。
㋕戢戢。しらずしらず。
㋙提挈。ひつさぐる。
㋚勒。しるす。

黃巖の陳君璋、爲人端重にして言寡く、交りを愼しむ。善を以て一鄉に信服せらる。年幾ど四十、室の葉氏と暇あるときは、則ち法華を披誦して、惟謹む。鄉に梁皇の懺本なし、君璋手づから之を書す。既に畢つて、門首に山茶の秋花を吐くあり、君璋漠如たり。洪武庚戌、君璋年六十疾篤し。其の子景星、子の婦王氏と、性孝にして躬藥食を調ふ。夜衣を解かず、晝病所を離れず、王氏又股の肉を㋓割きて、粥を爲して以て進む。是の歲十二月十一日、夕陽山を㋝銜む、君璋命じて、之に扶けられて坐す。景星に謂うて曰く、「吾歸り去らん。」曰く、「何の處にか歸り去らん。」曰く、「日沒する處に去らん。」又曰く、「我死せば宜しく㋞桑門の法に依りて、闍維すべし。」遂に家人に命じて、同じく阿彌陀佛を稱念せしむ。須臾にして氣絕す。君璋二子あり、長は卽ち景星なり、次は余に從つて出家す、居頂是なり。

恭㋟行己は上虞の人、平生苦學して、內外の典研究せずといふこと靡し、尤も詩に工みなり。母老いて託することなし、食を乞ふて以て養ふ。嘗て母を舁いて錢塘を渡る詩あり云く、「母在二籃輿一子在レ途。子行不レ止母先呼。斷橋流水斜陽外。羞見寒林反哺烏。」此を觀て其の人となりを知るべし。

光菩薩は、鄞縣張氏の子なり、其の先世雕塑を習ふ、光に至つて藝益々精し、壯年に甫んで、忽ち家累を厭うて、將に海會の壽梅峯に從つて剃落せんとす。其の妻子を携へて官に訴ふ。壽因つて之を卻く。光萬戶完といふものと都て厚く善し。其の遁れ去ることを勸む、遂に潛かに自ら刀を引いて、髮を斷つて㋠僧伽梨を服す。浙河を㋡絕り、貝區を逾えて、匡阜に登り、徧く有道の尊宿に參ず。十寒

㋓割。割と同じ。
㋝銜。銜に包む也。
㋞桑門。沙門と同じ、僧伽、僧の轉訛。
㋟行己。恭書記、仰山雪岩欽に嗣ぐ。
㋠僧伽梨。袈裟。
㋡絕。渡る。

暑を踰えて、還りて壽に謁すれば已に還化す。華頂の無見和尚の道行清峻なるを聞いて、胸中の所疑を挾んで之に投ず。無見狗子無佛性の話を究めしむ、證入を獲たり。遂に無見を禮して得度の師と爲す。元一生、兩浙の諸山佛菩薩の像を雕飾すること甚だ多し。事畢れば包を㋑掌つて卽ち去る、未だ嘗て其の毫髮の報を受けず。暮年に歸りて華頂に隱る、遂に石橋庵に於て、五百應眞の像を塑す、窮極巧妙なり。始め之を事とする晨、雲霧の間、鼓鐘と梵音と洋々として間り作る。工を贍すに㋒園蔬を闕く。光人を遣はして之を化せしめんと欲す、忽ちに寧海の多寶寺の圓講主といふ者、菜を送りて至る。光喜びて故を問ふ。曰く、「向に眞菩薩尊命を以て、寺に到りて菜を化す、故に送り至る。」時に庵中に眞と名くるものあり、病に臥して久しく出でず、是に由つて神人の應化なることを知る。光も亦意に經ず、年七十有三、疾無うして華頂に坐蛻す。火後山中に塔塟す。

㋑掌。とる。
㋒園蔬。野菜物。
㋓頎然。丈の高き貌。

思省庵は台の寧海の人なり、其の氏を知らず、兄弟四人、思最も長せり。一時に同じく發心出家す。祖父の遺業を將て、悉く宗親に散與す。惟所居の屋一區を留む。族人互に爭ふて已まず、思諸弟と各炬を執つて之を燎きて去る。思後に參訪して向上の知見を具す。出世して溫の靈雲を領じ、靈岩に遷りて、靈雲寺の前草舍の中に退止す。至正甲申、余達此原・明性元等と僧に往いて謁す。時に思年九十に踰え、厖眉皓髮、㋓頎然として清聳、履を拽いて出づ。且つ行き且つ問うて曰く、「何れの處よりか來る。」余が曰く、「江心。」曰く、「深きこと幾百丈ぞ。」曰く、「老和尚を謾ずることを得じ。」思揖して云く、「坐して喫茶せよ。」思性方介にして詩を作ること頗る寒山子に類す。罵レ僧の詩を壁に題して云く、「五蘊不レ打頭自髡。黃布圍レ身便是僧。佛法世法都不レ會。噇レ豬噇レ狗十分能。」案上に語錄一冊あり、予手に信せて揭觀するに、結夏の上堂に云へることあり、「以二大圓覺一。牛角馬角。爲二我伽藍一。瓜籃菜籃。」又上堂に趙州狗子無佛性の話を擧する頌に云く、「狗子佛性無。狗子佛性有。猴愁樓二搜頭一。狗走抖二擻口一。」余此原等と別を請ふ。敢て再び其の鋒を犯さず、是夕靈雲に宿す。老宿の思の言行數端を擧するを聞くに皆傳ふべし。

福建に官家の子あり、專ら盜を爲す、父痛く責むれども改めず、徐に之を詰れば、乃ち云く、「盜豈爲ることを欲せんや、但每夜一男子あり、來りて相拉ぐ、已むことを得ずして之に從ふ。」父曰く、「今夜若し來らば、汝當に我に告ぐべし。」遂に弩矢を備へて之を待つ。夜分に男子果して門外に來る、兒指して父に告ぐ。父果して其の人を見て、弩を決して之を射れば、却りて其兒の胸に中つて、立どころに死す。

至順庚午、浙西連歲饑饉、杭州の城中に餓殍相椀り藉る。有司坊正をして、人を倩ふて、舁いて六和塔の後山大坑の中に棄てしむ。一婆子あり、旬を兼ねて腐爛せず、每日衆屍の上に居す、人之を怪しむ。其の身を搜るに、懷中に小囊あり、念彌陀佛の圖三幅を貯ふ。事有司に聞ゆ。爲に棺を買ふて斂めて之を焚く、煙焰の中、佛菩薩の像を現ず。光明燁々たり。此に因つて發心して、念佛するもの

極めて衆し。

建寧府に僧あり、末山と名づく。後に一行平生を著定する詩を檢するに、「一木移來嶺上安」の句あり、造物預め其の名を定む。好く善緣を作る、路を平げ橋を疊むこと、其の數を知らず、既に死して、夢を城中の鄒氏に現じて託生す。其の友も亦之を夢みるものあり、既に長じて、自ら前身は是れ僧なりと知ると雖も、僧と交ることを喜ばず、癡々呆々として木石の若くに然り。杭州の天目山の義❶斷崖は、高峰に見えて旨を得たり、歸向するもの甚だ衆し。既に死して夢を現じて、吳興細民の家に託生す、後に僧と名る。名は瑞應、字は寶曇、幼より壯に至りて、人の禮拜供養を受くること虛日なし。余❸天界に寓居せし時、寶曇も亦在り、隣居すること頗る久し。其の所爲を察するに、❹碌々として常の人と以て異なることなし。間に❺己躬の事を以て、之に叩くものあれば、但❻慵懶するのみ。二人の前身皆常の人に非ず、胡ぞ乃ち頓に前世の所習を忘るること是の如きや。古人の謂く、「❼聲聞尙昧に於出胎。❽菩薩猶迷に於隔陰。」然るときは修行の人、愼まざるべけんや。

江西の絕學誠公、山居して出世せず。座下に七人あり、盟を結びて禪を習ふ。一人年最も少し、超然として得ることあり。誠公驗みるに❿三關の語を以てす。其の答ふること鼓の⓫桴に應ずるが如し、

❶斷崖。了義、高峰に嗣ぐ、天目山に住す。
❸天界。寺名。
❹碌碌。平凡なること、石のころころしたるよりいふ。
❺己躬の事。見性、成佛の悟道。
❻慵懶。はづる。
❼聲聞。修行の位。
❽菩薩。同上。
❿三關の語。兜率和尙の公案。
⓫桴。ばち。

不幸にして早世す。山下の民家に生ず、父母俱に夢みることあり、五歲に甫んで命じて書を讀ましむ、吾伊口に上せて師訓を煩さず。又能く其の義を拆く。一日其の父携へて山に入つて、誠公に見えしむ。公問ふ、「汝前生、我に三轉語を答ふ、記得するや否や。」進んで云く、「試に擧せよ看ん。」既に擧す。乃ち點首して云く、「是れ我語。」誠公其の父に囑して、善く之を保養せしむ。他寺の僧、因つて厚く其の家に賄ふて、求めて弟子と爲して、❼魚山の❽梵唄を習はしむ。此より檀家の請に赴いて、多く贈施を得て嬌奢の心運く、世俗不法の事、之を爲さずといふことなし。誠公因つて三種の大願を立てゝ學者を勵ます。大凡そ參禪の人、靜定の中に於て、箇の歡喜の處を得て、乃ち塵勞乍ち息み、惠光少しく現ずるも、然も未だ以て究竟と爲すべからず。何となれば、蓋し❾八識田中無明の根本尙ほ在り。喩へば石の草を壓するが如し、石を去れば再び青きこと疑なし。後人其れ預め之を戒めよ。

前朝天曆の初、天下の書を善くする僧儒を召して、杭州の淨慈寺に會めて、金を泥にして、大藏尊經を書せしむ。王文獻公も亦召す所に在り、而も公必ず衆僧と同じく食す、若し別に治具を爲すときは則ち樂しまず。甚だしうして肘を掣き詬罵して、食せずして去るに至る。尙ほ記す、公僧の爲に懸崖畫蘭に題して云く、❿「嫋々春風一樣吹。託に身高處一擬に何爲。從渠自作に顚倒想。要に見に懸崖撒レ手時。」

❶東坡が像に題して云く、「五祖禪師世外人。娑婆久矣斷に生因。誰將描に

❼魚山。梵唄の名院。
❽梵唄。經文のふしもの。
❾八識。賴耶等の八つあり。
❿嫋嫋。かぜそよぐ。
❶東坡。蘇子瞻、宋人。

貌虛空一手。去覓二他年身外身一。」㋑山谷が像に題して云く、「笑殺當年老㋺晦堂。相逢剛道桂華香。披レ圖面目渾依レ舊。鼻孔何曾有二短長一。」蓋し公一代の儒宗と爲りて、造詣淵邃、諸を幹墨に形はす、意に經ずと雖も、而も古德の提唱と相㋻脗合す、尙ぶべし。

㋼古鼎和尙、杭の中竺に住す、歐陽圭齋、福建の廉使任滿つるを以て、召に京師に赴く。杭に過ぎて古鼎に抵りて、欵洽道話すること㋽旬浹、別に臨みて、古鼎送りて西湖の上に至る。圭齋が云く、「此の別いまだ會期を卜せず。」古鼎の云く、「大圓鏡中、未だ嘗て公と相別れず。」圭齋喜ぶ。何くもなうして、古鼎徑山に遷る。圭齋寄するに偈を以てして云く、「上人力擧二龍文鼎一。坐斷凌霄第一關一。湖上別來圓鏡語。想應レ照二我鬢毛班一。」

靈隱の竹泉和尙、爲レ人緣飾少なし、契證穩當にして、語言精密なり。㋾元宵の上堂に云く、「今朝上元節。雪霽見二晴春一。梵刹燈千點。長空月一輪。鼓鐘喧二靜夜一。訶管鬧二比隣一。惣是圓通境。何須別問レ津。」亡僧森㋿監寺の爲にする下火に云く、「森羅萬象一法之所レ印。卽今與レ汝拈二却金剛圈栗棘蓬一了也。喚二什麼一作二一法一。二由レ一有。一亦莫レ守。火裏烏龜作二師子吼一。」其の語錄に此の二段を逸ふ故に之を記す。

㋺晦堂。祖心、黃龍に住す、黃龍慧南に嗣ぐ、宋人。
㋻脗合。ぴつたりとあふ。
㋼古鼎。祖鎔、徑山に住す、大惠六世。
㋽旬浹。十日以上。
㋾元宵。元日の夕方。
㋿監寺。禪寺役僧の名。
㋿泰定。北宋英宗の年號、日本の後醍醐帝の正中頃。

㋿泰定の初、宣政院、嘉興本覺の㋑靈石芝禪師を起して、淨慈を主らしむ。師已に年八十有四、四海尊仰すること古佛の如し。余徑山より來りて㋺入院を送る、遂に例に隨つて挂搭することを獲たり。其の時衆幾ど五百に滿つ。台溫の鄉長忠景、初めは㋩本山の首座、年德並せ高し、後生多く之に歸す。余方に㋥學地に居す、偶々廊下に於て、文籍を彌く人を見て、就て㋭莊子一集を購ふ。持して藏主寮に歸つて、圍爐の內に之を閱ぶ、失葉を恐れてなり。適々忠外より至る、意甚だ樂まず、正に坐して余を其の前に立たしめて、之を數へて曰く、「汝初めて衆に入つて、衣單下に去つて㋬工夫を做さずして、反つて㋷雜學に從事せんや、且つ㋸公界の圍爐は、乃ち客を延いて道を論ずるの所なり、而も㋻外書を檢閱せば可ならんや。」後二十餘年、再び淨慈に到る。凡そ寮舍の圍爐、但少年名勝叢雜するを見るに、或は琴を撫し、或は碁を圍み、或は墨を吮つて山水を圖す。如レ是のみ、肯て外書を檢閱するものも、亦其の人なし、矧や衣單下に工夫を做すものをや。嘻三たび、忠の言を思ふ、㋼妙喜洋嶼の㋿衆寮に揭ぐる所の牓と、何を以てか異ならん。忠後に婺の華藏に出世すといふ。

羅湖野錄に載す、㋾烏巨雪堂、淨公に與ふる書に曰く、「比ろ禪人の公の

㋑靈石。芝、徑山虛堂に嗣ぐ。
㋺入院。はじめて住持となるをいふ。
㋩本山。徑山をさしていふ。
㋥學地。修行最中。
㋭莊子。莊周の語錄一卷。
㋬工夫。坐禪の事をいふ。
㋷雜學。坐禪の外の文學。
㋸公界。禪宗の本山式のところ。
㋻外書。儒又は道の書物。
㋼妙喜。大惠の別號。
㋿衆寮。坐禪と學問とふたつをなしふる僧校なり。
㋾烏巨雪堂。佛眼遠に嗣ぐ、五祖法演三世。

拈古を傳錄するを見るに、中に於て、『趙州に問ふ、如何か是佛殿裏底。拈じて曰く、須らく知るべし、一箇髑髏の裏、天を撑へ地を拄ふる人あり』といふあり、恐縮かに疑ふ、傳錄の誤りならん。蓋し楊岐の子孫、終に肯て箇の鑒覺を認めじ、若し鑒覺を認めば、陰界尚ほ亦出づること得じ、何ぞ宗門奇特の事あらんや。此に因つて亦嘗て之を頌じて、謾に以て聞を溌す。頌に曰く、不レ立二孤危一機未レ峻。趙州老子玉無レ瑕。當頭指出殿裏底。刻二盡茫々眼裏花一。余謂へらく、羅湖、烏巨の淨公の箇の鑒覺を認むるを檢點するを肯ふことは善し、烏巨の此の頌、宗門に於て、補ありと許すに至りては、恐らくは未だ善を盡さざることを。且「趙州老子玉無レ瑕。」又「刻二盡茫々眼裏花一」といふが如き、鑒覺に非ずして何ぞ。余忍俊不禁、其の頌に就いて、四字を易へて之を頌す、亦後人の檢點を要す。「不レ立二孤危一機始峻。趙州老子玉生レ瑕。當頭指出殿裏底。添二得茫々眼裏花一。」

瑞少曇は閩人なり、剛介自ら持して、聲利を粃糠す。常住の事悉く執事の人に付す、一室肅然として禪誦自ら怡しむ。其の門に登るもの、老練の衲子に非ずといふことなし。至順の間毅然として棄て去る、金陵に游びて、龍翔の㋐訴公を訪ふ。是に於て延いて第一座に居せしむ。適々㋑移忠席を虛にす、公力めて之を薦む。師辭して曰く、「公誠に未だ之を思はざるのみ、移忠は乃ち宋の奸臣秦檜が香火の寄る所、檜嘗て私を挾み勢を倚んで、大惠を梅衡に編管す、吾不肖なりと雖も、忝く其の裔を承く、今何ぞ忍んで其の香火を嗣がん、公誠に未だ之を思はざるのみ。」當時の洪儒宿德、其の事を聞く者、口を劇にして稱譽せずといふことなし。後に改めて㋒歸宗に住して終ふ。

㋐訴公。笑隱大訴。
㋑移忠。何山湖州安吉府に在り移忠禪寺、甲刹の一。

亨景南は南昌萬氏の子、幼にして來福山の端公に依りて得度し、如庵愚公に百丈に、笑隱訴公に龍翔に參ず。名を宣政院に薦むることを獲たり。檄を奏じて法を香城に開く、久廢の餘、其の寺を一新にす。後に上藍に遷つて、道風益々播す。壽七十八、一日忽ち左右に命じて、湯を具へて沐浴し、常の服を衣て、安坐して偈を書し、拄杖に靠つて化す。闍維堅固子磊々たり、之を獲るもの甚だ衆し。其の法孫濟盛といふもの、杖及び堅固を收めて、塔を作り、之を來福山の中に藏む。像季以來行脚の僧、凡そ一處に到りて拄搭を求む、必ず云ふ、生死事大無常迅速と、之を聞くに懇切を覺ゆるに似たり。既に名を籍することを得て、略前言を以て自ら勉めず、惟奔逐を務むるのみ、往々に皆然り。今景南の臨終此の如くなるを觀るに、其の平日の踐履知んぬべし。

㋒寂照先師、蚤年にして虛谷とともに蘇州㋓承天の覺庵眞公に參ず、別後其の啓發を得たり。遂に洞庭を思ふ一詩を賦して、意を寓す。其の實は向上の一著を敷揚す。特に辭を措くこと異なるのみ。詩に曰く「煙蒼々濤茫々。洞庭遙々天一方。上有二七十二朶之青芙蓉一。下有二三萬六千頃之白銀漿一。中有レ人兮體服二金鴛鴦一。遊二龍車明月璫一。直與二造化一參翱翔。憶昔天風吹レ我登二其堂一。

㋒歸宗。寺の名。
㋔寂照。元更行端、藏更珍に嗣ぐ、徑山に住す、大惠五世。
㋓承天。寺の名。

飲レ我以ニ金莖八月之㋐沆瀣一。食レ我以ニ魁丘五色之琳琅一。換ニ爾精髓一滌ニ爾肝腸一。灑然心地常清涼。非レ獨可以㋑眇ニ四極一輕乙八荒甲。抑且可下以㋒老ニ萬古一凋中三光上。久不レ見兮空慨慷。久不レ見兮空慨慷。」又嘗て儒生の爲に、古昔十賢の梅を詠ずる詩の圖に題して云く、「詩の召南、書の說命は、孔子の昔刪定する所なり、皆其の實を言ふて、而も其の花に及ばず。梁の何遜より唐宋の十君子といふものに至りて、召南を讀み說命を誦して、孔子の業を習ふ者なり。諸を詠歌に形し、諸を章句に述す、皆其の花を言ふて、其の實に及ばず。噫、世道古からず、人心益々薄し、且つ僞つて其の本を敦うせざることや。例して皆是の如し、余是の圖を觀るに、竊かに感ずることあり。」趙松雪、虞邵庵の諸公之を見て歎じて曰く、「元叟識見地位高し、筆に命じて辭を吐く、自然に今古に超拔す。我輩力を儘して道ふとも、也他の㋓穀中を出づること得ず。」寂照は乃ち臨濟の正宗を傳持する人なり。翰墨に游戲し、宗猷を㋔藻飾することとは、特に餘事のみ。然れども縉紳之を推し重んずること此の如し。無文粲公の謂く、「今時の叢林の中、眼丁を識らざるもの、窮するときは、眞の禪和子を失せず、達するときは、眞の善知識と爲る。」斯の言謂つべし、痛切なりと。

天台の明巖熙太古、久しく㋕東嶼に淨慈に依りて、其の法を稟承す。至正丙戌正月十三日、余紫

㋐沆瀣。ゆふべのかすみ。瀣音「カイ」、瀣の誤か。
㋑眇。すがめ。
㋒老。おい。
㋓穀。「やどころ」、穀中は人を籠絡する術のうちの義に用ひる語。
㋔藻飾。潤色の意味なり。
㋕東嶼。德海、石林叢に嗣ぐ、松源四世。

篝より、明性元・瑞瑩中と、香笠曇を寒岩に訪ふ。明日將に太古に謁せんとす、二子倦遊を以て果さず。會々太古笠曇に抵る、余三人客位に卽く、㋖揷香して禮を展べ竟る。太古忽ち問うて云く、「藏主久しく笠源和尙に參ず、世尊初生下の時、許多の神頭鬼面を㋗做出す、還つて落處を知るやいなや。」余對へて云く、「美食は飽人の喫に中らず。」太古忽ち位を離れて手を分つて上下を指し、乃至步武四顧して、聲を勵まして云く、「天上天下唯我獨尊」と。嗟乎方に今號して、尊宿と稱するもの、而も後昆を接引するの際に於て、往々に其の見易き所を匿し、其の知り難き所を示して、以て之を籠罩す。太古の直截擧話の如き、何ぞ千金の珠を㋘丐者の席裏中に索むるに異ならん。

元の至正十五年の冬、張嗣誠湖州の江淛を侵す。丞相委して、徑山の屬院化城の僧惠恭をして、鄉民に團結して界嶺を守禦せしむ。一日賊兵境を犯す。恭鄉民を率ゐて之と格戰す。賊敗走して四十餘人を獲て、送り官に至つて、夜西湖の鳥窠寺に宿す。黎明適々前住饒州の天寧謀大猷、廊廡の間に徐步す。囚者師の神觀閑雅にして、持誦して輟まざるを見て、乃ち聲を齊しうして告げて曰く、「長老我を救へ。」師曰く、「我爾を救ふこと得じ、爾若し至誠に、南無救苦救難阿彌陀佛を稱念せば、卻つて爾を救ひ得ん。」中間に三人あり、其の言を信受して、高聲に稱念して口を輟めず。既にして官司、衆囚を取發して、俱に枷鎖を易へ、偶々此の三人に至りて、刑具を缺く、但繫くるに繩を以てするのみ。既に囚を

㋖揷香。祝香に同じ。
㋗做。作の俗字。
㋘丐者。乞食。

審かにするに到つて、官獨り此の三人を鞫勘す。一人は供す、正に麥畦を治して虜はると、一人は供す、元是明州奉化の鋸匠、此に來りて傭作して虜はる、三人遂に縱免を獲たり。乃ち鳥窠に到つて、大猷を拜謝して去る。竊かに念ふに、我が佛阿彌陀、誓願深廣、其の名を稱する者、獨り臨終に驗を獲るのみに非ず、而も現世大辟の刑に遭ふものも、亦賴に免るべし。人而も信せずんば、吾れ未だ之を如何ともせざるのみ。

西天竺國の大沙門板的達、確く禪定を修す、兼て毗尼を善くす。三衣一鉢身に隨ふ、施利を得れば隨つて貧乏に與ふ、世に行くこと㋓泊如たり。洪武七年、南京に抵らんとす、上有司に勅して、㋔天界㋕蔣山の住持と同じく京城諸寺の僧を率ゐて、祇つて郊外に迎ふ。幡憧香花を以て、導引して國に入らしむ。上に見ゆるに及んで大いに悅ぶ、寵渥殷厚なり、之を蔣山寺に館せしむ、勞問相仍りなり。是の年の冬、上親しく㋖誥命を製し、銀印を鑄て、賜ふに善世禪師の號を以てす。時に余天界に寓止す、一日金壇の刀㋗鐇蔣生といふものあり、師の爲に剃髮し、之を受くるに盤を以てす。初め一刀を剃するに、聲ありて㋘琅然たり、侍僧輙ち之を取る。次に一刀を剃す、蔣生自ら取る。設利一顆を獲、大いさ菽の如くにして、甚だ圓淨なり、餘髮悉く見るもの、爲に爭ひ取り去らる、或は有或は無し。凡そ三顆、惟蔣生が得るもの、出して以て相示す。余歎訝して已まず、其の侍僧乃ち余に謂うて曰く、「此れ吾が師の常事なり、世の夸と爲さんことを患ひて、故らに其の髮を剃することを罕なり。」九年の秋詔を奉じて、浙左に來り、㋙育王の舍利塔泊び寶陀の觀世音の示現を禮求す。二處の所感、祥光瑞相常に異なり。師皆㋚伽陀の贊詠あり、梵字を作して之を書すと云ふ。

㋓泊如。安靜なり、世事に煩はされぬこと。
㋔天界。寺名、前にも出づ。
㋕蔣山。建康上元府にあり、名寺は太平興國禪寺、十刹の一。
㋖誥命。勅諭なり、いましめさとす。
㋗鐇。けぬき、刀鐇は理髮師なり。
㋘琅然。すすのこゑのやうなり。

元の福建都運司某、誕辰に胥吏の周清甫、賀筵を設く。饌に牛肉あり、運司亟かに命じて撤し去らしむ。徐く衆賓の爲に言うて曰く、「某少かりし時、外弟某と屠者の家を過ぐ。坐し定まるに甫んで、屠者の左の手に刀を握り、右の手に牸牛を牽いて、一犢を帶びて至り、牛を㋛簷楹に繫け、刀を前に置いて去るを見る。忽ち犢子刀を啣んで、園地の中に走つて、足を以て地を跑つて之を埋む。屠者の至るに逮んで、其の刀を見ずして怒る。乃ち爲に其の狀を言ふ。屠者既に刀を得て、門首に坐し長歎して時を移す。刀を以て髮を斷ち、妻子を棄てゝ出家學道す、終る所を知らず。後に外弟某出でゝ江西に仕ふ。舟して黃河を過ぐ、晩に荒岸の下に泊る。恍惚の中一の甲第を見る、高廣嚴整にして、王者の居に類す。是に於て岸に登つて、㋜閽者を趨揖して問うて曰く、『此は是何の所ぞ。』閽者の曰く、『此は是一衙門、汝瞻玩せんと欲せば禁ぜじ。』門に入つて一峨冠博帶の者、廳に當つて正坐するを見て、因つて前に進んで之を跪拜す。承問して曰く、『汝何れよりか來る。』

㋙育王の舍利。明州慶元府にあり、阿育王山。
㋚伽陀。偈と同じ。
㋛簷楹。のきはしら。
㋜閽者。宮中及官衙の門番。

答へて曰く、『都下より來る。』外弟因つて問うて曰く、『此は是何の衙門ぞ。』答へて曰く、『此は是天下太乙牢の山、專ら牛を宰する人を治す。』因つて問ふ、『隣人牛を宰する黃四といふもの死して已に十日、還つて此に在りや否や。』答へて曰く、『有』。遂に呼び來る。但黃四が枷鎖して至るを見る。黃四外弟を見て、驚き呼んで云く、『官人如何ぞ此に到れる。』答へて曰く、『我去つて仕に之く、偶然として此に到る。』就いて黃四に問うて曰く、『汝の罪犯、當に何んか度脫すべき。』答へて曰く、『我が罪最も重し、脫すべきに由なし、若し官人の凡そ仕官に到る處、人を勸めて牛を殺さゞること、一百二十箇を得ば、能く我が罪を免れん。』言ひ訖つて首を回らせば化境沒しぬ。外弟此より人を勸めて牛を宰せざること、其の數に足るに及んで、一夕黃四、門を扣いて謝して曰く、『某官人の勸めて牛を宰せざることを得て、今已に罪を脫す、叨つて放して家に歸る、如し家書あらば、妨げず持し去ることを。』但門內に於て之が爲に曰く、『汝歸らば我が家中に向つて道へ、早く衣を寄せ來れ』と。兩月を閱て、果して衣の至るあり。」其の時衆賓、此の說を聞いて皆誓ふて牛肉を食せず。

淨土の一敎は㋜金口の宣ぶる所、之を羣經に載すること甚だ詳かなり。而も其の敎㋝震旦に行はるゝことは、則ち㋞東林の㋟遠法師に始まる。法師劉雷の諸賢を集めて、蓮漏を刻み六時を禮して、西方に往生せんことを願ふ。精誠悃切、臨終に各々其の所願を遂ぐることを獲たり。前の㋠元に

㋜金口。釋尊のおほせ。
㋝震旦。支那。
㋞東林。廬山。
㋟遠法師。慧遠、晉人。
㋠元。元朝。

至るに迫んで、人根既に漓く、情僞日に生ず。名を蓮社に冒して、假に衣食を求むるもの、往々に焉あり。㋡延祐の間、優曇度公、闕に詣して上書し、其の弊を革め正し、退いて廬山の寶鑒若干卷を著して、正敎を闡揚し、異說を排斥す、東林の故事之が爲に一新す。優曇化し去つて未だ百載に及ばず、而も庸民名を僭む、所謂白蓮七佛の敎といふもの、其の弊滋々甚だし。或は自ら導師師長と稱して、位㋢方等無礙の說あり、徒衆を糾合し、正法を非毀し、廣く魔事を行じて屏處に傳授し、種々の光を現じ、珍饌以て佛に供せず、出生施食も亦皆屏絕して、自ら是れ佛と云ふ。又三寶を改めて、佛法師と爲し、妄りに謂ふ、導師は是れ三寶の數、僧には非ずと。愚俗を㋣簧鼓し、習ふて以て風を成す。殊に遏むべからず、以て朝廷白蓮の禁を嚴にして、縉紳東林の修を鄙しとすることを致すこと宜なるかな。嗚呼安ぞ、優曇の如きものの、復世に興ることを得て、以て其の弊を匡し救はんや。

瑞雪崖は黃巖の人なり、幼にして度を秋江滿公に得たり。新城山の留慶院に居して、持律嚴謹、日に金剛般若經を課す、尤も㋤瑜伽の法事を善くす。道俗の請に赴くに、必ず恭㋥恪を盡す。而も施利は則ち厚薄を較べず、或は絕して無けれども、亦意に經ず。其の再び請ずるに迫んで、之に赴くこと初の如し。洪武辛亥五月、微疾を得て、湯を索めて沐浴し、衣を更へ偈を書して趺坐して逝す。闍

㋡延祐。北宋武宗の年號。
㋢方等。五時の說法の中。
㋣簧鼓。言を以て人をまどはすをいふ。簧はふえの舌也、鼓はならす也。
㋤瑜伽。瑜珈三密の法也。
㋥恪。つつしむ。

維火星、毫光に雜つて迸散す。絕して煙燄なし、堅固子を獲ること甚だ多し。壽八十三。

宋無逸は餘姚の人、別號は庸庵、性仁恕端毅、蚤に楊濂夫・陳衆仲二先生に從つて游ぶ。㋓經明かに學通ず、發して文詞を爲るに、矩則甚だ嚴し。晩年酷だ禪學を嗜む。㋑皇朝革命の初め、無逸召さるゝを以て京師に至る、預め元史を修す、請を得て歸る。余因つて吾徒の居頂をして、慈溪の龍山に寓止せしむ。時に無逸に謁して、文を爲るの法を講授せらる。無逸吾徒に因つて、書を寓して入道の要を叩く。余既に書に答ふと云々。復環公所註の楞嚴經及び大惠の書間を以て之に寄せ遺る。無逸これより常に目を斂めて危坐し、而も反復して二書の旨趣を究めて、證入あり。洪武九年六月疾に因る、門人王至等に命じて、爲に子に示す詩一首を書して、笑談自若なり。忽ち扇を以て搖曳して、其の家人を止めて曰く、「我方に靜かなり、汝我を撓らすこと毋れ。」遂に目を閉ぢて、扇を以て面を掩ふて終ふ。時に天隆暑、㋒化斂して容色喜笑を含む、益々㋐鮮潤なり。庸庵藁若干卷あり、世に行はる。

㋓經。諸子百家の書。
㋑皇朝革命。明代にありし革命。
㋒化斂。「とりをさめ」の意、死體とりかたづくること。
㋐鮮潤。「うつくしくあざやか」の意。

近世に一種剃頭外道あり、佛祖の遺言を綴拾して、㋔闘飣して帙を成し、之を目けて語錄と曰ふ。輙く檀信に化して刊行す。彼既に自ら所證なし、又佛祖舌頭の落處を知らず、謬つて玄談を以て、己が昏解に就いて、識者をして之を讀んで、惶汗に勝へざらしむ。照千江は四明の人、圓直指は天台の人、奕休庵は揚州の人、三人俱に是れ㋕博地の凡夫、絕して正見なし、妄りに自ら語錄を刊る。暉藏主は鄞の人、㋖照千江に參ず。金剛經を將て、㋗分毎に段を拆きて、妄りに之が頌を爲り、板に刊つて印し施す。余桐谷に在りし時、暉來り謁す。余暉に問ふ、「此の經何を以てか題を立し、何を以てか宗と爲る。」竟に㋘瞶として曉す所なし、況や其の已に迷ふ衆生の爲に、無上正徧知覺を標出することを欲せんや。此れ皆正因に本づかず、務めて邪道を行じ、世を劫して、名を善くして凡愚を誑誘す、良に嗟悼すべし。今の大牀座に據るものに在つて、黜けて之を正すべし。反つて從つて之を譽め、或は之が序跋を爲らば、其の罪を敎門に得ること深し。

㋔闘飣。飣は、食をたくはふの意、いたづらに文字をならべたてるなり。

㋕博地。小人をさして云ふ。
㋖照千江。傳未詳。
㋗分。金剛經は三十二分にわかちあり。
㋘瞶。めくら。
㋙寂音。洪覺範。
㋚蟊。稻を害する蟲「いなご」。

余、者庵述する所の叢林公論を讀んで、者庵の識見高明にして、研究精密なること、他人の未だ及び易からざることを知るに足れり。然れども其の間に論ずる所、亦過當の者あり、或は其の論ずべき所に非ずして、而も之を論ず。㋙寂音智證の傳、數節を指摘して、以て㋚蟊禾中に生じて、禾を害するものは蟊なりと爲すと論ずるが如き、斯の言甚だ當れり。其れ僧寶傳に於て謂く、「傳に浮誇多く、贊に臆說多し」と。審かに是の如きときは、彼の八十一人、俱に實德の稱すべきなし。誠に寂音に託して、虛文を以て之を漢飾するならん、斯れ其の論の過當なり。又陶淵明歸去來の詞を論ず、閑淡優逸、詞理高詣なり、獨り銷憂の二字未だ善か

らずと爲す。韓退之送三李愿歸二盤谷一序、意に譏訕怊悵多く、過を文り非を飾る。王元之が小竹樓の記、公より退けらるるの暇、鶴氅衣を披し、華陽巾を戴き、手に周易一卷を執つて、香を焚いて默坐するといふが如き、幸に自ら可憐生。之を繼いで云く、「世慮を消遣す」と。猶ほ玉の玷の如きのみ。余以爲らく、先儒文辭の得失、吾が門に於て、固に涉る所なうして、之を叢林公論の間に置かば、殊に謂ふ所に乖く。其の當に論ずべき所に非ずして、之を論ずるものは、此れ其の是なり。古人言へること有り、「尺に短しとする所あり、寸に長しとする所あり。」豈然らざらんや。

育王の㋺雪聰和尙、僧あり來りて住せんことを求む。師云く、「何れの處よりか來る。」僧云く、「天台。」師云く、「鉢盂を將ち得來るや。」僧云く、「將ち得來る。」師云く、「何ぞ老僧に呈似せざる。」僧云く、㋻「旦過の中に有り。」師云く、「我者箇の鉢を問はず、我無底の鉢を問ふ。」僧㋼措くこと罔し。師云く、「俊快の衲僧、能く幾箇あつてか去る。」

禪林寶訓に載す、㋽湛堂の準公、李商老に與ふる書に曰く、「善く道を弘むる者は、要變通に在り、變通を知らざれば、文に拘はり敎を執し、相に滯り情を殫しむ。此れ皆權變に達せざるが故なり。」僧趙州に問ふ、「萬法一に歸す、一何れの處にか歸す。」州云く、「我青州に在つて、一領の布衫を做る、重きこと七觔、古人權變に達せずんば、能く是の若くの酬酢せんや」と謂ふ。余謂らく、者の僧箇の

㋺雪聰。悟光、東嶼海に嗣ぐ、育王に住す。
㋻旦過。僧堂の雲水の休息所にする寮。
㋼措くこと罔し。始末をつけぬこと。
㋽湛堂準。文準、眞淨克文に嗣ぐ、黃龍南三世、潙潭に住す。

問端を立す、也是れ奇恠なり、爭奈かせん、趙州倆が湊泊の處なきことを。只他に者の一轉語を答ふるが如き、其の能く權變に達すと謂はゞ、恐らくは未だ然らず。夫れ權變といふは、乃ち機を觀て宜に適するに、心意識邊の事を用ふ。且つ者の僧與麼に問ふ、州與麼に答ふ、兩鏡の相照して、光影俱に泯するが如し、奚の權變の有るならんや。湛堂是の如きの說を作す、豈別に旨要在るか。

明善の韓先生、㋾陸放翁、㋿普燈錄の叙の草の後に書して云く、「放翁先生手書の普燈錄の叙の草本は、報恩の淨上人の藏する所なり。余故先生の遺文一帙あり、其の間の誤處、皆手から自ら塗了す。」傳燈に言ふ、世尊華を擧すれば、㋽迦葉一笑すと。今講者以爲へり、經に此の事なしと、其の妄傳なりと詆る。或は曰く、「金陵の㋾王丞相、秘省に於て、梵王決疑經を得て、之を閱するに此の語あり、避け諱む所あり、故に經㋿藏に入らず。今先生以爲らく、之を㋼木葉旁行の間に書す」と。知らず、卽ち丞相の所見以て否らず、其の言此の如く必ず考ふる所有らん。併せて其の後に書して云く、「夫の二先生學廣く理明かなり、其の言豈妄ならんや。近ごろ翰林の㋽宋公、余が爲めに應酬錄を叙するに、亦曰く、予大梵天問佛決疑經を觀るに、載する所の扣華と云々。宋公既に親しく之を觀るときは、此の經世に必ず之あり、而も或るもの、以て妄を爲すと詆る。前に云ふ、避け諱む所あり、故に藏に入らず」と。斯の言盡せり。

㋾陸放翁。普燈錄の校訂者。
㋿普燈錄。五燈の中。
㋽迦葉。摩訶迦葉。
㋾王丞相。王安石、荊公。
㋿藏。一切經律論の藏。
㋼木葉。貝多羅葉。
㋽宋公。宋景濂。

古人亡僧の爲に佛事を作すは、其の見道明かならず、臨終に滯着する所あるを恐れて、實に之を開發せんと欲してなり。而も字を打するに、歷職機緣の說、未だ㋟拘々として之を用ひず。無準和尙徑山に住す、觀上座が爲にする下火に乃ち云く、「觀ニ大海一者難レ爲レ水。窮ニ盡波瀾一一漚爾。卽今海滅漚亡。回レ頭踏着自家底。」と云々。座下の名勝因つて之に効ふ、打レ字は此れより始まる。乃ち今の叢林打字を以て定式と爲す。牽綴鬪合、絕して理趣なし。而も所謂亡者を開發することは、果して何くにか在るや。

天童の照察元、素より多病なり。洪武丙辰、病日に篤し、勉藏主其れを勸めて、觀世音菩薩の名號を持せしむ。照其の言の如くす、日に誦すること萬聲、明年十月十七日午の時、自ら念へらく、病勢死を去ること遠からじ、改めて阿彌陀佛の號を持せんに如くはなし。此の念を興すに方りて、忽ち一りの美婦人の、身に六銖の衣を衣、手に一の淨餅を持して、戶外より入つて、其の面前に立つを見る。照驚訝して措くことを失す。心を定めて諦觀すれば、乃ち是れ菩薩相を示す。照涕泣して罪を露し哀を求む、須臾にして見えず。五日を越えて、病盡く脫す。今年五十餘なり。

㋟拘拘。かかはる。
㋠如庵。愚、雪岩欽に嗣ぐ、百丈に住す。

徑山の㋠如庵藏主は、台州委羽の人、敎より禪に入る、沈潛として競はず、博く內外の典に通ず。己躬下の事に於て、尤も硏究精徹し、晩年天童山の左に隱居す。至正甲申、余其の隱所に過ぐ、因て語つて、無情に佛性あり、有情に佛性ありといふに及んで、往復徵詰す。如庵忽ち曰く、「吾記得す、敎中に先德曾て難じて云く、將た無情の中に、本自ら佛性あるか、抑も亦佛性周遍して、無情を隔てず、無情の中に於て佛性あるか。」語未だ竟らざるに、余亟かに之を止めて曰く、「佛性虛曠にして、迥かに名言を出づ。有と道ふことを得ざれ、無と道ふことを得ざれ。」如庵覺えず肯首す。

鄞城福聚庵の比丘普月が奉ずる所の釋迦の銅像、古うして精し。初め像鄱陽に在り、其の始めて造るの由を知ることなし。宋の徽宗政和の間、錢監氏之を得て凡そ烹ること三日、色相益々鮮明なり、咸く之を敬異す。是に於て迎へて、饒州の㋡光孝寺に置いて稱して、辟火金銅釋迦の寶像と曰ふ。光宗の紹興の間に、光孝の住持普傑、工に命じて、其の像を圖して、之を石に鐫る。會稽の沙門仲皎、之が爲に讚す。讚の中に云へることあり、㋢「作家會遇ニ殺レ佛手一。置ニ之烈燄一令ニ銷鎔一。火星逆レ野亙ニ三日一。巍々不レ動洪爐中。」史氏の朝に當るに迨んで、人持して以て像を獻ず。遂に浙左に來る、今朝洪武壬戌、普月財を以て之を史氏に贖ふ。又海會寺に、舊㋣顏輝が手畫の觀音の聖像一大㋤幢あり。筆力精妙、彩飾嚴麗にして、世に見ること罕なる所なり。元の至正の間、城中の高氏、梁皇の懺を修禮すること三晝夜、畫像を請うて、壇場の中に設けて供養す。滿散の夕、二鼓に至つて、其の像より大光明を放つて、其の屋外に透る。市民失火と以爲へり、

㋡光孝寺。支那の名刹。
㋢作家。策士又は銳利の人、禪宗の上達にたとへる。
㋣顏輝。字は秋月、畫家の名工、元朝の人。
㋤幢。はる、張の意、幅と同じ。

㋚蒼黃として來り救へば、乃ち是れ現ずる所の光明なり。後に褚氏、張氏、佛事を修崇す。亦請じて供養す。而も祥光の現ずること初めの如し。夫れ淨法身、一切を含攝す、而も經に謂く、「三千大千世界、芥子許の如きも、是れ菩薩の身命を捨つる處に非ず」といふこと有ることなし。物に應じて形を現じ、緣に隨ひ感に赴くこと、何ぞ眞佛の所在に非ずといふこと莫らん。之を日の天に麗き、影水中に臨んで、同じく之を觀る。人各一日ありて、其の人に隨つて去るに譬ふ。佛菩薩の神化を以て之に較ぶるに、何ぞ啻倍萬のみならん。今釋迦の銅像觀音の畫像を觀るに、其の靈應此の如きときは、則ち像と眞身と、詎ぞ之を二にして深敬を生せざるべけんや。

榮枯木は鄞の人なり、幼より蔬食法華を持誦す。出家を求むるに、父母許さず、强ひて婚娶を爲さしむ。將に㋛醮せんとするの夕、師遁れて雪中に臥して死に幾し。外兄陸氏、衣を解きて之に衣せて、扶けて歸る。溫むるに湯火を以てすれば、乃ち甦る。首め海會の梅峰壽公に事へ、次に淨慈の東嶼海公に謁して、祝髮登具し、神を禪觀に澄しむ、㋜昕夕間なし。志を發して參叩し、中峯㋝斷崖㋞布衲大梁無方古林の諸公の若き、皆嘗て勤恭禮謁す。其の策發を受くるもの多し。㋟雪窓育王に住す、師の戒行精嚴、見地穩實なるを重んず、特に師を招いて、第二座に居らしむ。至正丁酉、勉めて衆情に循つて、法を海會に開く、道俗信嚮、寺賴に以て興る。今朝洪武四年、京師に往いて、鐘山の法會に預る、明年東に還る。又明年鄞城の車橋庵に示寂す。龕留むること七日、顏貌變せず、壽七十三。

㋚蒼黃。あわて、にはかに。
㋛醮。冠婚の禮祭、まつりの名。
㋜昕。あした。
㋝斷崖。了義、高峰妙に嗣ぐ、天目山に住す。
㋞布衲。祖雅、高峰妙に嗣ぐ、中竺に住す。
㋟雪窓。前に出づ。

明州五臺の戒壇は、乃ち靈芝律師重ねて造る。既に成つて講法の次で、老人あり。神氣超邁、眉鬚皓白、進んで啓して曰く、「弟子は常の人に非ず、三珠あり、獻じ奉りて以て壇成の賀を爲す。」言訖つて見えず、因つて其の珠を壇心に置く、屢光相を現ず。

皇朝洪武十一年四月十七日、壇主德顒十師を會めて、大いに戒法を開く。後二日夜分、慈溪の僧子懋方に壇に登るに、忽ち珠光の外に徹して、內に善財童子を現ずるを覩る。懋驚き呼ぶ、一衆環り禮して、悲欣交々集る。是れより每夜、衆益々虔懇にして、珠の現ずる所、或は金色の佛、或は六臂の觀音、或は紫竹碧柳、奇木怪石、㋠頻伽左右に飛び舞ひ、或は㋡月蓋爐を執り、龍神珠を獻ず、神變一に非ず、見聞希有なりと。嗚呼、余聞く、世尊壇を築き罷めば、梵王無價の寶珠を獻じ、帝釋も亦以て如意寶を雨して、之を輔犹す。世尊願命の時、諸の比丘に屬して、戒を以て師と爲さしむ。又謂ふ、吾法若し壞せば、始め㋢毘尼よりせん、然るときは則ち戒の吾が敎に關ること有ること、實に重し。夫れ五臺珠を獻ずるの事、固に已に奇偉なり、豈意はんや。㋣像季澆漓にして、戒法一たび擧すれば、神應煇赫たること、是の如くなるときは、天龍護戒の心、炳然

㋠頻伽。梵語、極樂淨土に住み常に妙音を發する鳥。
㋡月蓋。印度の長者。
㋢毘尼。戒の梵語。
㋣像季。像法の千年に當る、末法なり。

として見るべし。奈何ぞ沙門、戒を視ること、虛文と爲して、略檢痛を加へざるや。

國譯山庵雜錄下　終

國譯題山庵雜錄後

山庵の錄は、山庵所聞の事を錄する也。其の間紀する所、或は善不善、直に書して隱すことなし、殆ど緇門の良史なり。夫れ事宗敎に關ること有るもの、以て書せずんばあるべからず、書して能く公なれば、天下の論に合ふ、尤も嘉すべし。是の書の行はるゝこと、蓋し將に林間・草庵の諸作と並せて、無窮に垂れんとするものなり。

洪武庚午春二月既望

天禧住山　守仁　題

予早歳にして、妙明先師の徑山に居するに侍す。㋑空室老人に、蒙養の室に參承することを獲る毎に、其の誨論を聽いて、啓沃良に多し。蓋し老人前輩の尊宿に參見して、正知見を具す。而も學問該博にして、提唱高妙なり。又善く學者を誨示して、㋺亹々として倦むことを忘る。其の向上の㋩鉗鎚を用ふるに至つては、得て近傍すべからざるものあり。後に兩び淛東の名刹に坐す、閑に投じて太白の山中に居す。予時に皆四明に在り、㋥歳時には必ず牀下に走拜す。予鐘山に來るの三年、其の㋭上足前住㋬翠山の玄極㋣頂公、四明より至つて、老人の化し去るに距つて已に四年、一日山庵雜錄一編を出し示す。之を讀むに、皆舊誨示を老人に聞く所の者なり。噫、再び老人を見んと欲すとも、復得べからず。而も其の平昔著す所の論を讀むことを獲たり、慨嘆に勝ふべけんや。老人別に說法の語錄あり、世に行はる。或は謂へらく、語錄には向上の拈提多し、此の編は乃ち古人の前言往行を擧して、以て學者の見聞を廣うす。語錄の崖嶮なるを視るに、此れは則ち其の平易のみ。然りと雖も、初より二致あるに非ず、佛世尊固に所謂機を觀て敎を㋡逗するものあり。然るときは列祖の門庭、一は拈槌、一は竪拂、一は揚眉瞬目、皆學者をして所入あらしめんと欲す。而も此の編向上の爲人に非ずと謂はゞ、可ならんや。學者要ず當に眼を具して、始めて得べし。

㋑空室。この本の作者恕中の別號。
㋺亹亹。つとめてうます。
㋩鉗鎚。禪宗では修行者の敎練することに用ふ。
㋥歳時。時のふしぶし。
㋭上足。高弟なり。
㋬翠山。この本の作者恕中をこの寺に葬る。
㋣頂公。居頂、恕中の弟子。
㋡逗。投と同じ、投合するの意。

皆に洪武庚午

靈谷住山　清濬拜題

山庵雜錄は、寔に緇門の良史にして、邪禪膏肓の病に針藥とするに足る。私に謂へり、⑪扶桑の今日に補ありと。然りと雖も、未だ古時の印本を見ず、故を以て三寫の誤甚だ多く、初學の徒、數々觀覽に窘しむ。余養痾の暇、一二の典籍を參攷し、且つ臆斷を加へ、畧校定を得たり。倘し猶豫に涉るものは、乃ち之を旁に書して、蓋し疑は以て疑を傳ふるの謂なり。又二三子の爲に、濫に倭點を加ふ。今や工に命じ板に勒し、切に恐る、舛差少からざるを。仰ぎ望むらくは、禪林の才子、慈意を惜まず、重ねて訂正を煩はせよ。⑫寛永二十年癸未仲春日⑬丹陽⑦大梅山に於て題す。

住庵比丘⑦文守

⑪扶桑。日本をさして云ふ。
⑫寛永。日本明正天皇御宇。
⑬丹陽。日本丹波國南桑田郡千ヶ畑。
⑦大梅山。法常皇寺の山號なり、後水尾天皇勅建。
⑦文守。字は一絲、初め澤庵に參じ後に法を愚堂寔に嗣ぐ、俗姓は岩倉氏にして、丹波の法常、山城の靈源、近江の永源等に住す、三十九歲化す、後水尾帝の帝師にして、佛頂國師と諡を賜ふ。

山庵雜錄序

道由言而顯、言以德而傳、然則有德之言、匪徒取信一時、抑乃傳之後世、而無疑焉、恕中禪師謝事瑞岩、閑居太白山庵、以道自娛、蕭然一室、不蓄餘長、學屨日塡戶外、推之不去也、或得其一言之益、不啻千金之重、又如飲甘露醍醐、心目充潤、蓋其平昔游歷諸大老之門、所聞所見、嘉言善行、心會理融、形之於言、不加藻繪、自然成章、若叢林之尊宿、儒門之先達、下至閭巷小子、其言善足以勸、其言惡足以誡、使人聞之心開意解、筆之成書、題之曰山庵雜錄、其徒住翠岩、玄極頂公鏤板行世、遠來京師、特以見示、予讀之不忍釋手、乃知所謂治世語言、皆順正法、龕言軟語、皆第一義、信不誣矣、譬諸草木、良醫攬之、無不是藥、其不知者、執藥成病、世出世間、一切諸法、無非佛法、明理者得之、皆足以垂世立教、有德有言、禪師之謂歟、可謂善知藥病者矣、可謂善談佛法者矣、予於禪師有通家之好、雖未嘗一接顏色、聲跡相聞、亦有年矣、熟知其德足以服衆、言足以訓世、故雖不言、人固信之不疑、況此皆已然之事、實附事明理、言近指遠、宜其益於當世、傳之無窮焉、

洪武己巳夏六月

僧錄司左善世　弘道序

山庵雜錄序

余生平多病、晚年以日本奏請、赴召京師、私謂縱使不往日本、又豈能生還乎、凡平昔親舊、亦未有不以是爲料者、幸今上見憫、特寢其奏、留居天界、既而諸病交侵幾死者三、又幸上憐賜歸天童故山、親舊相勞問、如再世也、余以年幾七十、而萬死中得一生、私欲杜門謝諸緣、以盡餘齒、有法姪莊敬中者、數謁余山庵、而請曰、唐宋諸大士立言着書者、恒間作不絕、及元以來寢希、故近古名德提唱及嘉言懿行、可爲叢林龜鑒者、大率泯沒無聞、翁當叢林全盛之際、徧參諸大老、聞見博洽、每侍語次、間聞口舉一二、皆所未聞、而警發尤深、願翁以游戲三昧、自成一書、上發先德之幽光、下脫後學之沈痾、則法門盛事也、敢以爲請、余曰、子之志固美矣、然余之所言不能文、言而不文、焉足以行遠、是非吾敢任也、敬中又曰、今教法陵夷、前輩淪沒殆盡、翁今遠歸、出於望外、翁辭不任、將誰任耶、若言之文不文、固何足較、苟得直書以彰其事、足矣、願勿固辭、余用是以平生師友所講授、湖海所見聞、或機緣之扣擊、或善惡之報應、與夫一言一行一出一處、不擇其時之先後、人之貴賤、凡可以警勸乎後來者、信意信筆、據實而書之、名曰山庵雜錄、昔宋有名宿、修所謂羅湖野錄、雲臥紀譚、其間所載、大抵激揚第一義諦者爲多、若此類、余少壯時所記、今已十忘七八、晚歲僻處海隅、又不能旁詢博採、故多遺失、余頗恨之、蓋言而道庶爲至言、而未嘗言也、外此則越吾分矣、雖然執吾門遷固之筆者、庶或有可採焉、

洪武八年臘月望日

天台山人釋無慍序

慍恕中禪師以虎丘八世孫、坐大道場、說法度人、爲緇素之所歸依、其二會語、無相居士・宋公濂已爲之序、而山庵雜錄未有序之者、禪師之大弟子、雙林住山玄極・頂公、前住南明韜中瑄公、相率求伯衡作之、伯衡閱之一再過、謂玄極韜中曰、昔獲見二會語、輒讚歎曰、是何其奔注放溢若千江一源也、是何其震激迅利、若雷驚電掃也、是何其混融圓滿、不見斧鑿之痕也、是何其絕枝蔓、去町畦、不墮情識之境也、蓋自眞乘中流出、視彼東掇西拾、以應用者、相去奚啻九萬里也、因其言語、窺其造詣、佛菩薩地位人哉、然而往往爲唱提策勵而發、宣闡法要、究竟已事之爲務、是以不暇泛及也、今觀此錄、則朝廷之上、郡邑之間、市井之中、山林之下、其人其言、其行其事、其文辭、若善若非善、若是若非是、若當若非當、若優若非優、靡所不具、可以勸焉、可以懲焉、而於儒者・釋者・道者・仕者・隱者・老者・稚者・富貴者・貧賤者・商賈者・藝術者・屠沽者・農圃者、以至婦人女子・輿隸臧獲、莫不有利益焉、夫慈雲之霧靄也、尺地無不遮蓋、法雨之滂沱也、莖草無不沾、日月之東升西降也、無昏衢之不照、霄壤之上覆下載也、無含生之不攝、此錄之作、其心蓋如斯、以大慈悲、憫一切衆、多諸方便、巧爲導引、使袪邪妄、而不昧眞智、平等無有異如此、師之能仁於是乎在矣、眞佛菩薩地位人哉、有能於此一覽之頃、超然頓悟、始於不勸懲、而至無所不勸懲、無所不勸懲、而至無勸懲、由正途而入覺地、結習不能使業識不能縛、是則能體禪師纂錄之心矣、玄極・韜中汲々焉、刊印而流布之、其心亦禪師之心也、於戲、尙可視同尋常、隨筆徒以廣見聞資游談哉、作是說已、遂書以爲序。

洪武二十五年冬十月二十四日　　無聞居士眉山　蘇伯衡叙

山庵雜錄上

定水寶葉和尙四明人、參徑山虛堂、凡宗門話頭、未能透脫者、必咨扣老成、不透脫不已、一日造虛堂問云、德山末後句、若謂之有、德山焉得不會、若謂之無、岩頭又道、德山未會、望和尙慈悲指示、虛堂云、我不會、汝去問雲首座、師去問雲首座、適雲首座遊山歸、索水濯足、師亟進水委身出手、爲摩捋之、却仰首問云、德山末後句、某甲未識有無、望首座開示、雲首座以兩手掇濯足水、澆潑云、有什麽末後句、師不明其指、明日見虛堂、堂問云、我教爾問雲首座末後句、他如何說、師云、依和尙尊命問之、被他用濯足水澆潑、堂云、他更無別語、師云、他道有什麽末後句、堂云、那々我向爾道他會得、師於是釋然、雲首座者、閑極和尙也、爲虛堂上首弟子、有高行、住虎丘而終。

平江定惠住持、因大方者、天台人也、法嗣古林、不檢細事、疎宕自如、與郡守周侯義卿善、大方旣謝院事、寓靈岩老宿華公房、至正戊戌九月八日、周以事入山訪之、大方云、某此月十四日、卽此山火化、侯其爲我證明、周戲諾之別去、至十三日、以偈寄周云、昨日巖前拾得薪、今朝幻質化爲塵、慇懃寄語賢侯道、碧落雲收月一痕、周得偈亦未之信、是夜請於華、以燥薪爲高棚、仍借一龕坐去、華謂薪則從命、龕則無有、遂指華所坐木榻曰、此亦足矣、華如其言、十四日晨起登殿畢、與衆僧訣、復說偈曰、前身本是石橋僧、故向人間供愛憎、憎愛盡時全體現、鐵蚍火

裹嚼寒氷、遂袖燥薪行陞柴棚、自秉火、薪得火烈、熖熾然、於火聚中、祝香曰、靈苗不屬陰陽種、根本元從劫外來、不是休居親說破、如何移向火中栽、度數珠與華云、聊當遺囑、火熖到所多得設利、周聞之驚嘆不已、既爲建設利塔於靈岩、復爲詩以悼之云、

元兵下江南、金山賢默庵被伯顏脅、而置諸幕中、從至武林、時中竺珂公雪屋以宋鼎已遷、郎謝寺事、默庵雅知公、且尊其道行、因言之伯顏、請公陞住靈隱、默庵親持請疏、扣公門、公抽關露半面、問云、汝爲誰、默庵云、和尚故人某甲也、公落關云、我不識爾、蓋公雖處世外、而以忠節自持、故不屑靈隱之命、而深拒之如此、時座下有首座某、年八十餘、歎曰、我生於宋、老於宋、乃不得死於宋、遂絕粒而死。

叢林中道聽之說、皆不足徵、後世傳、大惠與佛智同參圓悟、悟偏愛佛智、而大惠常不平、後佛智住育王、大惠踵其席、託以沙水不利、發其塔、而眞身不壞、以鑊鑊被其腦、灌油而焚之、果爾可謂慘戚之甚、常人尙不忍爲、而大惠忍爲之、哉、嘗讀佛智塔銘、乃闍維葬設利、未嘗有全身入塔事、又唉翁住育王、役工起廢、無暇日、適天童虛席、都堂省奉旨遷師補之、師以育王土木功未就、上書宰相求免、有天童卽育王育王卽天童之語、蓋翁清規嚴肅、衲子有犯無恕、皆憚之、因見其辭天童命、相鼓合造謗、乃有將錢十萬買天童之語、至今無知輩相傳以爲口實、予前元重紀至元間、訪雅景文于普福敎寺、景文出翁上宰相書眞墨、以示、始徵前謗爲非、及讀無文文集中行狀三塔塔銘、其言師辭天童、皆與書意同、夫二師之道、猶日月麗天、莫不蒙照、而無謂之謗、雖不足汚師、然亦不可不辨也。

靈隱千瀨和尙者、淛右人也、嗣愚極、讀書綴文、眼空當世、嘗著扶宗顯正論、其剖拆邪正、訂定是非、極有可觀、但其中以宗師拈椎豎拂爲譚柄、引晉王衍握玉麈尾、與手同色事爲證、夫宗師拈椎豎拂、乃激揚向上一着、豈細事耶、而千瀨以爲談柄、非惟昧失自家正眼、抑亦疑誤後人矣。

元既滅宋、以楊璉眞加爲江淮釋敎都總統、奉命發宋南渡諸陵于越之山陰、演福住持澤雲夢者、從眞加獨凌辱理宗遺屍、必夙怨也、雲夢意在諂順眞加、亦以左足踢其脇、無何楊州有人暴死到閻羅王界、卒報陽間天子來、閻王下殿迎見、黃屋左纛車馬駢塡、與世主儀仗無異、既坐定、少頃有鬼卒、杻械一僧、引至殿前、陽間天子責問曰、朕在位四十年、治國治民、固無大過、於汝敎法、未始不爲流通、與卿無讎、卿胡迺阿眞加、亦過辱朕、遂勑猛士、以鐵錐錐其左足拇指、高揭而捶之、其痛苦之聲、酸嘶慘戚、不可聞、須臾退去、暴死人恠而問、陽間天子爲誰、有人對曰、宋理宗皇帝也、被捶僧爲誰、曰杭州演福住持澤雲夢也、暴死人甦、於是到演福、詢其事以驗、所見而雲夢左足拇指、發瘡不可治已殂矣。

近代吾宗卓絕之士、其臨機設施、不踏古人舊轍、而能運己之智、開人之心、使敎法頓增九鼎之重者、固多、何今之罕見哉、杭下天竺鳳山儀法師、前元延祐初、際遇賜三藏鴻臚卿號、不食其祿、敎門少有齟齬、必整理之、高麗駙馬潘王被旨禮寶陁觀音、過杭出褚中錢、就明慶寺設齋、齋諸山住持、省官以下諸衙門官、躬董其事、及班列位次、以潘王中居講堂法座上、衆官以次、班法座下、諸山列兩廡、既坐定、而師後至、竟趨座上、問王曰、今日齊會爲何、王曰、齋諸山、師

曰、大王既言齋諸山主人今無位、而王自處尊位、諸山列兩廡、至有席地而坐者、與邏齋何異、於禮恐不然、王聞之惶愧請謝、卽下法座、前揖諸山、分賓主、而衆官退就兩廡、諸山位齋畢王握師手曰、非吾師幾不成禮、噫、所謂臨機設施、而能開人之心者、鳳山其人歟。

虛谷和尙辭仰山赴徑山、到袁州城裏、四遠檀信、贐金錢楮幣、委積滿前、虛谷徐謝之曰、吾不敏、兩淛諸山、以吾頗諳宗趣、虛徑山席、處吾、欲吾開堂說法闡揚宗趣耳、豈以貧窶見嫌、諸君所贐物請還、庶免新華嚴之誚也、囑侍僧囊道具、隨身而已。

予天曆間、參一源靈禪師于湖之鳳山、因究趙州勘臺山婆子話不破、一日侍次、擧以問師、師云、我早年在台州瑞岩方山和尙會中、充維那、亦曾扣以此公案、山云、靈維那儞下一轉語看、我當時隨口便道、盡大地人無奈者婆子何、山云、我則不然、盡大地人無奈趙州何、我當時如饑得食、如病得汗、自覺慶快、乃云、侍者儞別下一轉語看、予當時打个問訊便行、嘗記、師初入院上堂、擧世尊陞座、文殊白槌公案、拈云、世尊以是錯說、文殊以是錯傳、新鳳山今日以是錯擧、會麼、字經三寫、烏焉成馬、其時竺元先師隱居六和塔、聞之歎艷曰、宣政院擧許多長老、惟鳳山較些子、師寧海人、徑山雲峯手度弟子、出世嗣方山、爲人慈忍有容、提誨不倦、示寂人識與不識、無不嗟悼。

佛經中說、海中有魚、大如山、背上產大樹、晝夜被業風鼓撼、痛苦難喩、莊生亦云、北海有魚曰鯤、鯤之大不知其幾千里也、至正癸卯有人、從奴兒干來、言、彼處近有魚、大如山、從海中過、揚鬣蜃露脊尾於水面、背北投南、隱隱而去、四日四夜、始盡其身、此所謂大身衆生、夙業所感如是、然阿脩羅王、立大海中、身與須彌山齊、以手簸弄日月、其視此魚、則小鮮也、世人局局乎其耳目之所及、耳目之外、皆以爲誕、吁。

禪門宗要者、乃雪山曇公之所作也、雪山於宋淳祐間、依方山禪師于台之瑞岩、則其成此集也、豈苟哉、余少時嘗依鳳山靈公、夜參次、公忽言及宗要、其中提掇古人不到處、餘不能及也、故授一冊命讀之、後四十年餘、天衣淸業海者、重爲刊板、志固可尙、旣自序復求用章俊公序之、皆言雪山盜他人成集作、已刊行、指恩公斷江一言爲證、又爲分作十卷、每篇取本篇一語爲題、牽合破碎失旨頗多、余患來者不審其由、反然業海而陋雪山、故記之。

虎丘東州靈隱獨孤、同鄉同學、交義甚厚、東州住虎丘日、適在城萬壽闕主、諸山擬擧獨孤主之、時獨孤住湖州天寧、歷階而陞、非躐也、東州力沮之、獨孤聞之、不以爲意、踰年東州緣化到湖州、欲見之、自負內慚、不見、恐其惎我敗、我緣事、故瞰其亡而往見之、獨孤得報亟歸、盡禮館穀、又捐私帑、爲之牽先、從容叙交義、與昔無少異、洎東州歸虎丘、深夜於方丈致爽閣中、且行且自訟曰、獨孤君子、壽永小人、予觀今之叢林中爲朋友者、爭一語隙、一絲之利、至於造謗讟、相擠陷恨、不卽斷其命、以快於心也、求如獨孤之寬厚、東州之自訟、幾希矣、凡弟子之於其師也、掩惡而揚善、順是而背非、是謂之孝、掩善而揚惡、背是而順非、謂之不孝、苟師無善可揚、嘿之可也、强以善加之、使人竊議、反訐其非、亦不孝也、切觀近來大方尊宿遷化、其弟子爲具狀、求名公銘其塔、必書、生時父母得異夢、死時火後牙齒數珠等不壞、設利無數、無此數端、不成尊宿矣、是皆不肖子、不明正理、妄立

僞言、玷辱其師、可謂孝乎、傳燈一千七百善知識、有設利者、十四人而已、寂音尊者僧寶傳八十一人、有設利者、數人而已、且吾宗所重者、惟在宗通說通、有向上爪牙、爲人解粘去縛、謂之傳法度生、餘皆末事也、至若火化、而間有諸根不壞、設利流珠者、蓋其平日所修純淨之驗、亦豈易得哉、余懼後來遞相彷效、造合僞言、妄美其師、而鐫之於石、使異敎人讀之、反疑先喆有靈異者、亦成僞矣、遺害敎門、固非小小痛哉。

東暘住道場、被廊僧誣以事訟于宣政院、院檄委本覺住持了庵、同郡守理其曲直、了庵曰、東暘確守規繩、馭衆嚴肅、在下者不得縱肆、故妄興詞訟、欲去之耳、今廁吾羣、有司閑坐府廳上、而東暘是鞫、吾何以堪、卽退居南堂、楚石住嘉興天寧、値有司重作官宇、闕木石、欲取村落無僧廢庵、應所需、因集諸寺住持議之、時楚石力陳不可者、沮之、有司弗聽、遂撾退鼓、歸海鹽天寧、二老皆勇於行義、視弃師席之尊、不啻如棄弊屣、今雖荐禍患嬰己、而猶濡忍戀戀、亦獨何哉。

雲外和尙昌國人、生而身裁眇小、精悍有餘、說法能巧譬傍引、貴欲俯就學者、而曲成之、至於奔軼絕塵、雖鶻眼龍睛、亦無窺瞰分、洞上一宗之傳、獨賴之、晚住天童、四海英衲俱萃、師不倨傲、不貪積、不私食、得施利隨與人、見後生敬之、愈謹、期任宗門也、二時粥飯、必掌鉢赴堂、旣寂無餘資、禪者率錢津送、後事弟子、聘大方昇獨木省愚庵、證無印下、僅有一二人耳。

溫日觀者不測人也、號知歸子、早游敎庠、尋入禪肆、縱性樂道、不拘小節、獨心係安養國、雖造次顚沛、未始暫忘、喜臨晉帖、寫蒲萄、二者並臻其妙、凡到諸刹、臨別必索之錢、隨所得詣屠沽家沽酒獨酌、餘錢散與街坊小兒、令爲前導、齊聲喝云、相公來、是故小兒見之、輒追逐成羣隊、作爲詩偈、度越前古、後終于西湖敎寺、或謂託生白湛淵家、豈世緣未了而了之耶。

竹莊嵒公住台之兜率、生有氣量、平視前輩、故嫉之者衆、前朝天壽節、各州縣必擇請諸山住持一人說法、竹莊適當其任、嫉者多、購禪客出問話、欲挫其機、知事人知具白、竹莊曰、戶門庶務知事人爲之、陞座說法、乃住持人任、汝無多言、明日到天寧、坐方丈客位中、與諸山談笑自若、逮鼓鳴乘輿至法堂、對衆官祗揖登座、祝香罷、斂衣就座、僧出問話袞袞不輟、竹莊答之如流、又能就其語反徵之、而自退衲者有焉、如是更四五人、衆官厭久立、叱止其餘、不許出問話、遂提綱擧話、風飛雷厲、電卷星馳、人皆劫劫、我獨有餘、彼嫉之者、縱一人具千萬舌、亦不能勝讚者之口矣、惜壽命不永、非叢林福。

黃岩靈石新古帆、初見東州于虎丘、嘗委以藏鑰、次見竺元先師于鴻福、一夕上方丈請益云、某甲看狗子無佛性話、無入頭處、望和尙垂示、先師厲聲云、夜深下去、古帆歸堂中詬罵云、不爲我說、卽休、何得見嗔、有人說向先師、先師云、他向後自會去在、古帆聞之、當下廓然、出世一香、爲先師拈出。

寶雲文宗周者、象山人也、淹博敎觀、持律甚嚴、尋講說滔滔若建瓴之水、莫之禦也、臨終陞座講十六觀經、終卷欲與衆訣、左右進前啓曰、和尙後事未曾分付、奈何告寂、宗周曰、衲僧家要行便行、有什麼後事、啓者益懇、於是下座歸方丈、一一條

盡之、卽合掌稱念西方四聖尊號、回向發願畢、遂入滅火化、設利燐爛。

竺元先師、聞如一庵自淛西、多購文籍歸太白、乃寄書與一丁堂有云、閉一庵多買文籍歸、想無別事、只欲敎幾箇雛僧耳、儞可向他說、何不自休去、譬如逐兎之犬、終日逐之、不失其跡、逐之半途、又見麋鹿、棄兎逐鹿、兩俱不得、好懨懨、予居徑山蒙堂時、嘗拜書、問先師起居、答以手簡云、汝在蒙堂中火爐頭、拈弄火筋處、語言談笑處、喫湯喫水處、皆是汝自己、更非別人、直截工夫、無出於此、予想先師當時、必以我爲庸鄙不足承惡辣拳踢、故曲示此說、正是拈黃葉當金悅小兒耳、不然何拖泥帶水如是耶、嗚呼先師入滅、已三十餘年、述此訓言、如同對面。

誠道元者、處俗從石塘胡先生游、出塵參虛谷公於徑山、嘗著性學指要十卷、大有補於世敎、至正丙申、嘉禾高士明、編次刊行、其時張士誠、據蘇州、擅稱王、有鄭明德、陳敬初、倪元震輩輔之、諸儒以其書駁晦庵、論性失旨、言之於士誠、士誠命毀其板、夫性虛廓寂寥冲漠絕朕、豈可以善惡、善惡混分三品、與氣質等而論之、則道元之辨之也、固宜吾聞禹聞善言、則拜、顏子得一善、則拳拳伏膺、今諸儒皆推尊禹顏者、而所行與禹顏不同何耶。

古林和尙住保寧、道望隆重、當時據大師位者忌之、雖大方有虛席處、鮮肯舉之、天童雲臥死、袁文淸公時在翰林、特以書抵明州萬壽莊雪崖云、古林翁曩在虎丘一識、機鋒峭峻、議論氷雪、足可扶激頹風、今天童虛席、雪崖宜一舉之、柄雖俗子、深爲扼腕、由是得與選之數、而又不及中、惜哉。

雪竇常藏主、橫山之弟子、貌寒陋眼不識丁、惟習禪定、所作偈頌、事理混融、音律調暢、大有啓迪人處、故同時人、皆以常遠磨稱之、余少年於徑山識之、今尙記得其所作頌四首、曰鐵牛、曰海門、曰苦笋、曰息庵。

鐵牛曰

百煉爐中輥出來、頭角崢嶸體絕埃、打又不行牽不動、這回端不入胞胎。

海門曰

業風吹起浪如山、多少漁翁着脚難、拚命捨身挨得入、方知玉戶不曾關。

苦笋曰

紫衣脫盡白如銀、百沸鍋中轉得身、自是苦心人不信、等閑咬着味全珍。

息庵曰

百尺竿頭罷問津、孤峯絕頂養閑身、雖然破屋無遮蓋、難把家私說向人。

大凡住持人、須要鉗轄僕隸、亦宜時時以善訓之、庶不爲惡而無累焉、千瀨住嘉興天寧、僕隸盜街坊人狗、煑而食之、千瀨得煑狗名、刑石住姑蘇承天、駕舟赴檀家請經、墅落僕隸盜居民羊、煑而食之、刑石得煑羊名、夫盜狗盜羊、於二人何與、而當其惡名者、蓋尋常失於鉗轄嚴訓而致然也、後之人亦當以彼二人爲戒。

夫住持者、蓋住一切菩薩智所住境、護持諸佛正法之輪、所謂佛子住持、而百丈立斯名、豈偶然哉、近代爲住持、而名焉利焉者、不知其所係之重、間有好交俗子、從事飲啖、吁可惜哉、台州洪福琛石山與近寺俗子方公權交、互相治具、日事飲啖、寺僧有方監寺者、求掌庫職、已喏、而

公權以私憾譖沮之、方監寺懷鞅鞅、賄方丈僕、置毒茶中、毒公權、公權敬石山轉己茶盃先奉之、石山受毒死、方監以誤毒石山、常懷憂疑、一日聞桑扈鳥鳴、自配其聲、爲方監殺我、憂懼益甚、遂病畏、見天光囓蘂薦而死、原其始只爲石山不守職分、與俗子交、而聽其言、遂輕喪自身、後之人可不戒諸、桑扈鳥、田埜人呼爲鍛磨鳥、春暮始鳴、俗配其聲、爲張盤鍛磨、此僧以爲方監殺我、如提葫蘆婆餅焦、脫布袴、泥滑滑類、皆因聲而得名。

合尊大師者、宋幼主瀛國公也、既歸附大元薩禪皇帝、命薙髮爲僧、帝師躬爲摩頂、授秘密戒法、精煉堅確、已多應驗、至英宗朝、大師適與吟詩云、寄語林和靖、梅開幾度華、黃金臺上客、無復得還家、諜者以其詩意在諷動江南人心、聞之於上、上收斬之、白乳流溢、上悔出內帑黃金爲泥、詔江南善書僧儒、集燕京書大藏尊經、庸助冥福、首夏駕幸上都、避暑中途、遇弑、新書經未及半藏、乃已。

至正辛丑、陝西有民家小兒、甫三歲、一日村巷中、遇縣官喝道來、衝前呼其名、作揖曰、相別頗久、尚無恙、縣官驚訝曰、此小兒焉知我名、乃進而問之、小兒爲言前生姓名、又連舉舊與酬唱詩數首、縣官始信其爲故人也、復爲縣官言曰、自與君別、今得爲人身、已歷三生矣、初死爲狗、自厭之、故囓主家兒、主家怒殺我、再生爲鵝、又厭之、投河溺死、今得爲人、與公再相見、萬幸也、聞此兒前身喜玩易、受用太極未動以前一着、故出生入死不受生死移換、麻衣名易曰心易、慈湖名易曰己易、有旨哉。

破庵和尚退資福、赴徑山蒙庵招、委以立僧首座職、有寶上座者、具大知見、遇住持首座開堂、必橫機捷出、迎鋒取勝、一日破庵開室、寶上座至、破庵垂語云、乾坤之內、宇宙之間、中有寶擬議、被打出、其時寶待破庵舉語盡、乃進語、既於中有處、被打出、以謂破庵故擺我、歸衣單下、脫去、火後鄉人收舍利、呈破庵、破庵拈起云、寶上座饒儞有舍利八斛四斗、置之一壁、還我生前一轉語來、擲地惟見膿血、聞之於先輩。

元至正丙申張士誠破蘇州城、其弟九六者、先入城、擇居第、見承天寺深邃爽朗、心樂之、欲易以爲宮室、命士卒毀殿中佛像、士卒畏罪福、不敢從命、九六怒自挽弓射中尊面、卽盡毀、迎士誠居之。

丁酉、今朝大兵攻呂口黃埭、九六督兵出戰、敗就擒、被斷右臂、然後殺之、戊戌方國珍爲行江浙省分省參政、屯守明州、左右司官劉仁本者、頗嗜文學、自編平昔所作詩文、成帙、刊板印行取在城僧寺藏經、糊爲書衣、揭去經文、寫自詩文、吾人見之、雖心酸骨苦、無如之何、吳元年大兵取明州、國珍降、朝廷數仁本有不忠之罪、鞭其背、潰爛現肝臟、乃死、九六一勇夫耳、不明罪福、尚可宥、仁本習孔子業、而忍爲之、孔子曰、敬神如神在、況吾佛爲三界大聖人乎、故二人一毀其像、一廢其書、不旋踵俱受極刑之報、夫報其所可報者、實自報也、非吾聖人報之也。

鄞城官講所、有二僧同居、一僧苦於鼠、以大小二桶、裝照鏡、撲鼠、機發鼠受、撲僧急去、携水、欲淹殺之、同居僧不忍、潛揭桶縱去、明日撲鼠僧他出、是夕僧獨宿、見群鼠喧聒異常、僧厭云、我吾物、嘗失之臥內、公爰得、僧陳所以、始知是夕、鼠集黨竊隣僧條、以報德、故喧聒耳。

覺範僧寶傳始名百禪師傳大惠初見讀之爲剔出一十九人而焚之厥後覺範致書與黃龔智和尚云宗杲竊見吾百禪師傳輒焚去者一十九人不知何意覺範雖一時不悅彼十九人終不以預卷多見人議僧寶傳止於八十一人欲準九九之數乃燕人舉燭之說也

鐵鏡和尚住何山座下有恭都寺者四明人廉介自持精修梵行日誦法華經一部臨終無疾苦更衣坐逝闍維舌根不壞湖海人聲偈追悼至今有能言之者嘗夜坐有偈云點盡山窓一盞油地爐無火冷湫湫話頭留向明朝舉道者敲鐘又上樓鐵鏡特爲座座稱賞之

余訪南堂於本覺夜坐間言及做言句有練纏痛快之殊却舉先休居送僧偈云如蠶作繭自包纏百匝千重在面前裂得破時全體現渾家送上渡頭船東州次韻云動靜何曾沙蓋纏何須更透未生前故園千里今歸去陸有征途水有船復云休居雖精密似覺練纏不若東州之痛快矣

予早年居鳳山擇木寮飯後遣困與朋交擲選佛圖一源和尚閱之令淨頭送至偈云百千諸佛及衆生休向圖中强較量心印當陽輕擲出堂堂高坐寂光場次日清朝問訊乃云古人無剪爪之工汝後生輩忍得唐喪光陰且擲選佛圖到極合殺時擲得一个印出便歡喜云我成佛了殊不知一切時一切處皆是汝成佛處汝卻不知

仲謀和尚住溫州仙岩天下正太平衲子參訪者無虛日予與明性元瑞瑩中三人同至仙岩性元瑩中尚爲侍者余已典藏恰值月望陞堂云一默酬僧雷轟電激三呼領賞玉轉珠回七十三八十四築著磕着礙塞殺人拈主丈昨夜西風枕簟秋無限蟬聲噪高樹後結集人改礙塞殺三字爲能有幾爲其不知立言之難妄以淺見改易先輩語大似以水潦鶴易諸佛機也

黃巖濠頭丁安人諱覺眞號竺心初參田絕耕于委羽山有省遂棄家屬結庵自居見古愚於湧泉愚云良家女子東走西走作麼對云特來見和尚愚云我者裏容儞不得丁拍手一下云三十年用處今朝捉敗愚休去見無際于鴈山春雨庵入門云春雨如膏行人惡其泥濘際云不是不是擬進語被喝出晚年就邑中明因寺前開接待有僧提包直入臥內問之曰儞是什麼僧僧云行脚僧問云儞脚下草鞋綫斷爲甚不知僧無語即擲出其包云者裏無儞措足處又有僧纔入門丁云達磨大師來也僧云我不是丁云是固是只是鼻孔不同一日與明因尼奎長老相見問曰聞長老夜來生得兒子是否答云且道是男是女丁云鷄啣燈盡走鱉咬釣魚竿

育王勉侍者余族姪也年少有志參學不幸短命而死嘗作偈送一侍者游台鴈云烏窠吹布毛侍者便悟去雖不涉言詮早已成露布天台嶺上雲雁宕山中樹此去好商量莫觸當頭諱臨終書偈云生本不生死亦非死秘魔擊叉俱胝竪指予嘗詰其悟入之由對云勉曾於玉几坐栴檀林經案側偶見珪藏主與僧講論僧問云如何是向上事珪藏主以兩手揑拳頭置頭上仍合掌云蘇嚧蘇嚧因此得个歡喜處狼忙到蒙堂舉向遂首座他笑云儞又來耶從此胸次自覺了了予後見珪藏主舉以問之惟見其面頰發紅不敢對徐又問之乃曰我當時做道般摸樣戲此僧實不自知爲何如也信知此事不在言說上至若風運塵起雲行鳥飛皆是控人入處自是當面蹉過今覩珪藏主戲此僧而勉侍者得个歡喜處正如佛會中有少年沙彌

以皮毬戲擊老比丘頭與他證四果事可以並按。

方山和尚住淨慈爲衆開室問僧云南泉斬卻猫兒時如何僧下語皆不契有一僕在傍云老鼠做大方山云好一轉語不合從爾口裏出東嶼和尚住靈隱開室垂語云魚以水爲命因甚死在水中一僧云河裏失錢河裏撈師深肯之石室和尚住雪竇開室垂語不許人下語三尊宿爲人用處雖有不同而剖心露膽未嘗不同後之覽者宜具眼焉。

刀鐳張生名德鄞縣下水人世爲大慈供堂好習禪學常隨衆聽法自覺有省人無知之因天雪小童團雪作佛像禪流各爲偈詠之生隨後吟偈云一華擎出一如來六出團團笑臉開識得髑髏元是水摩耶宮裏不投胎針工丁生天台人參方山和尚于瑞岩曾蒙印可詠琉璃偈云放下放下提起提起一點靈光照破天地二偈借事顯理俱切到余並錄之者蓋不以人廢言也。

護聖啓迪元臨海人爲書生時拜叔父堅上人于里之寶藏寺偶閱其几上首楞嚴經至山河大地皆是妙明眞心中所現物處置卷細繹良久自肯白父母求出家禮徑山寂照爲師服頭陀行久而益勤出世護聖緣不順退居東堂七年著書曰大普幻海曰法運通略曰贅談曰疣說曰儒釋精華曰大梅山志總若干卷又作佛祖大統賦由是得心痨疾而卒壽四十三。

天童西岩和尚蜀人南游徧參至徑山見無準機語相投容入室欲授藏主職或者以力擄之次日爲亡僧訥侍者起龕怯衆一辭不吐無準卽令維那請惠侍者起龕惠至龕前連喚訥侍者者三人亦以爲怯乃曰三喚不應果然是訥頂門放出遼天鶻無準黜或者而以惠侍者代其職惠侍者卽師也師先依妙峯于靈隱靈隱重彩飾兩廡壁面五十三參相禪衲各以偈賀師亦有而妬之者不以登卷妙峯閱卷問曰惠侍者何無曰有不足登卷也妙峯曰試擧看既擧妙峯親爲書之卷首自此聲名爛熳住天童掀幻知庵爲歸藏計別置祠奉妙峯用報知己其賀偈云幸是十方無壁落誰將五彩繪虛空善財眼裏生花翳去却一重添一重。

浩靈江古林和尚弟子古林住饒州永福時靈江爲第一座結夏秉拂禪客出問曰進一步時如何答曰撞墻撞壁退一步時如何答曰墮坑落塹不進不退時如何答曰立地死漢有人到方丈讚歎曰首座秉拂答禪客三轉語盡赴來機好古林云好在什麼處不見道一句合頭語萬劫繫驢橛雖然切不得便恁麼會。

湛天淵當天曆改元在鳳山一源和尚會中居前板秉拂預呈提唱語其間有云翔鳳山前行看白雲乍舒乍卷禹泉亭上坐聽流水或抑或揚眼處作耳處佛事耳處作眼處佛事便見非惟覩世音我亦從中證一源指便見二字云有此二字是與別人說話無此二字方是自家說話天淵不覺避席退謂人曰還丹一粒點鐵成金堂頭之謂也天淵東嶼和尚室中龍象風規凜凜人所敬畏出世芝塘明因而終與敏仲謙齊名仲謙道勝德優能下人出世洞庭翠峯而終使造物者假二公壽必能恢雙清之宗如晦堂之有死心靈源矣。

奕休庵揚州人早歲遊淮甸燕京五臺値歲饑附商舶抵明州客天童衣壞衲日一餐夜不寢儼有古德之風奉化上雪竇虛席衆削牘請爲住持奕欣然携一笠而去坐方丈掌其金穀不周歲盡變平昔所爲向之壞衲今已輕裘向之一餐今已列鼎左右稍有犯必瞋怒自起撲犯

者仆地、用拳舂脚搗、待氣伸心暢、始休、既而盡括常住羨餘、就鄞城貿民房易爲庵而居、日以資生爲事、與竹林寺僧爭屋訟于官、對理不直、牢死、今之緇門中、假善要榮、貽辱大教、豈止一休庵而已、詩云、靡不有始、鮮克有終、可不戒哉。

諺云、人有可修之福可延之壽、此以一世爲論、未能究其原、如確以三世爲論、能究其原、未能通其變、變者一世可以括三世、三世可現行之於一世、且三世之因果與一世之因果、雖有久速之殊、實不出乎一心之作受也、何則多見世人、爲善者反賤夭、爲惡者反福壽、蓋其前世爲善重者、今世雖爲惡、惡不勝善、故福壽、前世爲惡重者、今世雖爲善、善不勝惡、故賤夭、而今世善惡之報、則又在來世、其或前世爲善爲惡不甚重者、今世所爲稍勝之、即能變賤夭爲福壽、變福壽爲賤夭、故人宜通其變、勿礙乎三世、而怠其現修、昧乎一心之作受也。

徑山古鼎和尚生稟侏儒、唇褰縮、齒露齦、聲嘶噪、膚腠皴腊、相工相之曰、爾之四賤相、萃乎侏儒之軀、平生不言而可知矣、師因自立誓禱之於觀音大士、日持聖號無算、夜禮聖像以千計、如是修之二十年、忽賤相化爲福相、唇舒緩而齒隱、聲圓潤而膚腠光膩、後與向之相工遇、賀曰、吾師今之相、非昔之相矣、況陰隲紋已現、即當居顯位、大振宗風、其年出世隆教、自隆教遷寶陀、自寶陀陞中竺徑山、不滿五年、而三遷、居徑山十二年、壽七十九、師之修禱感驗、非獨能增福壽、又能變其形軀、如以物寄入庫藏、而就取之之易、亦可爲吾人自怠者之勉焉。

溈源禪師住紫籜、既爲庫司壁記、復題其後云、滴水粒米、盡屬衆僧、務悅人情、理難支破、當思披毛戴角、歲月久長、明因果人、幸宜知悉、遺墨歲久漫滅殆盡、後一山和尚來踵其席、重粉飾其壁、親爲書之、至今尚存、惟利是圖者、不可不自省。

老素首座一生掩關潛伏、世無識之者、元天曆間有禪人、得其述懷山居偶書三偈、眞墨、請歸源先師、着語、先師云、叢林皆以其不出世說法爲恨、今讀此三偈、如金鐘大鏞、一擊衆響皆廢、謂之不說法可乎、偈恐久而無聞、因如目記之、傳燈讀罷、髮先華、功業猶爭幾洛叉、午睡起來座滿案、半檐閑日落、庭花、尖頭屋子不嫌低、上有長林下有池、夜久驚飈掠黃葉、恰如蓬底雨來時、浮世光陰日不多、題詩聊復答年華、今朝我在長松下、背立西風數亂鴉。

鴈山羅漢寺證首座、目瞽見道明白、每朝以掃地爲佛事、有僧問云、者片田地、掃得乾淨也未、證堅起苫蓆示之、又有僧問云、眞淨界中本無一塵、掃地作麼、證亦堅起苫蓆示之、樂清有山名九牛、證嘗詠之以頌、曰、四五成羣知幾年、春來秋去飽風煙、清池有水何曾飲、綠野不畊長自眠、个个脚跟皆點地、頭頭鼻孔盡遼天、尋常只在千峯頂、大地人來作麼牽。

歸源住鴈福、一夕與座下僧茶話、師舉東坡訪佛惠泉禪師于蔣山、泉問云、大儒高姓、坡云、姓秤、泉云、是什麼秤、坡云、稱天下老和尚舌頭底秤、泉喝一喝云、且道者一喝重多少、坡無語、師命僧各代一轉語、時無酬之者、惟源藏主起剪燭、一侍者咳嗽一聲、師笑云、源藏主剪燭、一侍者咳嗽、隨有定藏主、請師自代、師云、洎不過此、源藏主即溫之壽昌別源也、一侍者、即明之天童了堂也、二人同嗣其法、定藏主即大慈天宇也、出竺西門、元至正間江浙行省丞相達世鐵穆示公、兼行宣政院事、便宣行事、特兩度馳檄、欲起師住天童徑山、皆以老病辭。

溫州壽昌別源禪師、奉化人、久參歸源、志存擔荷、不躡餘蹤、無際本公住江心、晚分座接衲、暨

出世白鷺無際以厚禮冀嗣其法師笑而已酬恩一薊竟爲歸源拈出叢林皆服其爲人師三處移場入門先修繕客館凡所須物畢備雲衲至者如歸私室焉年六十七得微疾與弟子仙巖皓長老徵詰數語奄然而逝。

姑蘇承天覺庵和尚宗說兼通人稱之爲小大惠元至元間有華嚴宗講主某奏請江南兩浙名刹易爲華嚴教寺陞教班資居禪之上奉旨南來抵承天次日覺庵陞堂就爲說法博引華嚴一經宗旨縱橫放肆剖析諸師論解是非若指諸掌其時華嚴講主者聞所未聞大霑法益且謂承天小寺長老尚如是矧杭之鉅刹大宗師耶因回奏遂寢前旨實覺庵之力也。

僧導吳興人元破江南父被戮母遭虜北行導失乳伯父收育之逮年十四問伯父曰人皆有父母我獨無伯父爲言所以因發憤求母再問我母面目何類伯父曰汝類之遂携鏡一奩隨行習櫛髮業以資衣食涉十寒暑莫得忽至河間府狀元縣遇牧馬老軍與語正虜其母人也引導歸家坐未定俄有老媼自外入語帶南音導出鏡自照貌與媼類亟拜亟呼曰娘娘媼問鄉里姓名及生時歲月無差於是母子相執大哭鄉民聚觀浹旬日導欲奉母南歸其家老幼不聽因引母潛遁達楊州置小籃輿坐母輿中自負而行十步一置必四方膜拜然後拜母直抵四明補陀山祈觀音大士現相始還故里既而導求出家母從之不久母死火化灰燼中得小玉觀音一軀至今留宜興南門外精舍中供養精舍乃導所建也。

上天竺我庵無法師黃岩人從方山和尚落髮依寂照於中竺獲侍箋翰有舅氏教庠老成挽之更宗於是見湛堂于演福研精教部寂照惜其去作偈寄之云從教入禪今古有從禪入教古今無一心三觀門雖別水滿千江月自孤後出世既爲湛堂嗣仍蒸一鄉以報寂照蓋其不以跡異而二其心也寂照示寂時師住四明延慶遺書祝其力弘大蘇少林二家宗趣而已餘無他言師又於祭筵中拈香云妙喜五傳最光燄寂照一代甘露門等閑觸着肝腦裂氷雪忽作陽春溫我思打失鼻孔日是何氣息今猶存天風北來歲云暮掣電討甚空中痕年若干無疾坐蛻于白雲堂。

東岩和尚江西人年八十一四衆舉住天童維時天童隳弛之餘師念年老承此重任不遑安處召其徒東圓慶三人而分命之曰東我與江鄉士民有緣汝往代宣吾志得財爲建萬壽乾元寶閣範銅成千如來像暨供具汝其任之曰圓汝諳吏事城中官府汝膺承之曰慶汝小心謹愿和燮上下考歷羸縮惟汝爲能汝守衣閣不五年而閣成像備推餘貲就象山隄海田一區以贍齋盂官府恬熙上下雍肅雖出三人之力苟非師規訓有素焉能卒使之然耶近見爲人師者務在肥其黨類視常住隳弛如行路人視道旁棄舍略不爲意可恠也哉。

斷橋和尚爲人峻硬於衲子謹許可住國清日泳象潭爲首座垢古田爲書記藏主失其名氏結夏秉拂陞堂敘謝乃云首座見前輩來不在稱譽書記提唱語如畫人物種種俱備但缺點眼爾藏主提唱語卻不知說箇什麼他時後日也道在老僧會中辨事來是其以主法爲己任不肯少損威光迷謬後學雖曰抑之實欲扶之也今之主法者自家眼既不明務以甜糖蜜水取悅於人冀其相感作我法嗣嗚呼使斷橋見此浮靡豈惟唾罵而已哉。

鎮江普照寺喜吉祥者山東人也黑而瘠肌類梵僧早歲禀父母求出俗父母責以無後爲大

因從妻育二子始獲爲沙門習唯識業至元二十五年薩禪皇帝剏立江淮三十六御講所普照居其一詔師主之講說外日讀華嚴以十卷爲常課與雲南端無念相友無念唯識宗之魁也與師詳論佛理無念或有少失師正言救之無念無不誠服臨終火浴舍利甚夥其徒留骨石貯以絲函奉二十餘年始建塔于丹徒雩山逮入塔日開視但見舍利露綴函袂若蜂屯蟻聚觸之爍爍然也鎭江之民多有圖其像祠之稱爲吉祥佛云。

明州海會寺僧子安元至正癸卯秋買山寶旛市之上建庵開基見古塋三竇以土實之庵成得病一夕夢入酆都有三人衣冠甚古列跪獄帝前訴安曰安他生姓趙名仕宏曾爲吏以私屈我流遠同受屈者四人既獲肆赦一人生修白業死卽超度惟我三人前後死同塋於此今來又壞我陰宅冤亦深矣本共力殛之念其爲吏時嘗供僧八十員今乃得爲僧故不敢爾獄帝召安致前責還其地安受責既覺忽聞誠實之言毋爽者三聲次日設淨筵命桑枯木爲說戒安病隨愈遂拆庵復封焉鑿而去。

史僉事者鄆城人名銓字衡甫父憲夫南臺丈夫至正辛丑與余會于鄞極讚佛家持誦功德甚大且言親見二事信不可誣燕京有士人常誦胝天呪忽一夕有厖眉老人扣門相告曰某非人乃龍也因行雨失職上帝有譴願求一庇士人曰我何聖而能庇汝老人曰君持胝天呪功德無量言訖老人不見後數日偶左手拇指甲下隱隱微痛視之有一細物如線長三四分其色紅狀如龍士人持呪如故於是夜老人再至謝曰賴庇獲免願公卽今以手舒出牕外既從之須臾雷雨大作但見一龍擘天飛去。

濟寧有信士好打坐凡二十餘年一日報家人言我去矣於是坐脫家人以其身推倒就枕乃呼曰無如是無如是卽起躍入池中死後凡遇親舊乃呼其姓名與之談論如生或索酒飲人以酒滴瀝池中卽謝云構了如是者半年後有僧乞食至其家聞池中有作人語僧振威喝云二十年打坐夫夫焉在因此寂然史公晚年禪誦惟謹爲是二事而起信爾。

洪武五年余客上虞夏蓋湖積慶精舍偶一朝有俞安人者自百官市來長跪於前自陳曰吾與吾夫不相得發心修淨土已七八年矣近一二年中每於澄心靜坐時聞空中細樂及鶴鶴之聲洋洋焉余自謂爲勝境現前或謂是魔境請禪師決之予曰是汝因聞經中有風吹百寶行樹其音如百千衆樂及衆鳥之聲一時同作之文信之既篤根於八識田中無由除去靜定之中乃發現耳汝後若再見此境不得作勝想亦不得作魔想當頭與他一坐坐斷便見惟心淨土本性彌陀全體皆是豈在十萬億遐方國土之外耶俞以手指自胸曰吾自此疑團泮矣。

台州廣孝秋江湛禪師黃岩斷江人幼隸里之化城寺落髮寺之右有岩壁極高聳名松巖其巔有法輪寺基五代唐時勤禪師所創以久廢遺址蕪沒師一日至其處縱觀不覺悽感如久客乍歸戀戀不忍去於是就傍鉅石下禪定鄉民聞之相勸送食出資僦工興造不數年成叢林又於寺之後岡建塔作歸藏計忽一日督其徒開塔尋遣人徧請凡往來者約日俱到山訣別至期道俗坌集師於是令法輪住持信道原等設饌生祭衆駭異以爲年耄潦倒師促之愈急遂出草具致祭師坐堂上受食餘者與徒衆一一嚼味信等讀文哭泣師亦墮淚於是起行入龕中安坐時檀越周衡之以觀音像求讚及衆乞遺偈皆迅筆爲書少頃氣絕某年四月二

十三日也、師遺命肉未冷、卽窆土閉之、衆不忍、次日始閉、樹塔其上、師之族姓及嗣法出世事、見諸用章俊公所著傳云。

道場及庵信禪師婺州人、嗣仰山雪岩、有實行、四海禪衲、切於究明生死者、樂從焉、有數尼亦求就堂前寄單隨衆聽法、不逞之曹求職用、不允、誣告師狎尼私相與亂、被追到杭、拘五陌家、一夕無疾而化、閣維設利精瑩、誣者反坐、靈隱平山嗣其法。

仰山雪巖和尚婺州人、立志超卓、非其人不與交、早歲見無準于徑山、因鑄鐘、令作疏語、師成偈云、通身只是一張口、百煉爐中衰出來、斷送夕陽歸去後、又催明月上樓臺、於是命居侍司、職滿準別請代職者、師不欲與是人交承、望見準送入門、卽伏憁檻、作嘔吐聲、甚厲、準知其情、故指云、此子無福、職始解已、得嘔血病、大怒之、師絕不爲意、暨出世嗣法鄉、雖屢屢拈出、不着於人、有云、破蒲團上、地裂天崩、不從人得、云云、復懷香就座、至仰山始爲無準、焚卻、尙有有準的無準的之語、余謂、雪岩年少被邁氣使、而無準爲一代宗師、不能含忍、致父子情乖如此、凡據大方、握塵拂者、亦足自鑒。

中峯和尙杭州人、既投師祝髮受具、決志參究、不到古人堂奧不已、時高峯和尙、負仰山雪巖左劵、居天目師子岩、立死關誓不接衲、一見師大喜、授以話頭、師勵精咨決、因誦金剛經、至荷擔如來阿耨多羅三藐三菩提處、恍然徹悟、自是惠辨無礙、上至君王宰輔、下至三教俊英、莫不傾誠問道、所著書及語錄若干卷、弟子則天如徧集奏入大藏、追贈普應國師之號、師形模魁碩、稍俯首則氣喘、常平目安坐、凡請求法語、以兩頭陀、扛紙信筆書之。

布衲禪師、明州定海人、得旨訣於高峯、嘗賡續永明山居詩、其意趣不相上下、而句法圓熟、間有過之者、臨終書偈、坐逝於中天竺桂子堂、火餘設利頗多。

誠止岩住杭之虎跑、初參布衲、次見天池元翁信公、有省、嗣其法、虎跑產業素薄、有僧數十人、師每日托鉢贍之、祁寒溽暑、不少懈、年老示疾坐逝。

珙石屋見及庵於道場、後隱居吳興霞浦山、以清苦自持、不干檀施、苟絕食飲、水而已、爲人慈詳閔物、作爲伽陀多警發語、眞末世善知識也、

無見禪師、仙居葉氏子、世業儒、以俊才掌天寧古田內記、參方山禪師於瑞岩、盡得其要領、翻然拉可藏主者、同至華頂、尋宋高庵所居故址、結茅而居、於是道化大行、學者雲集、道俗以爲、無田不可以蓄衆、往往持田劵來施、師皆卻之、冬夏一衲、食惟充饑、不分麤細、遷化火浴、忽胸堂中、清水迸出、如瓶注、得舍利大如菽、光耀人目、至今存山中供奉云。

斷崖義首座參高峯、因語不契、峯擠之、竟墮懸崖極底、是夕大雪、衆疑其已死、次日雪晴、同參者、賫薪火尋至其處、意就焚其屍、而師危坐古樹下磐石上、憾之乃張目四顧、殊不知有擠墮雪寒者、歸復謁峯、峯默異之、自是道譽日振、緇素歸依、凡有所問、惟以杖打之、不露言氣、要其自會、近代宗師、多以言說爲人、而師獨不然、可尙也已。

徑山本源和尙、諱善達、出仙居柴氏、蚤年與及庵信公行脚、誓不歷職、往西江見雪巖、隨衆入室、一日岩見其人物表表進止有度、欲授以堂司職、師謀於及庵、庵曰、我與公昔有誓、今可違乎、師遂止、後歸仙居、里人請主多福、棄去游湖南、主福嚴、福嚴唐時道觀、至思大禪師易爲寺、

道士多不樂禪師誓令其黨後皆爲住持中有一人姓木名達善今師姓名適相符惟錯亂耳人以是知師乃木道士再世也後還浙西見徑山雲峯入室有省適惠雲虛席師補之一香始爲雲峯拈出後住保寧淨慈徑山皆有成績可紀師凡住處不設臥榻夜則秉燭焚香安坐至旦赴衆率以爲常又體所稟與人異遇嚴寒則衣絺綌熱則衣繒絮以餘貲搨大圓院于徑山東路半山接待雲侶忽一日自知時至會衆叙平生行脚事畢須臾而寂叢林中或以其不歷職而鄙之當百丈未立名職以前人惟道是務至於悟明心地力荷大法者如杲日麗天疾雷震地含識之流無不受其照燭警發不知當時歷何職而亦可鄙之否乎

易首座字無象宋將家夏氏子膂力過人武技最精曾襲父爵不樂棄官隸上虞奉國寺出家落髮其師俾誦心經三日不記一字因大惡之俄有僧善妙峯者過其寺謂其師曰此人既不識字惟好危坐恐是禪定中來可以與我否其師欣然命與俱首抵寶求挂搭孜孜參究脇不至席忽一日定去屹如枯株隣單有正首座者常候伺之經七日徐徐出定似有慶快清夜徐步廊廡間正云且喜大事了畢易不答指所見鐘樓肆口說偈云云又以正言黎明卽振錫兼程疾馳纔二日抵華頂謁溪西和尙值曛黑門已閉遂止宿門外昧爽門啓入見溪西往復勘對悟旨踢倒香椅卽行溪西喚回不聽竟下山遂往杭之天目謁高峯機語尤契合俾爲首座至正初來明之海會端居一室棧絕諸緣影不出戶道具不離側人咸敬之至正甲午正月忽謂侍僧曰吾候來月二十四日暫遊戲江東至期沐浴更衣索行纏繫足命僧扶至佛前禮三拜退趺坐告衆曰吾前日豈不向汝道在今日遊戲乎乃泊然而終壽九十九停龕七日顏貌鮮明手足柔暖如生闍維惟見火光迸散如衆丸跳躍絕無煙鬱既燼獲設利不計其數

山庵雜錄上終

山庵雜錄下

天台沙門釋　無慍　述

湖州妙覺期堂僧淨、吳江田家子、幼失學、既得度謁妙峯玄、玄中峯之子也、令其參父母未生已前、那个是我本來面目、淨如是參之三十年、無所入、後明州華嚴寺僧照公至湖與同處、勉其誦楞嚴經中、觀音圓通一品、忽一日誦至生滅既滅寂滅現前處、豁然有省、通身歡喜、口不能言、惟手足舞蹈而已、或問云、汝風顛耶、答曰、寂滅現前、洪武初、十月二十五日、謂照公曰、十一月旦是我生日、於此日死去也、至期沐浴更衣祝香三片、一奉釋迦文佛、一奉無量壽佛、一奉山主了公、公蓋其得度師也、且囑左右云、我死後三日茶毘、七日鍛骨、但恐不受鍛耳、人皆疑其言、及以骨入鍛、骨鎔溢作汁、火冷結作靈芝一枝、光彩燁燁、五色相間、扣之作聲、雖雕鏤繪畫、有所不如、至今靈芝在妙覺期堂焉。

燕城慶壽寺海雲大士、諱印簡、山西人、姓宋、七齡父授以孝經開宗明義章、師問云、開者何宗、明者何義、父異之、携見傳戒顏公、公欲觀其根器、以石頭和尚草庵詞命讀之、至壞與不壞主元在處、乃問云、主在什麼處、顏云、什麼主也、師云、離壞不壞者、顏云、此正是客也、師云、主還、顏吟笑而已、卽往禮中觀沼公、爲師薙落受具、偶一夕聞空中有聲、召師名曰、印簡大事將成行矣、毋滯於此、遂挾策之燕、過松鋪值雨宿於岩下、因同行者擊火、師見火星迸散、遂大悟、以手捫面曰、今日始知眉橫鼻直、遂謁慶壽中和璋公、先一夕公夢一異僧、策杖徑趨方丈、踞獅子座、明日公以所夢語左右、且曰、今日有暫到至、卽引見我、迨日晡師至、公笑曰、此衲子卽夜來所夢者、往復徵詰、師機語捷出透脫無滯、公喜命典記室、智證益深、乃以衣頌授師、頌曰、天地同根無異殊、家山何處不逢渠、吾今付與空王印、萬法光輝揔一如、出世爲璋公嗣、歷諸名刹、凡兩主慶壽、自太祖至世祖、屢朝師奉之、位至僧統、顧遇優渥、年五十六、忽患風痺、一日說偈辭衆畢、顧侍僧云、汝等毋諠、吾欲偃息、侍僧急呼主事人至、師已吉祥臥逝、闍維獲設利無算、奉勑葬於慶壽寺側、建石塔其上、謚佛日圓明大師云。

至元二十五年春、僧統楊輩眞迦、奉旨引江南敎禪諸德、詣闕論道、上問、禪以何爲宗、於是徑山住持妙高進前答云、禪也者、淨智妙圓體本空寂、非見聞覺知之所可知、非思量分別之所能解、上又云、禪之宗裔、可歷說一遍、高云、禪之宗裔、始於釋迦世尊在靈山會上、拈起一枝金色波羅華、普示大衆、惟迦葉微笑、世尊云、吾有正法眼藏、涅槃妙心、分付迦葉、由此代相授受、而至菩提達磨、達磨望此東震旦國有大乘根器、航海而來、不立文字、直指人心、見性成佛、是爲禪宗也、上嘉之、高因從容進云、夫禪與敎本一體也、譬如百千異流同歸於海、而無異味、又如陛下坐鎭山河、天下一統、四夷百蠻隨方而至、必從順成門外而入、到得黃金殿上、親覩金面皮、方可謂之到家、若是敎家、只依著文字語言、不達玄旨、猶是順成門外人、若是禪家、雖坐破六七个蒲團、未得證悟、亦是順成門外人、謂之到家俱未也、是則習敎者、必須達玄旨、習禪者、必須悟自心、如臣等今日親登黃金殿上、面覩金面皮一番、方可稱到家人也、上喜賜食、而

退。

夢堂和尚重修晉唐宋三代高僧傳、易十科爲六學、禪學中二祖可大師斷臂求法事、禪書載之者不一、獨宜律師謂、師遭賊斷臂、同居琳法師、尙不使知之、及琳法師亦遭斷臂害、可大師爲之包治、運用不便、琳恠之、大師因曰、爾豈知我亦無臂耶、夢堂欲遵之入傳、余當時告之曰、大師爲大法未明、僵立深雪中、命亦不惜、況一臂乎、苟謂斷臂人之所難、今世之小丈夫、操心根暴者、往往爲之、曾謂、大師爲法忘軀、秉志勤懇、顧不能邪、假令盡如律師所傳、豈有賊來傷人、專斷其臂而已、然臂既斷、焉有與之同居者而不知歟、又焉能爲人包治其臂歟、此決不可信也、夢堂曰、律師乃肉身菩薩、其言豈誑、余曰、律師所傳之人、非一一親覩其行業、必藉他人采集事跡、以此推之、蓋采集者、有訛謬在、律師必不以禪律異宗、而誣爲此說、斷斷矣、蓋亦信以傳信、疑以傳疑之意也、不然則後之肝膽、吳越者、妄加更易、而假律師以取信於世焉耳、於是夢堂肯首、遂依傳燈入傳。

佛光道悟禪師、陝右蘭州人、姓冠氏、生而有齒、年十六祝髮、後二年游方、自臨洮歸、夜宿轉子店、夢梵僧喚覺、適聞馬嘶、豁然開悟、自吟唱云、好也羅、好也羅、遍虛空、只一个、告其母曰、我夜來拾得一物、母問云、儞拾得何物、答曰、自無始以來、打失底物、一日欲參訪知識、里人覓偈於師、師偈有水流須到海、鶴出白雲頭之句、及至熊耳、謁白雲海公、契合、先是有問公何不擇法鬬者、海不答、徐云、芝蘭秀發、獨出西秦、比師至、公聞空中人語、曰來日攝郭相公、蓋海所住寺、乃郭子儀建、而師其後身也、海公沒、師出世、住鄭州普照寺、嗣其法、既而退居竹閣庵、浮沈洛川、人莫之測、嘗謂人曰、道我是凡、我向聖位裏去、道我是聖、我向凡位裏去、道我不是聖、不是凡、我向儞眼睛鼻孔裏、七顚八倒去、泰和五年五月十三日、無疾而逝、適所居屋上、有五色雲如蓋、中有紅光、圓如日者三、壽五十五。

吳興何山耆舊僧某、擅權侮衆、素行不軌、尤嗜殺生、一日宰猪饌客、先以首入鍋煑之、自去候其生熟、忽見一人首張目咬齒、頭髮蓬亂、於沸湯中翻覆、可畏、僧見之怖懼戰慄、若無所容、及遣他人覘之、猶豬頭也、其僧因此改行從善。

趙文敏公訪寂照先師于杭州廨宇、茶罷公舉近詩、有丁此清淨障句、先師云、清淨焉得有障、公曰、厭垢汚愛清淨、得非障乎、先師云、將謂是个翰林官人、元來是个冠巾和尙、公因云、老母誕某之日、夢一異僧入室、平生於禪宗向上提持、雖未能盡解、然若經敎所載、讀之、卽通大意。輝東溟黃岩人、義方右丞妻、爲母倚勢恃强、蔑裂先輩靈石蓮一舟者、得法於龍翔笑隱、受宣政院檄、住持本寺、東溟攘居之、又估鴻福安國兩刹、一己任三處住持事、恣意爲非、一夕醉酒睡起、眼見靈石伽藍神令鬼卒扼其頸、以膝築腰、使其跪、而亂杖捶之、且呼自名云、宗輝此回不敢盜常住物也、神幸宥我、神幸宥我、如是三年始卒。

鄞縣寶幢市周婆、生修淨土、每遇歲首、持不語晝夜長坐、盡正月、遇盛暑、就據會亭、施茶湯、盡一夏、年七十餘、一夕夢見大荷葉徧覆寶市一境、手持念珠、行道荷葉上、旣而得微疾、隣人夜見幢旛寶蓋入其家、黎明婆已合掌念佛而逝、嘗聞佛謂、末法中南閻浮提女人、獲生淨土者、多如雨點、今以周婆觀之、良信洪武庚戌冬、奉化田子中訪余太白、同居者久、余偶言、金剛般

若經閻羅王界稱爲功德經、故世人薦亡者、多讀之、子中誓終身受持、一日值其母諱日、發心誦此經百過以薦、晨起坐松榻上、方誦至九遍、見鬼卒枷杻一老嫗跪榻前、髮離披覆面、熟視之、乃亡母也、子中倉卒不知所爲、須臾引去、若將脫枷者、於是子中大泣、恨不即時輟經與母相勞問、余謂、此經功德之大、不可云喻、若子中發心持誦、即冥感陰界、俾母子兩得相見、以釋其苦、嗚呼偉哉。

育王虛庵實首座、寄臥雲庵主偈云、黃金園裏馬交馳、徑寸多成按劍疑、月晒梅華千樹雪、臥雲一枕夢回時、天童幻庵住首座、拜應庵塔偈云、眈眈睡虎管窺斑、便把中峯作靠山、不得破沙盆一个、子孫乞活也應難、默中唯西堂詠蠶偈云、桑空柘盡始心休、綿密工夫一繭收、爐炭鑊湯拚得入、爲人只在一絲頭、佛隴宜行可聽、雨偈云、檐前滴滴甚分明、迷己衆生喚作聲、我亦年來多逐物、春宵一枕夢難成、噫、四人學者偈語雖工、在當時已泯泯無聞、余故錄之以示後學焉。

竺元先師老年閑居天台紫籜山、而策發來學不倦、嘗謂、做頌須事理俱到、譬如打索、兩股緊緩不同、則不堪矣、大川和尚作蜘蛛頌固好、但其中三字、於理固無害、於事則不然、其頌云、一絲挂得虛空住、百億絲頭殺氣生、上下四圍羅織了、待無漏網話方行、末後三字、於蜘蛛卻無交涉、又題出山相云、龍姿鳳質出王宮、垢面灰頭下雪峯、誓願欲窮諸有海、不知諸有幾時窮、以雪峯易雪山、拘韻耳、而此地有雪峯、其名既顯、似覺有妨、所以不純也、又云、虛舟住金山、因雪上堂云、一夜江風攪玉塵、孤峯不白轉精神、從空放下從空看、徹骨寒來有幾人、學者爭誦之、虛舟既不識古人舌頭落處、而學者又隨例顚倒、因卽其所以、師乃云、古人謂雪覆千山、因甚孤峯不白、此是一轉語、而虛舟以爲孤峯實不白、誤矣、又云、大凡入院佛事難、得精妙者、蓋作者多故也、東嶼住淨慈、山門佛事云、清淨慈門、一湖秋水、入得入不得、虎咬大蟲、蚍吞鱉鼻、且移他處用不得、竹泉住中竺、佛殿佛事云、撥塵見佛、誰知佛亦是塵、罕逢穿耳客、多遇刻舟人、甚有體裁、學者可爲法。

元庵會藏主臨安人、久居淨慈蒙堂、雅善趙文敏公、公嘗與寫其所作詩、成巨軸、復題其後、人皆以爲夸、而元庵漠如也、寺僧澤藏山者、出資繕修涅槃堂把針板礦所溺坑、禪流謝以偈卷、元庵見之不懌、衆請其作、遂成偈云、涅槃一路盡掀翻、觸處工夫見不難、洗面驀然摸着鼻、纔針眼裏好藏山、時晦機和尚爲住持、特上堂稱美之、以此偈推之、則其詩之精絕也可知矣。

中天竺一溪和尚、諱自如、福建人、元兵下江南、師年少被游兵虜、至臨安、遺之而去、臨安富民胡氏收養之、令伴其子弟讀書鄉塾、師隅立凝神、靜聽、默識無所失、胡氏喜因子之、既長命隸里中無相寺爲僧、參雲峰於徑山、得旨、戒檢精嚴、法服應器不離體、又能誦楞嚴、法華、維摩、圓覺等經、初住淛江萬壽寺、寺後有富民黃氏、重師戒行、常供以伊蒲塞饌、一日請歸其家、進供愈勤、乃開私帑示師所藏金玉異寶、欲動其心、師歸謂左右曰、彼黃氏者以帑中寶示我、欲眩我死去爲其子耳、殊不知我視金玉如瓦礫、古人墮此轍者頗衆、非獨爲其子、爲其牛馬者有之、我自此其疎黃氏矣、天曆初中天竺住持笑隱訢公、奉詔興建大龍翔寺、因舉代住中竺者三人、上以御筆點師名、宣政院具疏禮請、未幾化去、多靈異云。

錢塘廣化寺住持覺宗聖、徑山本源所度弟子也、羣弟子中、唯師最少、常受其慢侮、由是勵志、孜孜講學、遂從夢堂于四明、時侘石住大慈、固招其居侍司、未幾、又從石室學、詩日臻其奧、若趙公子昂、虞公伯生、張公仲舉、皆稱賞之、尤篤於廉信、不苟一食於人、與人期雖風雨弗爽、中歲究絕學之旨、初參仲謀和尚、無所入、遂叩南堂于本覺、南堂曰、汝自是了事人、但聞見太多隘塞胸次、以致本地風光不能發現、於是隨問曰、如何是佛、南堂曰、晨朝有粥、齋時有飯、擬再進語、南堂以手揶揄曰、不是不是、宗聖恨其不爲明白說破、次日謁云、和尚開大爐鞴鎔鍛聖凡、我正如一塊頑銅鈍鐵、投入其中、以求鍛煉成就美器、若不能者、是和尚之爐鞴缺、熱耳、南堂念其虔懇、曲誘之曰、我此法門、只貴直截承當、不在世智辨聰也、若能發決烈志、一刀兩斷、有什麼頑銅可鍛、有什麼美器可成、去此二途、向父母未生以前、道一句看、宗聖無語、後效古人、頂彌勒佛像、旦暮行道稱念尊號、祈生兜率內院、仍賦詩以自見、年六十二得疾、命左右取平日詩文藁、悉火之、乃逝、師黃岩人、族蔡氏、嗣怪石云。

無言和尚居江心東堂寮、揭榜於門云、齋前看經坐禪、齋後接客作務、而於常住庶事、未嘗言及、或有對師讚毀當代住持、惟含笑而已、至論叢林典故宗門綱要、則亹亹笑譚、終日忘倦、蓋得爲近代東堂之體也、一日澡洗畢、偃臥於竹牀上、乃自笑云、老不好、摵之已化、時無際和尚、亦爲東堂、石室岩公領住事、學問膚淺、眞率有餘、寺者舊皆師徒弟、師慮其慢住持、凡旦望聽說法、罷俱詣師處、作禮、師必令其舉上堂語、乃唧唧云、今日長老好上堂、其作成住持有方、馭徒弟得法、有岐上座者、乃明巖熙公所度之子、一日持郁山主跨驢圖、請無際題、師援筆成偈曰、策蹇溪橋蹉脚時、悞將跪豈作眞珠、兒曹不解藏家醜、笑倒楊岐老古錐、乃問云、儞且道楊岐者一笑、落在什麼處、岐云、無風荷葉動、必定有魚行、師掌云、歸去師前分明舉似、其方便爲人又如此、岐上座卽大梅仲邠也。

虛谷和尚婺州人、淨慈石林和尚會中掌內記、昇記室、貧而苦學、寒暑如一、嘗度夏太白、竊東淨手巾、爲褻衣、後出世領仰山三十年、徑山六年、囑東淨手巾、不許題字、意在贍貧也、早年夢入淨慈羅漢堂、至東南隅、忽一尊者、指楣梁間詩示師云、一室寥寥絕頂開、數峰如畫碧於苔、等閑翻罷貝多葉、百衲袈裟自剪裁、初不諭其意、迨主二刹良驗、蓋仰山有貝多葉經、而徑山有楊岐衣也、吁師之出處、彼應眞者、爲之前定、非果位中人、能致是歟。

溫州壽昌絕照輝公、坐夏淨慈東淨寮、蜃壁中有水墨觀音像、師每夜禮之、祈懇至切、忽見淨瓶水從壁湧出、通身歡悅、從此造詣益深、智鑒益明、嘗有偈云、工夫未到方圓地、幾度憑闌獨自愁、今日是三明日四、雪霜容易上人頭、有志者聞其偈、無不興起、蓋其致誠感人如此、譬如砒霜全體是毒、苟食之、豈有不死者哉。

宋度宗爲北兵攻急、命道士設大醮、奏章天庭、問國家重事、是時高公伏章、久不得報、既竭事問、故高公云、爲天門不開、定徑山四十八代住持、故得報遲也、虎岩住徑山、寂照先師爲第一座、每聞虎岩法座上、舉此事、以夸衆、謂住持豈苟然、至於四十八代、尙預定之天庭、寂照頗心非之、及寂照住徑山、適當其代。

昔雲居卽庵和尚、土地神現夢、謂只有一粥之緣、已而果然、凡爲諸方住持、皆報緣絲髮無差、

然妄爲攘奪、失身囹圄者、往往有之、聞天庭定名土地神現夢二事、亦當少戢鋒銳。

天目居山有魁一山者、蘇州人、博學多才、與天童平石翁交甚密、當叢林全盛時、人皆翁翁求進、魁獨棲遲於巖谷、不與世接、有古大梅・懶瓚之風、獨許山下檀越洪家府諸子弟往來、既終洪氏夢、魁乘一山轎至其家、次日產一子、名應魁、字士元、自幼入學、至娶妻育子、絕無前生趣味、年三十忽自猛省、盡變平日所爲、與一僧明維那者、結屋東天目絕頂、習禪定、至若燒畚乞食皆躬爲之、雖老於頭陁者、有所不如、至正丁酉猫獠燒劫徑山、余奔抵其所、士元肅容、禮度和雅、答對從容、徐問其故、乃知魁後身也、因謂之曰、公前身與天童平石翁爲莫逆交、今翁年垂九十、耳目聰明、公盍作偈寄之、庶見一夢兩覺而夢覺一如乎、士元乃作偈曰、寄語天童老平石、一念非今亦非昔、欲聽楓橋半夜鐘、吳江依舊連天碧、偈未及到、翁已示寂。

徑山惠洲提點虎岩徒弟、頗聰明有幹蠱才、掌常住衆務、三十餘年、一切金穀、恣其糜費、或以果報諭之、乃答云、滿載戴角來、洲只戴得一雙、至正初高納麟領行宣政院事、其屬淨珂具狀訴之、結罪杖斷歸俗、既而潛於化城院、得風痺疾、攣拳如蝟、兩手握拳、承其兩頰、兩脚反承其尻、看病人欲伸之、痛不可忍、日夜但聞霍霍之聲、如是者三年、始氣絕、洲平昔以龐心任事、輕視因果、乃言滿載戴角來、只戴得一雙、余謂三途報中、歲月長久、一雙去一雙來、至無量劫、戴此角、何止一歲而已、凡司常住金穀人、宜以洲自鑒。

洪武八年秋、余訪同門友報復元于象山智門寺、寺有提點彝正堂者、四十餘年、管領常住出納、廉能謀斷有方、撫衆和易、歷六代住持、終始如一、是年七月二十四夜、夢兩童子並立榻前、問之何幹抵、此答曰、請提點考算單帳、答云、我無單帳可算、覺而再睡、得夢如前、次日到方丈說其夢、稟云、夜得此夢、恐今歲庫司知事人懶慢、常住日黃簿未成、和尚宜促之、觀其言貌、絕無愧赧態、少選報彝歸房、跌仆地上、如熟醉、至夜半始甦、急處分後事、然後瞑目、彝於智門可謂有功矣、臨終尚爾、諸方執事者、遇常住物、如鷹拏燕趨、不以罪福爲事、聞此自須改行。

徑山耆舊諱清泚、號一溪、壯年不守戒律、飲啖無所擇、至中年自念、人生於世、壽命能幾何、一旦無常殺鬼到、將何排遣、遂盡斂所積衣資、就普慶寺東、建觀音堂一所、修白淨業、祈生淨土、越數載、手書金剛般若經、至三千大千世界處、握筆正身安坐而化、至正丁酉猫獠燒劫普慶及居民房室、獨觀音堂巋然獨存、佛說善惡報應如影響、渠不信夫。

處州麗水縣、白雲山白雲度公、久參華頂無見和尚、平生打硬做工夫、一切時一切處、卓卓地不喜從事語言、苟有學者求法語、但徑以己躬大事示之、餘無他說、近代居山爲化主者、多是採摭古人遺言、以爲己出、狐媚後學、遇明眼人、就其語詰之、恰如爲盜者、盜主家物、復求售主家、贓證明白、更無他詞、惟面頸發赤、恨藏身無地、諦觀度公機用、天地懸殊、開入其室者頗多、不知有能領其旨者否。

海會翁臨海人、年三十、捨家入道、投徑山虎岩披剃、初至柄檀林歸堂、巡按有見其舉止、山野竊譏誚之、師發憤、翌日卽往天目求中峯誨示、於是忘餐廢寢、殫力參究、夜深睡重難遣、摘數珠撒暗地、摸足數乃已、久之無所入、時東州住虎丘、古林住開先、東嶼住楓橋、師如蘇州出入三老之門、漸臻智證、出世龍華法嗣、古林、年九十三、抵育王守橫川祖塔、俄平地跌損左足、不

能運履、每林坐當清夜朗吟古人偈語、其徒文渙問曰、一生參禪、到此不能受用、卻託吟詠自遣、師曰、不見大惠和尚因疾呻吟、左右云、平生呵佛罵祖、今乃爾、大惠云、癡子呻吟、便不是耶、渙禮拜、既寂火化異香襲人。

東魯山四明人、爲人剛介不貪、人敬異之、出世住東山、凡受業房中已資、悉携至東山、以助土木之需、無何一新衆宇、忽疽發背、左右欲請善醫者治之不從、但安坐處分常住庶事、且言、我死、衣物除送終外、悉歸公帑、寺僧謂、師新度弟子十餘人、萬一不諱、孝服無所出、師不應、再請、乃命各與穀一石、及終寺衆嗟悼不已、竊觀近代據師席者、大率初領事、卽關集衆佃、倒換契帖、得錢應支常住、剋時日取贏羨、迨臨衣死、物盡分與私徒、而送終則靠損常住、吁其視魯山有間矣。

如一庵者永嘉人、姓袁氏、先誕五日、父夢一異僧持梵經至、問何來、曰五雲山、問姓曰姓殷、問名亦曰姓殷、且謂後五日當再來、留經表信、至期果誕、師、師頭骨嶄聳、目光射人、年十五師事方山和尚、出家登具、久依竺元和尚、得其要領、住保福退居西礪庵十年、道望益隆、師早年發志、暗誦首楞嚴經、至第五卷、得嘔血疾、乃輟、疾瘳一夕夢見所未誦經、皆金書布空中、厲聲讀之、既覺猶存、移時始隱、故師再誦足此一經、每日誦一過、至終弗替。

斷江禪師諱覺恩、族慈溪顧氏、師形模脩瘠、操履清峻、幼依雲門廣孝寺落髮、後從明之延慶聞法師受四教儀、七日通之、莫不驚訝、時橫川和尚住育王中興禪宗學者輻湊、師往炷香入室、機語相投、命典內記、由是德業日彰、遐邇知名、師所製詩頌、典雅蒼古、宋提刑牟公獻之首爲之序、一時士大夫、若趙文敏公、鄧康莊公、袁文清公、皆相友善、出世蘇之天平、嗣橫川和尚、後遷開元及明之保福、而終于越之天衣、一日坐丈室、次扶杖而言曰、老僧、欠空倚杖絮、分明盡出須菩提、顧侍者曰、會麼、曰不會、卽擲杖倚蒲團而逝。

至正庚子定海白沙夏太三、以運粮如燕溺海死、後十六年、當洪武乙卯、其妻陳氏與子善追念太三、性禀酷暴、馭下少恩、死於非命、孤魂沈滯、曷由昇濟、遂斂貲來鄞之十字港庵、嚴設道場、種種殊勝、延淨行僧十人、請叶萬宗主之、修禮梁皇懺法、陳氏虔懇懇至、初入道場、衆聽敷陳、無不感泣、是日禮二卷、至中夜少就寢、有僧宜便、忽驚呻寐語、撼之不寤、惟見其多苦辛憂怖狀、於是萬宗等懼其不甦、悉起持呪、良久疾呼之、乃甦、問、故惟泣而已、再問乃言曰、有神人若草天者、冠帶甚偉、傘蓋劍戟之衛甚嚴、逼令我同取夏太三來、此受薦度、道經蟹浦、神威稟凜、行者遠避、備歷諸險、臨大海、見鬼物戢戢充滿大海、可怖、神人命我入海提挈太三、太三首戴元帽、浮沈波浪間、既難著手、又有神勒要我錢、乃放、適有錢在我手中、遂與之、又盡力扶太三、將登岸、被汝等喚省、言訖又泣、蓋苦於涉歷也、吁、滅罪薦亡、無出此懺之功、余故紀之以爲世勸。

黃巖陳君璋爲人端重寡言、愼交、以善信服一鄉、年幾四十、與室葉氏暇則披誦法華、惟謹、鄉無梁皇懺本、君璋手書之、既畢、門首有山茶秋吐花、而君璋漠如也、洪武庚戌君璋年六十疾篤、其子景星與子婦王氏性孝躬調藥食、夜不解衣、晝不離病所、王氏又刲股肉、爲粥以進、是歲十二月十一日、夕陽銜山、君璋命扶之坐、謂景星曰、吾歸去、曰歸何處去、曰日沒處去、又曰、

我死宜依桑門法闍維、遂命家人同稱念阿彌陀佛、須臾氣絕、君璋有二子、長卽景星、次從、余出家、居頂是也。

恭行己上虞人、平生苦學、內外典靡不研究、尤工於詩、母老無託、乞食以養、嘗舁母渡錢塘、有詩云、母在籃輿子在途、子行不止母先呼、斷橋流水斜陽外、羞見寒林返哺烏、觀此可知其爲人矣。

光菩薩者、鄞縣張氏子也、其先世習雕塑、至光藝益精、甫壯年忽厭家累、將從海會壽梅峯剃落、其妻携子訴于官、壽因卻之、光與萬戶完者、都厚善、勸其遁去、遂潛自引刀斷髮、服僧伽黎、絕浙河逾貝區、登匡阜、徧參有道尊宿、踰十寒暑、還謁壽已遷化、聞華頂無見和尚道行清峻、挾胸中所疑投之、無見令究狗子無佛性話、獲證入、遂禮無見爲得度師、光一生雕飾兩浙諸山佛菩薩像甚多、事畢掌包卽去、未嘗受其毫髮之報、暮年歸隱華頂、遂於石橋庵塑五百應眞像、窮極巧妙、始事之晨、雲霧間鼓鐘與梵音洋洋間作、瞻工闕園蔬、光欲遣人化之、忽寧海多寶寺圓講主者、送菜至、光喜問故曰、向眞菩薩以尊命到寺化菜、故送至、時庵中有名眞者、臥病久不出、由是知神人應化也、光亦不經意、年七十有三、無疾坐蛻于華頂、火後塔塟山中。

思省庵者台之寧海人也、不知其氏、兄弟四人、思最長、一時同發心出家、將祖父遺業悉散與宗親、惟留所居屋一區、族人互爭不已、思與諸弟各執炬燎之而去、思後參訪具向上知見、出世領溫之靈雲、遷靈岩而退、止靈雲寺前草舍中、至正甲申、余偕達此原明性元等往謁、時思年踰九十、厖眉皓髮、頎然清聳、拽履而出、且行且問曰、何處來、余曰、江心、曰深幾百丈、曰謾老和尚不得、思揖云、坐喫茶、思性方介作詩頗類寒山子、題罵僧詩於壁云、五蘊不打頭自髡、黃布圍身便是僧、佛法世法都不會、噇豬噇狗十分能、案上有語錄一冊、予信手揭觀、結夏上堂有云、以大圓覺牛角馬角爲我伽藍瓜籃菜籃、又上堂舉趙州狗子無佛性話頌云、狗子佛性無、狗子佛性有、猴愁摟搜頭、狗走抖擻口、余與此原等請別、不敢再犯其鋒、是夕宿靈雲、聞老宿舉思言行數端、皆可傳。

福建有官家子、專爲盜、父痛責不改、徐詰之、乃云、盜豈欲爲、但每夜有一男子來相拉、不得已從之、父曰、今夜若來、汝當告我、遂備弩矢待之、夜分男子果來門外、兒指告父、父果見其人、決弩射之、却中其兒胸立死。

至順庚午浙西連歲饑饉、杭州城中餓殍相枕藉、有司令坊正倩人舁棄六和塔後山大坑中、有一婆子、兼旬不腐爛、每日居衆屍之上、人怪之、搜其身、懷中有小囊、貯念彌陀佛圖三幅、事聞有司、爲買棺斂焚之、煙焰中現佛菩薩像、光明燁燁、因此發心、念佛者極衆。

建寧府有僧名末山、後檢一行著定平生詩、有一木移來嶺上安之句、造物預定其名也、好作善緣、平路疊橋、不知其數、既死現夢於城中鄒氏託生、其友亦有夢之者、既長雖自知前身是僧、不喜與僧交、癡癡呆呆、若木石然、杭州天目山義斷崖、見高峯得旨、歸向者甚衆、既死現夢、託生於吳興細民家、後爲僧、名瑞應、字寶曇、自幼至壯、受人禮拜供養、無虛日、余寓居天界時、寶曇亦在焉、隣居頗久、察其所爲、碌碌與常人無以異、間有以己躬事叩之者、但懞懂而已、二人前身、皆非常人、胡乃頓忘前世所習、如是、古人謂聲聞尙昧於出胎、菩薩猶迷於隔陰、然則

修行人可不愼歟。

江西絕學誠公山居不出世座下有七人結盟習禪一人年最少超然有得誠公驗以三關語其答如鼓應桴不幸早世生山下民家父母俱有夢甫五歲命讀書吾伊上口不煩師訓又能拆其義一日其父携入山見誠公公問汝前生答我三轉語記得否進云試擧看旣擧乃點首云是我語誠公囑其父善保養之他寺僧因厚賄其家求爲弟子使習魚山梵唄自此赴檀家請多得覯施嬌奢心運世俗不法事無不爲之誠公因立三種大願勵學者大凡參禪人於靜定中得个歡喜處乃虛勞乍息惠光少現然未可以爲究竟也何則蓋八識田中無明根本尙在喩如石壓草去石再靑無疑矣後人其預戒之。

前朝天曆初召天下善書僧儒會杭州淨慈寺泥金書大藏尊經王文獻公亦在所召而公必與衆僧同食若別爲治具則不樂甚至掣肘詬罵不食而去尙記公爲僧題懸崖畫蘭云嫋嫋春風一樣吹託身高處擬何爲從渠自作顚倒想要見懸崖撒手時題東坡像云五祖禪師世外人婆婆久矣斷生因誰將描貌虛空手去覓他年身外身題山谷像云笑殺當年老晦堂相逢剛道桂華香披圖面目渾依舊鼻孔何曾有短長蓋公爲一代儒宗而造詣淵邃形諸翰墨雖不經意而與古德提唱相脗合可尙也矣。

古鼎和尙住杭之中竺歐陽圭齋以福建廉使任滿赴召京師過杭抵古鼎欵洽道話旬浹臨別古鼎送至西湖之上圭齋云此別未卜會期古鼎云大圓鏡中未嘗與公相別也圭齋喜無何古鼎遷徑山圭齋寄以偈云上人力擧龍文鼎坐斷凌霄第一關湖上別來圓鏡語想應照我髮毛班

靈隱竹泉和尙爲人少緣飾契證穩當語言精密元宵上堂云今朝上元節雪霽見晴春梵刹燈千點長空月一輪鼓鐘喧靜夜謌管鬧比隣摠是圓通境何須別問津爲亡僧森監寺下火云森羅萬象一法之所印卽今與汝拈却金剛圈栗棘蓬了也喚什麼作一法二由一有一亦莫守火裏烏龜作師子吼其語錄逸此二段故記之。

泰定初宣政院起嘉興本覺靈石芝禪師主淨慈師已年八十有四四海尊仰如古佛余自徑山來送入院遂獲隨例挂搭其時衆幾滿五百台溫鄉長忠景初者本山首座年德並高後生多歸之余方居學地偶於廊下見鬻文籍人就購莊子一集持歸藏主寮園爐內閱之恐失葉也適忠自外至意甚不樂正坐立余於其前而數之曰汝初入衆不去衣單下做工夫而反從事雜學耶且公界圍爐乃延客論道之所而檢閱外書可乎後二十餘年再到淨慈凡寮舍園爐但見少年名勝叢雜或撫琴或圍碁或吮墨圖山水如是而已肯檢閱外書者亦無其人矧衣單下做工夫者乎嘻三思忠之言與妙喜洋嶼衆寮所揭之牓何以異忠後出世婺之華藏云。

羅湖野錄載烏巨雪堂與淨公書曰比見禪人傳錄公拈古於中有問趙州如何是佛殿裏底拈曰須知一个髑髏裏而有擎天拄地人愚竊疑傳錄之誤蓋楊岐子孫終不肯認个鑒覺若認鑒覺陰界尙出不得何有宗門奇特事耶因此亦嘗頌之謾以浼聞頌曰不立孤危機未峻趙州老子玉無瑕當頭指出殿裏底剗盡茫茫眼裏花余謂羅湖肯烏巨檢點淨公認个鑒覺

善矣、至於許烏巨此頌於宗門有補、恐未盡善、且如趙州老子玉無瑕、又云、剗盡茫茫眼裏花、非鑒覺而何、余忍俊不禁、就其頌易四字而頌之、亦要後人檢點、不立孤危機始峻、趙州老子玉生瑕、當頭指出殿裏底、添得茫茫眼裏花。

瑞少曇者閩人也、剛介自持、粃糠聲利、常住事悉付執事人、一室蕭然、禪誦自怡、登其門者、無非老練衲子、至順間毅然棄去、游金陵訪龍翔訢公、於是延居第一座、適移忠虛席、公力薦之、師辭曰、公誠未之思耳、移忠乃宋奸臣秦檜香火所寄、檜嘗挾私倚勢、編管大惠于梅衡、吾雖不肖、忝承其裔、今何忍而嗣其香火、公誠未之思耳、當時洪儒宿德聞其事者、無不劇口稱譽、後改住歸宗而終。

亨景南者、南昌萬氏子、幼依來福山端公得度、參如庵愚公于百丈、笑隱訢公于龍翔、獲薦名宣政院、奉檄開法香城、久廢之餘、一新其寺、後遷上藍、道風益播、壽七十八、一日忽命左右具湯沐浴、衣常服安坐書偈、偈畢拄杖而化、闍維堅固子磊磊、獲之者甚衆、其法孫濟盛者、收杖及堅固、作塔藏之來福山中、像季以來行脚僧、凡到一處、求挂搭、必云、生死事大無常迅速、聞之似覺懇切、既得藉名、略不以前言自勉、惟務奔逐而已、往往皆然、今觀景南臨終如此、其平日踐履可知。

寂照先師蚤年偕虛谷參蘇州承天覺庵眞公、別後得其啓發、遂賦思洞庭一詩、寓意、其實敷揚向上一著、特措辭異耳、詩曰、煙蒼蒼濤茫茫、洞庭遙遙天一方、上有七十二朶之青芙蓉、下有三萬六千頃之白銀漿、中有人兮體服金鴛鴦、遊龍車明月璫、直與造化參翱翔、憶昔天風吹我登其堂、飲我以金莖八月之沅澧、食我以崐丘五色之琳琅、換爾精髓滌爾肝腸、灑然心地常清涼、非獨可以眇四極輕八荒、抑且可以老萬古凋三光、久不見兮空慨慷、久不見兮空慨慷、又嘗爲儒生題古昔十賢詠梅詩圖云、詩之召南、書之說命、孔子昔所刪定也、皆言其實、而不及其花、由梁何遜至唐宋十君子者、讀召南誦說命、習孔子之業者也、形諸詠歌、述諸章句、皆言其花、而不及其實、噫、世道不古、人心益薄、且僞其不敦本也、例皆如是、余觀是圖、竊有感焉、趙松雪虞邵庵諸公見之歎曰、元叟識見地位高、命筆吐辭、自然超拔今古、我輩儘力道也、出他殼中不得、寂照乃傳持臨濟正宗人也、游戲翰墨、藻黼宗猷、特餘事耳、然而縉紳推重之如此、無文粲公謂、今時叢林中、眼不識丁者、窮則不失眞禪和子、達則爲眞善知識、斯言可謂痛切矣、

天台明巖淵太古、久依東嶼於淨慈、稟承其法、至正丙戌正月十三日、余自紫籜僧明性元瑞瑩中、訪香竺曇于寒岩、明日將謁太古、二子以倦遊不果、會太古抵竺曇、余三人卽客位揷香展禮、竟太古忽問云、藏主久參竺源和尙、世尊初生下時、做出許多神頭鬼面、還知落處麼、余對云、美食不中飽人喫、太古忽離位分手指上下、乃至步武四顧勵聲云、天上天下惟我獨尊、嗟乎方今號稱尊宿者、而於接引後昆之際、往往匿其所易見、示其所難知、以籠罩之、如太古直截擧話、何異索千金之珠於丐者之席裏中也。

元至正十五年冬、張嗣誠侵湖州江浙、丞相委令徑山屬院化城僧惠恭、團結鄉民、守禦界嶺、一日賊兵犯境、恭率鄉民與之格戰、賊敗走獲四十餘人、送至官、夜宿西湖鳥窠寺、黎明適前

住饒州天寧謀大猷、徐步廊廡間、囚者見師神觀閑雅持誦不輟、乃齊聲告曰、長老救我、師曰、我救爾不得、爾若至誠稱念南無救苦救難阿彌陀佛、卻救得爾、中間有三人、信受其言、高聲稱念不輟口、既而官司取發衆囚、俱易枷鎖、偶至此三人、缺刑具、但繫以繩耳、既到審囚官獨鞫勘此三人、一人供、元是明州奉化鋸匠、來此傭作被虜、三人遂獲縱免、乃到鳥窠拜謝大猷而去、竊念我佛阿彌陀誓願深廣、稱其名者、非獨臨終獲驗、而現世遭大辟刑者、亦可賴免、人而不信、吾未如之何也已

西天竺國大沙門板的達、確修禪定、兼善毗尼、三衣一鉢隨身、得施利、隨與貧乏、行世泊如也、洪武七年、將抵南京、　上勑有司、同天界蔣山住持、率京城諸寺僧、祇迎郊外、以幡幢香花、導引入國、及見、　上大悅、寵渥殷厚、館之蔣山寺、勞問相仍、是年、冬　上親製誥命、鑄銀印、賜以善世禪師之號、時余寓止天界、一日有金壇刀鑷蔣生者、爲師剃髮、受之以盤、初剃一刀、有聲琅然、侍僧輒取之、次剃一刀、蔣生自取、獲設利一顆、大如菽、甚圓淨、餘髮悉爲見者、爭取去、或有或無、凡三顆、惟蔣生得者、出以相示、余歎訝不已、其侍僧乃謂余曰、此吾師常事也、患爲世夸、故罕剃其髮、九年秋奉詔來浙左、禮求育王舍利塔泊寶陀觀世音示現、二處所感祥光瑞相異常、師皆有伽陀贊詠、作梵字書之云。

元福建都運司某、誕辰胥吏周清甫設賀筵、饌有牛肉、運司亟命撤去、徐爲衆賓言曰、某少時同外弟某、過屠者家、甫坐定、見屠者左手握刀、右手牽牸牛、帶一犢至、繫牛簷楹、置刀於前而去、忽犢子啣刀走園地中、以足跑地而埋之、逮屠者至、不見其刀、怒、乃爲言、其狀、屠者既得刀、坐門首長歎移時、以刀斷髮、棄妻子、出家學道、不知所終、後外弟某出仕江西、舟過黃河、晚泊荒岸下、恍惚中見一甲第、高廣嚴整、類王者居、於是登岸、趨揖閽者、問曰、此是何所、閽者曰、此是一衙門、汝欲瞻玩、不禁、入門見一峨冠博帶者、當廳正坐、因進前跪拜之、承問曰、汝何來、答曰、都下來、外弟因問曰、此是何衙門、答曰、此是天下太乙牢山專治宰牛人也、因問、隣人宰牛黃四者死已十日、還在此否、答曰、有、遂呼來、但見黃四枷鎖而至、黃四見外弟、驚呼云、官人如何到此、答云、我去之仕、偶然到此、就問黃四曰、汝之罪犯、當何度脫、答曰、我罪最重、無由可脫、若得官人凡到仕官處、勸人不殺牛、一百二十个、能免我罪、言訖回首、化境沒矣、外弟從此勸人不宰牛、及足其數、一夕黃四扣門謝曰、某得官人勸不宰牛、今已脫罪、仍放歸家、如有家書不妨持去、但於門內、爲之曰、汝歸向我家中道、早寄衣來、閱兩月、果有衣至、其時衆賓、聞此說、皆誓不食牛肉。

淨土一教、金口所宣、載之群經、甚詳、而其教行震旦、則始於東林遠法師也、法師集劉雷諸賢、刻蓮漏、禮六時、願往生西方、精誠悃切、臨終各獲、遂其所願、迨至前元、人根既漓、情僞日生、冒名蓮社、假求衣食者、往往有焉、延祐間優曇度公、詣闕上書、革正其弊、退著廬山寶鑒若干卷、闡揚正教、排斥異說、東林故事、爲之一新、優曇化去、未及百載、而庸民僭名、所謂白蓮七佛教者、其弊滋甚、或自稱導師師長、而位有方等無礙之說、糾合徒衆、非毀正法、廣行魔事、屏處傳授、現種種光、珍饌不以供佛、而出生施食、亦皆屏絕、云自是佛、又改三寶爲佛法師、妄謂導師是三寶數非僧也、簧鼓愚俗、習以成風、殊不可遏、以致朝廷嚴白蓮之禁、而縉紳鄙東林之修、

宜矣、嗚呼安得如優曇者復興於世以匡救其弊哉。

瑞雪崖者黃巖人也幼得度于秋江湛公居新城山留慶院持律嚴謹日課金剛般若經尤善瑜珈法事赴道俗請必盡恭恪而施利則不較厚薄或絕無亦不經意迨其再請赴之如初洪武辛亥夏五月得微疾索湯沐浴更衣書偈趺坐而逝闍維火星雜毫光迸散絕無煙燄獲堅固子甚多壽八十三。

宋無逸徐姚人別號庸庵性仁恕端毅蚤從楊濂夫陳衆仲二先生游經明學通發爲文詞矩則甚嚴晚年酷嗜禪學皇朝革命之初無逸以召至京師預修元史得請而歸余因令吾徒居頂寓止慈溪龍山時謁無逸講授爲文之法無逸因吾徒寓書叩入道之要余既答書云云復以環公所註楞嚴經及大惠書問寄遺之無逸自是常斂目危坐而反復究二書旨趣有證入洪武九年六月因疾命門人王至等爲書示子詩一首笑談自若忽以扇搖曳止其家人曰我方靜汝毋撓我遂閉目以扇掩面而終時天隆暑化斂容色含喜笑益鮮潤有庸庵藁若干卷行于世。

近世有一種剃頭外道掇拾佛祖遺言鬬釘成帙目之曰語錄輒化檀信刊行彼既自無所證又不知佛祖舌頭落處謬以玄談就己昏解使識者讀之不勝惶汗照千江四明人圓直指天台人奕休庵揚州人三人俱是博地凡夫絕無正見妄自刊語錄暉藏主鄞人參照千江將金剛經每分拆段妄爲之頌刊板印施余在桐谷時暉來謁余問暉此經以何立題以何爲宗竟瞢無所曉況欲其爲迷己衆生摽出無上正徧知覺耶此皆不本正因務行邪道劫世善名誑誘凡愚良可嗟悼在今據大牀座者宜黜而正之反從而譽之或爲之序跋其得罪於教門深矣。

余讀者庵所述叢林公論足知者庵識見高明研究精密他人未易及也然其間所論亦有過當者或非其所當論而論之如論寂音智證傳指摘數節以爲蝨生禾中害禾者蝨也斯言甚當其於僧寶傳謂傳多浮誇贊多臆說審如是彼八十一人俱無實德可稱誠託寂音以虛文藻飾之矣斯其論之過當也又論陶淵明歸去來詞閑淡優逸詞理高詣獨鎖憂二字爲未善韓退之送李愿歸盤谷序意多譏訕怊悵文過飾非王元之小竹樓記如公退之暇披鶴氅衣戴華陽巾手執周易一卷焚香默坐幸自可憐生而繼之云消遣世慮猶玉之玷耳余以爲先儒文辭之得失於吾門固無所涉而置之叢林公論之間殊乖所謂非其所當論而論之者此其是也古人有言尺有所短寸有所長豈不然哉。

育王雪隱和尚有僧來求住師云何處來僧云天台師云將得鉢盂來麼僧云將得來師云何不呈似老僧僧云旦過中有師云我不問者個鉢我問無底鉢僧罔措師云俊快衲僧能有幾個去。

禪林寶訓載湛堂準公與李商老書曰善弘道者要在變通不知變通拘文執敎滯相殢情此皆不達權變故僧問趙州萬法歸一一歸何處州云我在青州做一領布衫重七觔謂古人不達權變能若是之酬酢乎余謂者僧立個問端也是奇怪爭奈趙州無伶湊泊處只如答他者一轉語謂其能達權變恐未然夫權變者乃觀機適宜用心意識邊事且者僧與麼問州與麼

答、如兩鏡相照光影俱泯、奚權變之有哉、湛堂作如是說、豈別有旨要耶。

明善韓先生、書陸放翁普燈錄叙草後云、放翁先生手書普燈錄叙草本、報恩淨上人之所藏也、余故有先生遺文二帙、其間誤處、皆手自塗了、傳燈言世尊擧華、迦葉一笑、今講者以爲經無此事、詆其妄傳、或曰、金陵王丞相於秘省、得梵王決疑經閱之、有此語、有所避諱、故經不入藏、今先生以爲、書之木葉旁行之間、不知卽丞相之所見以否、其言如此、必有所考矣、併書其後云、夫二先生、學廣理明、其言豈妄、近翰林宋公爲余叙應酬錄、亦曰、予觀大梵天王問佛次疑經、所載拈花云云、宋公既親觀之、則此經世必有之、而或者詆以爲妄、前云、有所避諱、故不入藏、斯言盡矣。

古人爲亡僧作佛事、恐其見道不明、臨終有所滯着、實欲開發之也、而打字歷職機緣之說、未嘗拘拘用之、無準和尙住徑山、爲觀上座下火乃云、觀大海者難、爲水窮盡波瀾、一漚爾、卽今海滅漚亡、回頭踏着自家底、云云、座下名勝因効之、打字自此始、乃今叢林以打字爲定式、牽綴圓合、絕無理趣、而所謂開發亡者、果何在焉。

天童照寮元素多病、洪武丙辰病日篤、勉藏主勸其持觀世音菩薩名號、照如其言、日誦萬聲、明年十月十七日、午時自念、病勢去死不遠、莫如改持阿彌陀佛號、方興此念、忽見一美婦人、身衣六銖衣、手持一淨餅、自戶外入、立其面前、照驚訝失措、旣而定心諦觀、乃是菩薩示相、照涕泣露罪求哀、須臾不見、越五日病盡脫、今年五十餘矣。

徑山如庵藏主台州委羽人、由敎入禪、沈潛不競、博通內外典、而於己躬下事、尤研究精徹、晚年隱居于天童山之左、至正甲申余過其隱所、因語及無情有佛性、有情有佛性、往復徵詰、如庵忽曰、吾記得、敎中、先德曾難云、將無情中、本自有佛性耶、抑亦佛性周遍不隔無情、於無情中有佛性耶、語未竟、余亟止之曰、佛性虛曠、迥出名言、不得道有、不得道無、如庵不覺肯首。

鄞城福聚庵比丘普月所奉釋迦銅像、古而精、初像在鄱陽、莫知其始造之由、宋徽宗政和間、錢監氏得之、凡烹三日、而色相益鮮明、咸敬異之、於是迎置饒州光孝寺、而稱曰辟火金銅釋迦寶像、至光宗紹興間、光孝住持普傑命工圖其像、鐫之石、而會稽沙門仲皎爲之讚、讚中有云、作家會遇殺佛手、置之烈燄令銷鎔、火星迸野亙三日、巍巍不動洪爐中、迨史氏當朝、人持以獻、像遂來浙左、今朝洪武壬戌普月以財贖之、史氏、又海會寺舊有顏輝手畫觀音聖像一大軸、筆力精妙、彩飾嚴麗、世所罕見、元至正間、城中高氏、修禮梁皇懺三晝夜、請畫像設壇場中供養、滿散之夕、至二鼓、其像放大光明、透其屋外、市民以爲失火、蒼黃來救、乃是所現光明、後褚氏張氏修崇佛事、亦請供養、而祥光之現如初、夫淨法身、含攝一切、而經謂、三千大千世界、無有如芥子許非是菩薩捨身命處、應物現形、隨緣赴感、何莫非眞佛所在、譬之日麗乎天、影臨水中、而同觀之、人各有一日、隨其人去、以佛菩薩神化較之、何啻倍萬、今觀釋迦銅像觀音畫像、其靈應如此、則像與眞身、距可二之而不生深敬哉。

榮枯木鄞人也、自幼蔬食、持誦法華、求出家、父母不許、强爲婚娶、將醮之夕、師遁臥雪中、幾死、外兄陸氏解衣衣之、扶歸、溫以湯火、乃甦、首事海會梅峯壽公、次謁淨慈東嶼海公、祝髮登具、澄神禪觀、昕夕無間、發志參叩、若中峯斷崖布衲、大梁無方、古林諸公、皆嘗勸恭禮謁、受其策

發者多、雪窻住育王、重師戒行精嚴見地穩實、特招師居第二座、至正丁酉、勉循衆情、開法海會、道俗信嚮、寺賴以興、今朝洪武四年往京師預鍾山法會、明年東還、又明年示寂於鄞城車橋庵、龕留七日、顏貌不變、壽七十三。

明州五臺戒壇、乃靈芝律師重造、既成講法之次、有老人、神氣超邁、眉鬚皓白、進而啓曰、弟子非常人也、有三珠奉獻、以爲壇成之賀、言訖不見、因置其珠于壇心、屢現光相。

皇朝洪武十一年四月十七日、壇主德顒會十師、大開戒法、後二日夜分、慈溪僧子懋方登壇、忽覩珠光外徹、內現善財童子、懋驚呼、一衆環禮、悲欣交集、自是每夜、衆益虔懇、而珠之所現、或金色佛、或六臂觀音、或紫竹碧柳、奇木怪石、頻伽飛舞左右、或月蓋執爐、龍神獻珠、神變非一、見聞希有、嗚呼余聞、世尊築壇罷、梵王獻無價寶珠、帝釋亦以雨如意寶、輔戒之、而世尊顧命之時、屬諸比丘、以戒爲師、又謂、吾法若壞、始自毘尼、然則戒之有關於吾教實重、夫五臺獻珠之事、固已奇偉、豈意像季澆漓、戒法一舉、神應煇赫如是、則天龍護戒之心、炳然可見、奈何沙門、視戒爲虛文、略不加檢痛哉。

山庵雜錄下 終

四明朱敬中刊

題山庵錄後

山庵錄者、錄山庵所聞之事也、其間所紀、或善不善、直書無隱、殆緇門之良史也、夫事有關乎宗教者、不可以不書、書而能公合天下之論、尤可嘉也、是書之行、蓋將與林間草庵諸作、並垂於無窮者矣。

洪武庚午春二月既望

天禧住山　守仁　題

予早歲侍妙明先師居徑山、每獲參承　空室老人于蒙養之室、聽其誨論、啓沃良多、蓋老人參見前輩尊宿、具正知見、而學問該博、提唱高妙、又善誨示學者、亹亹忘倦、至其用向上鉗鎚、有不可得而近傍者也、後兩坐浙東名刹、投閑居大白山中、予時皆在四明、歲時必走拜牀下、予來鍾山之三年、其上足前住翠山玄極頂公、至自四明、距老人化去已四年矣、一日出示山庵雜錄一編、讀之、皆舊所聞誨示於老人者也、噫、欲再見老人、不可復得、而獲讀其平昔所著論、可勝慨嘆哉、老人別有說法語錄行世、或謂、語錄多向上拈提、此編乃舉古人前言往行、以廣學者見聞、視語錄崖嶮、此則其平易耳、雖然初非有二致也、佛世尊固有所謂觀機逗教者、然列祖門庭、一拈鎚、一竪拂、一揚眉瞬目、皆欲令學者有所入、而謂此編非向上爲人可乎、學者要當具眼始得、

皆洪武庚午　　靈谷住山　清濬拜題

山庵雜錄者、寔緇門良史、而足針藥邪禪膏肓之病、私謂、有補扶桑之今日、雖然未見古時印本、以故三寫之誤甚多、初學之徒、數窘觀覽矣、余養痾之暇、參攷一二典籍、且加臆斷、畧得校定、倘涉猶豫者、乃書之旁、蓋疑以傳疑之謂也、又爲二三子、濫加倭點、今也命工勒板、切恐、舛差不少、仰望禪林才子、不愆慈意、重煩訂正、寬永二十年癸未、仲春日、於丹陽大梅山題。

住庵　比丘　文守

國譯無門關

解題

無門關は具には『禪宗無門關』と稱し、宋の報恩佑慈禪寺の無門慧開和尚の所說を弟子宗紹が編輯して一卷とせるものなり。卷首の表文によれば、慧開は理宗皇帝卽位の五年、紹定二年正月五日、皇帝の天基聖節に遇うて、皇帝の萬壽を祝延せんがために、豫め元年十二月五日、佛祖の機緣四十八則を拈提評唱し、之を印行したるものにして、爾來、禪門年入の學徒、之によつて慧眼を開かざるものなく、宗門の玄奧微旨を窺ふには好箇の指針と稱せらる。其の四十八則は何れも古德の公案にして、每則に無門の評語を揭げ、終りは四言四句の偈を以て結ぶ。其の文、直截簡勁にして機鋒峻峭、能く臨濟の宗風を宣揚して餘す所なきものなり。而して本書は初め習庵陳塤の序・無門の表文及び自序・後序、宗壽の「禪箴」一篇及び「黃龍三關」の一則を附して紹定元年に開版せり。然るに淳祐五年、孟琪の之が重刊するに方り、孟琪の跋及び無庵の「經云、止々、不須說我法妙難思云々」の一則を加へて四十九則として再版せしも、之等は無門の本意に非ざれば、今は已むなく之を割愛せり。

古來、本書の開版は凡例にも記したるが如く、支那及び本邦に於ては數度の飜刻を見るに至り、又も

の註釋書も甚だ多くして、西柏の鈔（二卷）、著者不明の辨註（一卷）、彌衍宗紹の鼇頭無門關（一卷）、改定評唱冠註無門關、釋宗演の講義、井上秀天の無門關の新研究、金子白夢の無門關の研究、其の他、紀平正美の哲學の見地より解釋したる無門關解釋などあり。何れも參考するに足れり。

傳を案ずるに、無門、俗姓は梁氏、諱は慧開、杭州良渚（今の浙江省杭縣の內）の人なり。幼にして天龍の肱和尙を禮して得度し、長じて蘇州の萬壽寺に投じて月林和尙に參ず。月林、無字の話を看せしむ。師、六年を經て入處なし、乃ち志を奮ひ、誓つて曰く、「若し睡眠せば我が身を爛却せん」と。是れより困時至る毎に廊下に行道して、頭を以て露柱（圓柱）に向つて磕す。一日法座の邊にあり、忽ち齋鼓の聲を聞いて省あり。卽ち偈を成つて曰く、「青天白日一聲雷。大地群生眼豁開。萬象森羅齊稽首。須彌跨跳舞三臺」と。次の日、入室して所得を通ぜんと欲す。月林邊かに曰く、「何れの處にか神を見、鬼を見るや」と。師便ち喝す、林亦喝す、師又喝す。是れより機語脗合す。嘉定十一年安吉の報國寺に出世し、次で隆興の天寧、黃龍の翠巖、蘇州の開原、鎭江の焦山、金陵の保寧などの諸刹に遷る。淳祐六年旨を奉じて護國の仁王寺を開く。晚年槌拂を倦みて西湖の上に庵居す。理宗皇帝召して選德殿に說法せしむ。師、雨を祈りて感應あり、勅して佛眼の號と金襴の法衣とを賜ふ。惜しむらくは師の寂年を詳かにせず。語錄一卷あり。

國譯無門關の序

說いて無門と道はゞ盡大地の人、得入せん。說いて有門と道はゞ㋺阿師の分なけん。第一より強ひて幾箇の注脚をか添ふ、大いに㋩笠上に笠を頂くに似たり、硬く習翁が贊揚せんことを要す。之は是れ㋥乾竹に汁を絞りて、㋭這些の哮本を着得す、習翁が一擲を消せざれ。一擲、一滴をして江湖に落さしむること莫れ、㋬千里の烏騅も追ふことを得ず。

紹定改元七月晦

習庵㋣陳塤寫す

㋑無門關。門とは人の出入する所、關とは門閉の意、故に門關は通塞の義、開遮の義なり。而して無門關の題號に就いて考ふるに、二釋あり、一は「門關無し」の義、自序に、「門より入るものは是れ家珍にあらず」と、卽ち是れなり。二は「無門の關」の義、又同じく自序に云ふ「危亡を顧みず單刀直入せん」と、卽ち是れなり。

㋺阿師。これは開無門を指していふ。

㋩笠上に笠云々。有るが上に又重ねる義にて、他人の爲したることばかりを爲して、何等發明する所なきをいふ。

㋥乾竹に汁云々。言句のなき處に言句を著くるは、乾れたる竹より汁を絞り出すやうなるものなり。

㋭這些の哮本。哮は咬むと同じ、乾れ竹の本より汁をすこしかみ出すことを得たり。

㋬千里の烏騅。黑き駿馬なり。

㋣陳塤。未詳、習庵は別號。

㋑表文

㋺紹定二年正月初五日、恭しく㋩天基の聖節に遇ふ。臣僧㋥慧開、預め元年十二月初五日に於て、㋭佛祖の機緣㋬四十八則を印行し拈提して、今上皇帝聖躬萬歲萬歲萬萬歲を祝延したてまつる。皇帝陛下、恭しく願はくは、聖明日月に齊しく、㋮叡算乾坤に等しく、㋯慈懿皇后功德報恩佑慈禪寺前住持傳法臣僧慧開謹言んことを。

㋑表文。此の書編纂の由來を書して朝廷に上表する文。

㋺紹定二年。南宋理宗皇帝卽位の五年、我朝の紀元一八八九年、後堀川天皇安貞三年、今を去ること六九〇年なり。

㋩天基の聖節。天子の祝日にして、理宗皇帝の卽位は寶慶元年正月五日、また誕生も八月五日なるが故に、此の日は重大なる聖節と云ふべし。

㋥慧開。臨濟楊岐派の一尊宿にして、此の書の著者なり、姓は梁氏、杭州錢塘艮渚の人、天龍肱に依つて出家し、月林觀に隨つて趙州無字に參じ、終に其の法嗣となる。卽ち楊岐方會—白雲守端—五祖法演—開福道寧—大潙善果—大洪祖證—月林師觀—無門慧開。その傳は五燈會元續略二ノ上、增集續傳燈錄二、五燈全書五十三、續統存考二、五燈嚴統二十二、續傳燈錄二等に出づ。

㋭佛祖の機緣。諸佛祖師が公案を作つて、衆生を得入せしむ、之れ衆生の根機、因緣に從ふなり。

㋬四十八則。無門關は公案四十八則を集錄す。

㋮叡算。陛下の寶算年壽といふこと。

㋯八方。天下到る處といふ義。

㋰有道。道は王道の道なり、王道に適へる仁君の義。

㋱無爲の化。堯舜は無爲にして民を化す、聖人の行は自ら人を德化するなり。

㋲慈懿皇后。理宗皇帝の聖母、皇后が功德の爲に建立せし佑慈寺の前住職が慧開なり。

國譯無門關自序

㋑佛語心を宗と爲し、無門を法門と爲す。既に是れ無門、且つ作麼生か透らん。豈に道ふことを見ずや、「㋺門より入る者は是れ家珍にあらず、緣によりて得る者は始終成壞す」と。㋩恁麼の說話、大いに風無きに浪を起し、好肉に瘡を剜るに似たり。何ぞ況んや言句に滯りて解會を覓めんをや。棒を掉つて月を打ち、靴を隔てて痒を爬く、㋥甚の交涉かあらん。慧開㋭紹定戊子の夏、㋬東嘉の龍翔に首衆たり、衲子請益するに因つて、遂に古人の公案を將つて、門を敲く瓦子と作して、機に隨つて學者を引導す。㋮竟爾として抄錄するに、覺えず集と成る。初めより前後

㋑佛語心。已下著者の自序なり、初めの二句は楞伽經の意を受けて、馬祖大師の擧揚せられたるの語。佛語心とは佛心と見よ、卽ち卽心卽佛を宗旨となし、一法として立すべきが故に、趣入の門無きを法門となす。

㋺從門入者。岩頭和尙が法弟雪峰を喝せし語。會元七雪峰章に曰く、「儞不レ見レ道、從レ門入者、不ニ是家珍一、他後若欲レ播ニ揚大敎一、一一從ニ自己胸襟一流出將來、與レ我蓋天蓋地去」と。

㋩恁麼說話。此の書所述の四十八則の公案を指す。

㋥有甚交涉。無門の處に門を立て緣を與へたるのみにて、絕對の眞理に關係なきを云ふ。

㋭紹定戊子。紹定元年。

㋬東嘉龍翔。溫州永嘉縣の龍翔寺にして、支那十刹中の一なり。

㋮竟爾。爾は助字にして、竟は終にの意。

㋯箇漢。稱揚の意、眞に身命を拋つて眞理を求めんとする大丈夫の者を指す。

㋰八臂那吒。那吒は梵語、龍と譯す、毘沙門天の孫、卽ち毘沙門天の第三子半支迦の二男にして、佛法守護の天なり、四面八臂にして大力の鬼王と云ふ。

㋱四天四七。印度西天の禪宗は

を以て叙列せず、共に四十八則と成る。通じて無門關と曰ふ。若し是れ㋣箇の漢ならば、危亡を顧みず單刀直入せん。㋥八臂の那吒、他を攔れども住らず。縱使ひ㋭西天の四七、㋬東天の二三も、只だ風を望んで命を乞ふことを得ん。設し或は㋮躊躇せば、也た㋯窓を隔てて馬騎を看るに似たり。眼を㋰眨得し來らば、早く已に蹉過せん。

㋱頌に曰く、「㋲大道無門、千差路あり。㋳此の關を透得せば、乾坤に獨歩せん。佛祖の機緣、四十八則。」

初祖迦葉尊者より四七二十八祖達磨大師までを云ふ。

㋬東土二三。支那東土の初祖達磨大師より第六祖慧能大師までを云ふ。

㋮躊躇。猶豫の義、已下明眼の漢に反して愚昧遲鈍の者に就いて云ふ。

㋯隔窓。物事の遠かに過ぎ去るを書へたる語なり。

㋰眨得。ちらりと他に睛眼をうつすこと。

㋱頌。梵には伽陀、此に孤起と云ふ、別に語を立てずして句を作り、其の中に廣き意義を含蓄して、諷誦に便ならしむ、或は之れを偈とも云ふ。

㋲大道。此所にては佛道を指せど、一般には普に佛道のみにあらず、凡て人の行つて世に叶ふものをいふ也。この大道には門なし、門あるは卽ちその家々を區別する標なれば、天下の大道に門なけれども、而も大道には千萬の小路が集まるとなり。佛道に比す。

㋳此の關。この關の字は書名、無門關の關に係り、この四十八の關を透ちば、自由の界に入つて佛祖と等しく乾坤に獨歩せんとなり。乾坤とは天地のことにて、獨歩とは、自由氣儘にすることなり。天地を自由になすとは、この四十八則を打成して、心地明々として、上三十三天より下那落の底迄透得し、思の儘になること本書の目的なりと功能を頌せるなり。

國譯無門關

第一　㋑趙州狗子

㋺趙州和尚、因に僧問ふ、「狗子に還つて佛性ありや也た無や。」州云く、「無。」

無門曰く、「參禪は須らく祖師の關を透るべし、妙悟は心路を窮めて絕せんとを要す。祖關透らず心路絕せずんば、盡く是れ㋩依草附木の精靈ならん。且く道へ、如何が是れ祖師の關。只だ者の一箇の無の字、乃ち宗門の一關なり。遂に之を目けて禪宗無門關と曰ふ。透得過する者は、但だ親しく趙州に見ゆるのみならず、便

㋑趙州狗子。有名なる無字の一則なり、四十八則の中に於て、特に冒頭に揭げたる所以は、著者無門和尚が最初禪に參じたる時、此の一箇の無字の爲に六年の長日月を費して、大悟徹底せし仔細あり、また此の書を無門關と名くるも此の則に依るものと思はざるべからず。

㋺趙州和尚。曹州郝鄉の人、姓は郝氏、南泉普願に參じて法を嗣ぐ。卽ち慧能大鑑―南嶽懷讓―馬祖道一―南泉普願―趙州從諗。蓋し趙州とは地名にして、こゝにては趙州城觀音院の從諗和尚を云ふ、此の人六十にして發心し、八十まで行脚し、百二十にして寂す、眞際大師と諡す。

㋩依草附木。草に依り木に附くの義、卽ち文字言句に依り、有無の會を作し、道理の會を作す人を指す。

㋪提撕。擧げ持ち出して、公案を工夫することを云ふ。

㋫虛無。老子の道は虛無自然の處を至極となせども、趙州の

ち歴代の祖師と手を把つて共に行き、眉毛厮結んで同一眼に見、同一耳に聞くべし。豈に慶快ならざらんや。透關を要する底有ると莫しや。三百六十の骨節、八萬四千の毫竅を將つて、通身に箇の疑團を起して箇の無の字に參ぜよ。晝夜㊁提撕して㋕虛無の會を作すこと莫れ、有無の會を作すこと莫れ、箇の熱鐵丸を呑了するが如くに相似て、吐けども又吐き出さず、從前の惡知惡覺を蕩盡し、久久に純熟して自然に內外打成一片ならば、㋩啞子の夢を得るが如く、只だ自知することを許す。㋥驀然として打發せば、天を驚かし地を動ぜん。㋭關將軍の大刀を奪ひ得て手に入るが如く、㋬佛に逢うては佛を殺し、祖に逢うては祖を殺し、生死岸頭に於て大自在を得、㋮六道㋯四生の中に向つて㋰遊戲三

無は然らずとの意。

㋩啞子得夢。啞子の夢を見るが如く、人に語ること能はざれども自身には成程と合點して其の境界を得たるに喩ふ、須らく參禪者は純一無雜に工夫して、盡十方法界、一箇の無字と現はれるまで、玉の汗をしぼり、血の涙を拭はざるべからず。

㋥驀然打發。大悟する時には更に時刻を要せず、唯だ大死一番絶後に再び蘇生して豁然大悟するとは此所の端的を云ふ。

㋭關將軍大刀。關羽將軍は劉玄德の臣にして、常に青龍刀を持して敵を破るの猛將なり、今此の無字の吹毛劍に依つて、種々の妄想戲論を破するを、關將軍の大刀を手に入るると形容せしまでなり。

㋬逢佛殺佛。禪宗にては悟の見識所謂悟りの精を佛見法見、或は佛病祖病と云ふ、此の佛病祖病を無字の銘刀にて截斷するを殺佛殺祖と云ふなり。即ち迷悟生死の境を遠離して、大自在の域に達し、何等の繫縛なきを云ふ。

㋮六道。六道とは天上、人間、修羅、畜生、餓鬼、地獄。

㋯四生。四生とは胎、卵、濕、化を云ふ。

㋰遊戲三昧。臨濟禪師云く、「入二地獄一如レ遊二園觀一」と、蓋し禪宗は迷を去つて悟に入るにあらず、迷即悟の大自在を得、假令ひ地獄の底に居すとも、隨處に主人公となりて、恰も園觀に遊ぶが如く、自由自在の心に安住するを云ふなり。

味ならん。且つ作麼生か提撕せん。平生の氣力を盡して箇の無の字を擧せよ、若し間斷せずんば、好し㋱法燭の一點すれば便ち著くるに似んと。」

頌に曰く、「狗子佛性、全提正令。纔に有無に涉れば、喪身失命せん。」

第二　百丈野狐

㋲百丈和尚、凡そ參の次で、一老人有つて、常に衆に隨つて法を聽く。衆人退けば老人も亦退く。忽ち一日退かず。師遂に問ふ、「面前に立つ者は復た是れ何人ぞ。」老人云く、「諾、某甲は非人なり、過去㋳迦葉佛の時に於て曾て此の山に住す。因に學人問ふ、『大修行底の人、還つて因果に落つるや也た無や。』某甲對へて云く、『不落因果』と。五百生野狐身に墮す、今請ふ和尚一轉語を代つて、貴むらくは野狐を脫せしめよ」といつて遂に問ふ、「大修行底の人、還つて因果に落つるや也た無や。」師云く、「不昧因果」と。老人言下に於て大悟す。作禮して云く、「某甲已に野狐身を脫して山後に住在せん、敢て和尚に告ぐ、乞ふ亡僧の㋴事例に依れ。」師、㋵維那をして㋶白槌して衆に告げしむ、食後に亡僧を送らんと。大衆言議す、一衆皆安し、㋷涅槃堂に又人の病む無し。何が故ぞ是の如くなる。食後に只だ

丈山に住す。即ち慧能大鑑―南嶽懷讓―馬祖道一―百丈懷海。百丈和尚身を律すること頗る嚴、「一日不レ作一日不レ食」の語あり、また會下の徒を督するに、始めて清規を立す、即ち百丈清規は實に禪門清規の根源にして骨子なり。

㋳迦葉佛。是れ過去七佛中の第六佛に當る、第七佛は即ち釋迦牟尼佛なり。

㋴事例。亡僧の資格を以て葬儀の例式を行はれたしと願ふの意。

㋵維那。叢林の法務僧籍を掌る重要の僧の役。

㋶白槌。大衆に報告せんとする時には、報告板を打つて維那が種々なる法務等を報告するなり。

㋷涅槃堂。寺中の病室、即ち延壽堂とも病僧寮とも云ふ。

㋲黃檗。洪州黃檗山の希運和尚

師の衆を領じて、山後の巖下に至つて、杖を以て一死野狐を挑出して、乃ち火葬に依るを見る。師、晩に至つて上堂、前の因緣を擧す。㋔黃檗乃ち問ふ、「古人錯つて一轉語を祇對して、五百生野狐身に墮すと。轉轉錯らずんば、箇の甚麼とか作るべき。」師云く、「近前來、伊が與に道はん。」黃檗遂に近前して、師に一掌を與ふ。師、手を拍つて笑つて云く、「將に謂へり、㋓胡鬚赤と、更に赤鬚胡あり。」

無門云く、「不落因果、甚としてか野狐に墮す、不昧因果、甚としてか野狐を脫す。若し者裏に向つて㋕一隻眼を著得せば、便ち前百丈嬴ち得て、㋖風流五百生なることを知得せん。」

頌に曰く、「不落不昧、㋗兩采一賽。不昧不落、千錯萬錯。」

第三　俱胝竪指

㋘俱胝和尙、凡そ詰問あれば唯だ一指を擧す。後に童子あり、因に外人問ふ、「和尙何の法要をか說く。」童子も亦指頭を竪つ。胝、聞いて遂に刄を以て其の指を斷つ、童子負痛號哭して去る。胝、復た之を召す、童子、首を廻す。胝、卻つて指を竪起す。童子忽然として領悟す。胝、將に㋙順世せんとす、衆に謂つて曰く、「吾れ天龍一指頭の禪を得て㋚一生受用不盡」と。言ひ訖つて滅を示す。

無門曰く、「俱胝並に童子の悟處、指頭上にあらず、若し者裏に向つて見得せば、天龍同じく俱胝並に童子と自己と一串に穿卻せん。」

頌に曰く、「俱胝鈍置す老天龍、利刃單提して小童を勘す。㋛巨靈手を攦ぐるに多子無し、分破す華山の千萬重。」

第四　胡子無鬚

㋜或庵曰く、「㋝西天の胡子、甚に因つてか鬚なき。」

無門曰く、「參は須らく實參なるべし、悟は須らく實悟なるべし。者箇の胡子、直に須らく親見一回して始めて得べし。親見と說くも早く兩箇と成る。」

なり、閩の人、幼にして百丈に參じ法を嗣ぐ、斷際禪師は勅諡號にして傳心法要の著あり、法嗣に臨濟義玄禪師ありて法流今に絕えず。

㋓胡鬚赤。支那の通名として、偸心多き者を云ふ、卽ち百丈の賊、賊に逢ひ、黃檗の賊、賊を知るの意、言句の外に活躍するを看取せよ、唯だ言句の儘を解釋すれば、西洋人の鬚は赤いと思へば、鬚の赤い西洋人なりきと云ふ程のことなり。

㋕一隻眼。天地と我と同根、萬物と自己と一體と見る眞理眼にして、迷悟不二、生佛一如、染淨一體と觀ずる不二一隻の心眼を云ふ。

㋖風流五百生。一隻眼を豁開すれば、野狐五百生も實に風流なる生活にして、非常なる儲物なり。

㋗兩采一賽。賽は博奕の賽、采は賽に記されたるちよぼ、ちよぼは賽を轉ずるに從つて三とも五とも出る、然し賽は一個と云ふ意味にして、不落も不昧も大なる相違はなしと云ひ、更に第三第四の頌句にて忽ち打ち消して千錯萬錯と云ふところ深く味ふべし。

㋘俱胝和尙。南嶽下五世の法孫にして、婺州金華山の住持なり、大梅法常禪師の法嗣、天龍和尙より一指頭の禪を相承して生涯之れを唱ふ、師は常に俱胝佛母陀羅尼を誦するを以て、時の人は俱胝和尙と呼ぶ、傳燈錄十一に傳あり。

㋙順世。釋氏要覽に曰く、「釋氏死、謂ニ涅槃、圓寂、歸眞、歸寂、滅度、遷化、順世ニ」と、卽ち順世とは僧侶の死を云ふ。

㋚一生受用不盡。この語深く味ふべし、天龍和尙より一指頭の禪を相承して以來、唯だ一本の指が永き一生涯の間、用ひ盡すと能はずと云ひて遷化せらる、あゝ一指頭の禪とは如何、生理上の手の先に附いて廻れば白雲萬里、併しまた指を離れて說くにもあらず、無門和尙の評を見よ。

㋛巨靈。これは碧巖錄第三十二則、定上座大悟の雪竇頌の轉結にある文句にして、支那の古說に巨靈神と云ふ大力量の神あり、廣大なる大華山を無雜作に二分して、一方を首陽山とし、一方を華山として、其の間に黃河の水を通じ、遠く東海に運ぶと云ふ神話を以て、俱胝一指頭の大力量に譬へ、生死涅槃、煩惱菩提、天堂地獄も當處に分破することを得るを云ふの意。

㋜或庵。鎭江府焦州の人、或庵

頌に曰く、「癡人面前、夢を說くべからず。胡子無鬚、㋐惺惺に㋑懵を添ふ。」

第五　香嚴上樹

㋒香嚴和尙云く、「人の樹に上るが如し、口に樹枝を啣み手に枝を攀ぢず、腳、樹を踏まず、樹下に人あつて㋓西來意を問はんに、對へずんば卽ち他の所問に違く、若し對へば又喪身失命せん。正恁麼の時、作麼生か對へん。」

無門云く、「縱ひ懸河の辯あるも、總に用不著、一大藏敎を說き得るも、亦用不著。㋔若し者裏に向つて對得著せば、從前の死路頭を活卻し、從前の活路頭を死卻せん。其れ或は未だ然らずんば、直に當來を待つて㋕彌勒に問へ。」

頌に曰く、「香嚴眞の㋖杜撰、惡毒盡限無し。祢僧の口を啞卻して、通身に鬼眼を迸しらしむ。」

師體禪師と云ひ、法を護國元に嗣ぐ、護國元は碧巖集の錄者圓悟勤に嗣ぎし人なり、會元第二十に傳あるも、胡子無鬚の話なし、宗門葛藤集には「或庵主示衆」とあり。

㋐西天胡子。達磨大師を云ふ、卽ち胡人には皆鬚あり、而して達磨大師も胡人なるが故に鬚なかるべからず、然るに今點檢するに鬚一毛もなし、何に依つて鬚なきかと問ふの意。

㋑惺惺。了悟分明の義。

㋒懵。闇冥の義、今この一句の意を云へば、眞畫間に艇言を語るが如き愚にして、眞個一問、胡子を親見せよと云ふにあり。

㋓香嚴。鄧州香嚴智閑禪師は青州の人、初め百丈に參じ、後に潙山靈祐禪師の法を嗣ぐ。傳燈錄十一、會元九に傳あり。

㋔西來意。祖師西來意の略、卽ち達磨大師の西天竺より東土に來りし意思と云ふ義にして、禪宗の意義、禪宗の大意、禪宗の安心と同じ意味に用ふ。

㋕若向者裏。斯かる非常の場合に於て轉身自在、應對することを得る者は、常に與奪縱橫、殺活自在なることを得ることを示す。

㋖彌勒。補處の菩薩にして、當來五十六億七千萬年の後に出現して、弘法利生し給ふと云ふ。この一段は劣機の者に對しての言にして、急がずに修行して長い未來世の彌勒にでも問へと云ふ意なれど、實は非根機の輩は到底未來世に於ても轉身自在の妙處を得ることを能はざるを云ふ。

㋗杜撰。杜は塞の義、撰は造の

第六　㋘世尊拈華

㋙世尊、昔、靈山會上に在つて、華を拈じて衆に示す。是の時衆皆默然たり。惟だ迦葉㋚尊者のみ破顏微笑す。世尊云く、「吾れに㋛正法眼藏、㋜涅槃妙心、㋝實相無相、微妙の法門あり。㋞不立文字、㋟敎外別傳、摩訶迦葉に付屬す。」

無門曰く、「㋠黃面の瞿曇、傍若無人、良を壓して賤と爲し、㋡羊頭を懸けて狗肉を賣る。將に謂へり、多少の奇特と。只だ當時大衆都て笑ふが如きんば、正法眼藏作麼生か傳へん。設し迦葉をして笑はざらしめば、正法眼藏又作麼生か傳へん。若し正法眼藏に傳授ありと道はゞ、黃面の老子、㋢閻閻を誑譸す。若し傳授無しと道はゞ、甚麼としてか獨り迦葉を許す。」

頌に曰く、「花を拈起し來れば、㋣尾巴已に

義、卽ち言は道理に適せずして出鱈目に造るの意、禪宗にては極端に貶したる言は無上の讃美の辭となる。

㋘世尊拈華。大梵天王問佛決疑經に出づ。此の經、古來より眞僞の議論あり、忽滑谷快天師の禪學批判論に詳論す。

㋙世尊。世間獨尊の略、卽ち釋迦如來を尊稱する語なり。

㋚尊者。智德兼備の尊稱、迦葉は頭陀第一の上首なり。

㋛正法眼藏。無限の法寶を指す、佛にありても增さず、衆生に在りても減ぜざる寶藏にして、吾人の心性を云ふ。

㋜涅槃妙心。涅槃とは不生不滅の眞理、妙心とは微妙なる淸淨眞心を云ふ。

㋝實相無相。實相卽無相、無相其儘實相、水卽ち波、波卽ち水にして、甚深微妙の法門なるを云ふ。

㋞不立文字。かゝる微妙の法門は文字言句の上に於ては傳ふること能はず。

㋟敎外別傳。實は一切藏經其の儘敎外別傳の宗旨にして、文字言句にのみ拘泥するを嫌ふ。

㋠黃面瞿曇。黃色人種の釋迦老僧と云ふが如し、禪者は常に麤語を用ふ、敎者は金色の釋尊と云ふ、瞿曇とは釋尊の姓なり。

㋡羊頭。看板は正法眼藏と云ひて立派なれど、實は實質粗惡の喰はせ物と云ふ、唯だ罵つたものと見れば千錯萬錯。

㋢誑譸。臨濟錄の語、誑は欺なり、譸は大叫なり、閭とは村里の門、閭とは村里一部分の門を云ふ、卽ち村里を欺き廻るの意。

㋣尾巴。巴とは大蛇なり、大蛇の尾にて、正體を知るの意、

露る。迦葉破顔、人天措くこと罔し。」

第七　趙州洗鉢

趙州、因に僧問ふ、「某甲、乍入㈧叢林、乞ふ師指示せよ。」州云く、「喫粥了や未だしや。」僧云く、「喫粥了や。」州云く、「鉢盂を洗ひ去れ。」其の僧省あり。

無門曰く、「趙州口を開いて膽を見る、心肝を露出す。者の僧、事を聞いて眞ならずんば、㈡鐘を喚んで甕と作す。」

頌に曰く、「㈬只だ分明に極むるが爲に、翻つて所得をして遲からしむ。早く知る燈は是れ火なることを、飯熟すること已に多時。」

第八　奚仲造車

㈥月庵和尚、僧に問ふ、「㈭奚仲車を造ること一百輻、㈦兩頭を拈卻し、㈠軸を去卻して甚麼邊の事をか明む。」

無門曰く、「若し也た㈩直下に明め得ば、眼、流星に似、機、掣電の如くならん。」

頌に曰く、「機輪轉ずる處、達者猶ほ迷ふ。四維上下、南北東西。」

即ち花を拈起したる處に釋迦老僧の正體は見屆けたと云ふ程の事なり。

㈧叢林。衆僧の集まりて禪學の修行をする專門道場を云ふ。

㈡喚鐘作甕。早合點を誡む、鐘を撞けと云ふを甕を敲くことと思ふ如き早計を愼んで、深く趙州の心肝の露出せるを見よとの意。

㈬只分明。理窟の關門を打破して、別境界を體得せざるべからず、禪は直覺なり、理窟にては不可能なりと知れ。

㈥月庵。潭州の人、大潙善果禪師にして開福寧に嗣ぐ、即ち無門關の著者無門和尚は月庵四世の孫に當る、會元二十に傳あり。

㈭奚仲。夏の禹王時代の人と云ふ、馬車製造の率先者なり。

㈦拈却兩頭。車の兩輪を外すことを云ふ。

第九　大通智勝

㈫興陽の讓和尚、因に僧問ふ、「㈦大通智勝佛、十劫坐道場、佛法不現前、不得成佛道の時如何。」讓曰く、「其の問甚だ諦當なり。」僧云く、「既に是れ坐道場、甚麼としてか不得成佛道なる。」讓曰く、「伊が不成佛なるが爲なり。」

無門曰く、「只だ㈦老胡の知を許して休せんには似かん、心を了得すれば今身愁へず。心身俱に了了ならば、㈧神仙何ぞ必ずしも更に侯に封せん。」

第十　清税孤貧

㈢曹山和尚、因に僧問うて曰く、「㈨清税孤貧、乞ふ師、賑濟したまへ。」山云く、「㈩税闍梨。」税、應諾す。山曰く、「㈨青原白家の酒、三盞喫し了つて、猶ほ道ふ未だ唇を沾さずと。」

無門曰く、「清税機を輸く是れ何の心行ぞ、曹山の具眼、深く來機を辨ず、然も是の如くなりと雖も、且く道へ、那裏か是れ税闍梨、酒を喫する處。」

㈠去却軸。車の心棒を取ること、即ち車の外形を全部無くして後、何と名を附けて呼ぶやと云ふ問なり。

㈩直下明得。造車は喩なり、良く月庵の腹を見抜いて、殺活自在の妙用を知らざるべからず。

㈫興陽。傳燈錄十三、會元九に傳あり。仰山寂―南塔涌―芭蕉清―興陽讓にして潙仰宗の人なり。

㈦大通智勝佛。この四句は法華經化城喩品の偈文なり、即ち過去無量劫以前に大通智勝佛あり、無量の間、道場に坐禪したりと雖も、少しも佛道を成ずること能はざるの義なれど、深く此の偈頌を考ふる時は、禪宗の本領あり。臨濟錄に曰く、「十劫坐道場者、十波羅蜜是、佛法不現前者、佛本不生、法本不滅、云何更有二

頌に曰く、「貧は㋚范舟に似、氣は㋛項羽の如し。㋜活計無しと雖も、敢て與に富を鬪はしむ。」

第十一　州勘庵主

趙州、㋝一庵主の處に到つて問ふ、「有りや有りや。」主、拳頭を竪起す。州云く、「㋞水淺うして是れ舡を泊する處にあらず」といつて便ち行く。又一庵主の處に到つて云く、「有りや有りや。」主も亦拳頭を竪起す。州云く、「㋟能縱能奪、能殺能活」といつて便ち作禮す。

無門曰く、「一般に拳頭を竪起す、甚麼として か一箇を肯ひ一箇を肯はざる。且く道へ、㋠誦訛甚の處にか在る。若し者裏に向つて一點語を下し得ば、便ち趙州の舌頭に骨無く、㋡扶起放倒、大自在を得ることを見ん。然も是の如くなりと雖も、爭奈せん趙州卻つて二庵主に勘破せらるゝことを。若し二庵主に優劣ありと道はば、未だ參學の眼を具せず。若し優劣無しと道ふも、亦未だ參學の眼を具せず。」

頌に曰く、「眼は流星、機は掣電。㋢殺人刀、活人劍。」

第十二　巖喚主人

㋣瑞巖彦和尚、毎日自ら主人公と喚び、復た自ら應諾す。乃ち云く、「㋤惺惺著、喏、他時異日、人の瞞を受くること莫れ、喏喏。」

無門曰く、「瑞巖老子、自ら買ひ自ら賣つて、許多の㋥神頭鬼面を弄出す。何が故ぞ、㋦凞。一箇は喚ぶ底、一箇は應ずる底、一箇は惺惺底、一箇は人の瞞を受けざる底、忍著すれば依前として還つて不是。若し也た㋧他に倣はば總て是れ野狐の見解ならん。」

現前、不得成佛道者、佛不應更作佛矣。」

㋒老胡。達磨を指す、此處にては大通智勝を指すとも云ふ、何れにしても字眼は知と會とにあり、知とは根本智にして理體を覺悟するの智、會とは後得智にして修行通達の智なり。

㋕神仙。自身の本佛を指す、元來本佛なるに何を苦んで修行し、他に佛を求むるやとの意。

㋖曹山。泉甫州田の人、姓は黃氏、年十九にして出家し、二十五登戒、六十二遷化す、洞山の良价禪師の法嗣なり。

㋗能大鑑—青原行思—石頭希遷—藥山惟儼—雲巖曇晟—洞山良价—曹山本寂。傳燈錄十七、會元十三に傳あり。

㋘清稅。僧の名、孤貧とは孤獨貧乏の略、孤貧と云ふと雖も、實は迷悟染淨共に打ち棄てた無一物の人物と云ふ意。

㋙稅闍梨。闍梨とは阿闍梨耶の略にして、軌範師の梵語、即ち弟子の行を糾正する人、今は清稅を尊崇して稅闍梨と呼ぶ。

㋚青原。青原は地名、白家は白氏の家、巳下の文意は、青原白家の美い酒を腹充滿飲んで、口を拭つて素知らぬ顔をして居る如きを云ふ。

㋛范舟。後漢書列傳七十一にあり、常に客廬に寓息し、木陰に依宿し、糧粒盡くれども而も自若たり、斯くの如く貧に甘んずるが爲、貧の代表者に擧ぐ。

㋜項羽。史記項羽本紀第七に傳あり、漢の高祖と天下を爭ひし人にして、力山を拔き氣は世を蓋ふ、依つて豪勇の人物の代表者に擧ぐ。

㋝活計。蘇溪和尚の牧護歌に曰く、「活計雖レ無二一錢一、敢與二君王一鬪レ富」と。即ち身は貧乏なりとしても、精神の富を鬪はすには、如何なる富豪とでも相撲を取る氣力ありとの意。

㋞一庵主。庵主とは世に隱れて道を養ふ人を指す。

㋟水淺。趙州恰も庵主の擧頭を肯はざる口吻を示す。

㋠能縱。此處にては趙州が殺活自在の力ある拳頭と云ふ、恰も肯ふたる如く作禮す。

㋡誦訛。俗語を以て云へば魂膽入組と云ふ程の意。

㋢扶起放倒。一方を扶け起し、一方を押し倒す、即ち一は活し一は殺すところの大自在の力を云ふ。

㋣殺人刀。刀の用處に殺人刀と活人劍とあり、人を殺すのみの刀に非すして、實は人を活して縱橫無碍に働くを以て眞個の刀の用處となす。

㋤瑞巖。閩越の人、姓は許氏、幼より出家して岩頭を禮し、微酬良く或ふことなくして遂に法を嗣ぐ。馬祖道一—天皇道悟—龍潭崇信—德山宣鑑—岩頭全豁—瑞巖師彦。傳燈錄十七、五燈會元七に傳あり。

㋥惺惺。了慧分明の義、第四則の頌參照せよ、此處は眼を丸くして「はい」と諾するの意。

㋦神頭鬼面。一箇は喚底、一箇は應ずる底の怪物、これ畢竟何物ぞと云ふ意。

㋧凞。物を指す貌にして、詰問詞に用ふ、俗語にて云へば、「是れは如何に」と云ふ意。

㋨他。瑞巖和尚を指す。

㋩學道。此の頌は長沙岑禪師の作なり、無門和尚自ら頌を作らずして此の頌を引く、意味更に深し、傳燈錄第十參照せよ。

頌に曰く、「㋺學道の人眞を識らざることは、只だ從前識神を認むるが爲なり。無量劫來生死の本、癡人喚んで本來人と作す。」

第十三　德山托鉢

㋻德山、一日托鉢して堂に下る、㋼雪峯に「者の老漢、鐘未だ鳴らす鼓未だ響かざるに、托鉢して甚の處に向つて去る」と問はれて、山、便ち㋽方丈に回る。峯、㋾巖頭に擧似す。頭云く、「㋿大小の德山、未だ末後の句を會せず。」山、聞いて㌀侍者をして巖頭を喚び來らしめて、問うて曰く、「汝、老僧を肯はざるか。」巖頭、密に其の意を啓す。山乃ち休し去る。明日陞座、果して尋常と同じからず。巖頭、僧堂前に至つて掌を拊して、大笑して云く、「且喜すらくは老漢末後の句を會することを得たり、他後天下の人、伊を奈何ともせず。」

無門曰く、「若し是れ末後の句ならば、巖頭、德山倶に未だ夢にだも見ざること在らん。檢點し將ち來れば、好し㋷一棚の傀儡に似たり。」

頌に曰く、「最初の句を識得すれば、便ち末後の句を會す。末後と最初と、是れ者の一句にあらず。」

㋻德山。劍南の人、姓は周氏、初め律藏を精究し、性相の諸經を學び、常に金剛般若を講す、後禪宗に入り、龍潭崇信禪師の法嗣となる、傳燈錄十五に傳あり。

㋼雪峯。泉州の人、閩川の象骨山に居して化す、即ち雪峯義存禪師にして、德山の法嗣なり、この時德山の會下にありて飯頭を勤む。

㋽方丈。禪僧の居室を云ふ、維摩經の毘耶離城維摩の室を本據となす。

㋾巖頭。泉州の人、洞庭の臥龍山に居して化道す、即ち巖頭全豁禪師にして、德山の法嗣なり、この時德山會下の上首たりき。

㋿大小。この時代の俗語にして、「流石に」と云ふ程の意。

㌀侍者。長老の左右に侍して、雜用を辨ずる者を云ふ。

第十四　南泉斬猫

㋸南泉和尚、因に東西の兩堂猫兒を爭ふ、泉乃ち提起して云く、「大衆、道ひ得ば即ち救ひ得ん、道ひ得ずんば即ち斬卻せん。」衆、對ふる無し。泉遂に是を斬る。晚に趙州、外より歸る。泉、州に擧似す。州乃ち履を脫して頭上に安じて出づ。泉云く、「子、若し在りしかば即ち猫兒を救ひ得ん。」

無門曰く、「且く道へ、趙州、草鞋を頂く意作麼生、若し者裏に向つて一轉語を下し得ば、便ち南泉の令、虛りに行せざることを見ん。其れ或は未だ然らずんば險。」

頌に曰く、「趙州若し在らば、倒に此の命を行せん。刀子を奪卻せば、南泉も命を乞はん。」

第十五　洞山三頓

㋹雲門、因に㋺洞山參ずる次で、門、問うて曰く、「近離甚の處ぞ。」山云く、「㋻查渡。」門云く、「㋼夏、甚の處にか在る。」山云く、「湖南の報慈。」門云く、「幾時か彼を離る。」山云く、「八月二十五。」門云く、「汝に㋽三頓の棒を放す。」山、明日に至つて卻つて上つて問訊す。「昨日、和尚の三頓の棒を放すこ

㋷一棚傀儡。傀儡とは木偶の人形にして、同じ舞臺の上の人形芝居と云ふ程の意。

㋸南泉。鄭州新鄭の人、姓は王氏、始め大隗山の大慧禪師に依つて業を受け、三十にして戒を受けて毗尼を學び、更に性相の學に志し、後馬祖の室を扣いて頓に筌を忘れ、終に其の心印を得たり。自ら池陽に禪院を構へて山を出でざること三十年、終に南泉に下りて學徒に接す、世壽八十七にして寂す、法嗣に趙州和尚あり、傳燈錄八、會元三に傳あり。險はあゝ、あぶない。

㋹雲門。姑蘇嘉興の人、姓は張氏、韶州雲門山光奉院に居る、雲峰義存禪師の法嗣にして、雲門宗の初祖なり。

㋺洞山。洞山の守初禪師を云ふ、即ち雲門文偃禪師の法嗣として崇惠大師と謚せらる。

とを蒙る、知らず過甚麽の處にか在る。」門云く、「㋺飯袋子、江西湖南、便ち恁麽にし去るか。」山、此に於て大悟す。

無門曰く、「雲門、當時便ち㋑本分の草料を與へて、洞山をして別に㋺生機の一路あつて、家門寂寥を致さじ、一夜㋩是非海裏に在つて、著倒して直に天明を待つて再來すれば、又㋥他の與に注破す。洞山直下に悟り去るも、未だ是れ㋭性燥ならず。且く諸人に問ふ、洞山三頓の棒、喫すべきか喫すべからざるか。若し喫すべしと道はば、草木叢林皆棒を喫すべし、若し喫すべからずと道はば、雲門又誑語を成す。者裏に向つて明め得ば、方に洞山と一口の氣を出さん。」

頌に曰く、「㋩獅子、兒を教ふ迷子の訣、㋬前まんと擬して跳躑して早く飜身す。㋣端無く再び叙ぶ當頭著、㋥前箭は輕く㋭後箭は深し。」

第十六　鐘聲七條

雲門曰く、「世界恁麽に廣闊たり。甚に因つてか鐘聲裏に向つて㋬七條を披る。」

無門曰く、「大凡そ參禪學道は、切に忌む㋮聲に隨ひ色を逐ふことを。縱使ひ㋯聞聲悟道、㋰見色明心なるも、也た是れ尋常なり。殊に知らず衲僧家、㋱聲に騎り色を蓋ひ、頭頭上に明に、著著上に妙なることを。然も是の如くなりと雖へども、且く道へ、聲、耳畔に來るか、耳、聲邊に往くか。直饒ひ響寂雙び忘ずるも、此に到つて如何が話會せん。若し耳を將つて聽かば、應に會し難かるべし。㋲眼處に聲を聞いて、方に始めて親しからん。」

頌に曰く、「㋳會するときは則ち事、同一家、㋴會せざるときは萬別千差。會せざるときは事、同一家、會するときは則ち萬別千差。」

第十七　國師三喚

㋵國師、三たび侍者を喚ぶ、侍者三たび應ず。國師云く、「㋷將に謂へり、

㋺飯袋子。土地の名。

㋻夏。一夏九旬の安居を云ふ、夏は蟲の發生する期にして、修行者は是れを踏殺するを恐れて外出を禁じ、專ら堂に在つて身心の修養に力むるを云ふ。

㋼三頓棒。一頓は二十棒、三頓は六十棒、この處を俗語にて云へば「愚昧の奴よ、六十棒を喰はすべきなれど、今日は親の日ゆゑ許して遣す」と云ふ程の意。

㋽飯袋子。人を罵るの意、糞袋の義にして、俗に「穀つぶし」と云ふに當る、即ち「是の糞袋、湖西湖南と何をうろ付いて歩く」と云ふ程の意味なり。

㋾本分草料。俗に持前の奥の手と云ふが如し、草料とは馬の食物なれど、此處は法喜食、禪悅食に當る。

㋿生機。復活の一路と云ふが如し。

㌀是非海裏。一大煩悶の罰にと云ふ意。

㌁他。雲門を指す。

㌂性燥。利根にあらざるの意。

㌃獅子。獅子は其の子を育つるに、千尋の崖より蹴落す、雲門の洞山を取扱ふに、汝に三頓の棒を放すと蹴落したるに當る。

㌄擬前。第二句の頌は、獅子の子の身を踊らして却つて親に飛び付くに喩ふ、即ち洞山の明日の問訊を指す。

㌅無端。第三句の頌は、雲門が再び抑止して飯袋子等と云へるに當る。

㌆前箭。雲門、前日四度の言を指す。

㌇後箭。雲門明日の一言、即ち洞山をして大悟せしむる言を指す。

㌈七條。七條衣を指す、上著衣とも中價衣とも食衣とも云ふ、即ち袈裟のことなり。五條は行脚衣、七條は食衣、九條は說法衣、二十五條は涅槃衣と云ふ。而して竪横に縫目あるは田を象るの意、故に福田衣とも云ふ。

㌉隨聲。外境に支配されるの義。

㌊聞聲悟道。香嚴和尚の擊竹の聲にて悟入し、永明禪師の薪の墮ちし音にて悟りたる如きを云ふ。

㌋見色明心。釋尊の明星を見て大悟し、靈雲和尚の見桃悟入の如きを指す。

㌌騎聲。其く外境を支配するの義。

㌍眼處。大燈國師の歌に「耳に見て、眼に聞くならば舜はす、おのづからなるのきのたま水」と、これと同じ消息なり。

吾れ汝に辜負すと、元來卻つて是れ汝、吾れに辜負す。」

無門曰く、「國師三喚、㊉舌頭地に墮つ。侍者三たび應ず、光に和して吐出す。國師年老い心孤にして、牛頭を按じて草を喫せしむ。侍者未だ肯て承當せず、美食飽人の飡に中らず。且く道へ、那裏か是れ他の辜負の處。㋒國清うして才子貴く、家富んで小兒㋓嬌る。」

頌に曰く、「㋔鐵枷無孔人の擔はんとを要す、累兒孫に及んで等閑ならず、㋕門を撑へ並に戶を挂ふることを得んと欲せば、更に須らく赤脚にして刀山に上るべし。」

第十八　洞山三斤

㋐洞山和尚、因に僧問ふ、「如何なるか是れ佛。」山云く、「麻三斤。」

㋑會則。千差萬別の諸法の間に横はる一眞理を體得せば、萬物一體、平等無差別なり、但し迷へば山は山、川は川と千差萬別の境界を現前するとの意。

㋒不會。更に前二句の半面を言ふ、卽ち表裏兩面を體得して、始めて眞理を悟入すと云ふを得。

㋓國師。西京の光宅寺慧忠國師を云ふ、越州諸暨の人、姓は冉氏、心印を六祖に嗣ぎ、南陽の白崖山黨子谷に居る、後、千福寺光宅寺に住して、敎風大いに振ふ。傳燈錄五、會元二に傳あり。

㋔將に謂へり。已下の文意を通俗に云へば、「吾の說得の仕方が惡いと思ふたら、却つて汝の修行が足らぬのである」と云ふ意。

㋕舌頭地。國師は親切が過ぎ、侍者は親切を知らずして我儘育ちの意。

㋖國清。これは太公望の言、明心寶鑑に出づ。

㋗嬌。嬌は驕の誤りと云ふべし。

㋘鐵枷。鐵枷には罪人の首を入れるべき孔のあるもの、然るに無孔と云へば何等用を爲さん、厄介者と云ふ意。

㋙欲得。眞個禪門を撑へ禪戶を挂へんと思はば、赤脚以て獻身的に修行せよと云ふ意。

㋚洞山。洞山守初禪師にして、前の第十五則を參照せよ。

㋛蚌蛤。蚌蛤とは蛤にして、蛤が口を開いて五臟六腑を見せて居る貌、卽ち洞山が肝腸まで露出して居るゆゑ、見屆けよと云ふ意。

㋜突出。麻三斤と云ひたるは、正しく心肝五臟を諸人に呈示

無門曰く、「洞山老人、些の㋝蚌蛤の禪に參得して、纔に兩片を開いて肝腸を露出す。然も是の如くなりと雖も、且く道へ、甚の處に向つてか洞山を見ん。」

頌に曰く、「㋞突出す麻三斤、言親しうして意更に親し。㋟來つて是非を說く者は、便ち是れ是非の人。」

第十九　平常是道

南泉、因に趙州問ふ、「如何なるか是れ道。」泉云く、「平常心是れ道。」州曰く、「還つて趣向すべきや否や。」泉云く、「向はんと擬すれば卽ち乖く。」州云く、「擬せずんば爭か是れ道なることを知らん。」泉云く、「道は知にも屬せず、不知にも屬せず、知は是れ㋠妄覺、不知は是れ㋡無記、若し眞に不疑の道に達せば、猶ほ㋢太虛の廓然として洞豁なるが如し。豈に强ひて是非すべけんや。」州、言下に於て頓悟す。

無門云く、「南泉、趙州に發問せられて、直に得たり瓦解氷消、分疎不下なることを。趙州、縱饒ひ悟り去るも、更に參ずること三十年にして始めて得ん。」

したるところ、誠に親切なる言葉なり。

㋟來說。他人の是非を說く人は、その本人も他人から是非を云はれる人と云ふ意、大いに學者の反省を促す。三祖も云く、「纔有二是非一、紛然失レ心」と。

㋠妄覺。妄想覺觀の略、卽ち吾人の心意識に於ける麤細分別の總稱なり、而して是の道は思慮分別の及ばざるところなり。

㋡無記。善性にもあらず、惡性にもあらざる無記性を云ふ。

㋢太虛。眞空無相の境界を云ふ、洞山は曰く、「無心合レ道」と。

㋣若し閑事云々。此の頌は實に平生心是れ道の意を說き盡して餘蘊なし、殊に轉句に至りて其の意最も顯る。

㋤松源。松源崇岳禪師、初め居

頌に曰く、「春に百花あり秋に月あり、夏に涼風あり、冬に雪あり。㊂若し閑事の心頭に挂くる無くんば、便ち是れ人間の好時節。」

第二十　大力量人

㊀松源和尚云く、「㋐大力量の人、㋑甚に因つてか腳を擡げ起さゞる。」又云く、「㋒口を開くこと舌頭上に在らず。」

無門曰く、「㋓松源謂つべし、腸を傾け腹を倒すと、只だ是れ人の承當することを缺く。縱饒ひ直下に承當するも、正に好し無門が處に來らば痛棒を喫するに。何が故ぞ、㋔鞏。㋕眞金を識らんと要せば火裏に看よ。」

頌に曰く、「腳を擡げて踏飜す㋖香水海、頭を低れて俯して視る㋗四禪天。㋘一箇の渾身著くるに處無し、請ふ一句を續げ。」

第二十一　雲門屎橛

雲門、因に僧問ふ、「如何なるか是れ佛。」門云く、「㋙乾屎橛。」

無門曰く、「雲門謂つべし、㋚家貧にして素食を辨じ難し、事忙しうして草書するに及ばずと。動もすれば便ち屎橛を將ち來つて、門を撐へ戸を挂ふ、佛法の興廢見つべし。」

士の身を以て應庵曇華禪師に參じ、更に密庵咸傑に見えて法を嗣ぐ。楊岐方會―白雲守端―五祖法演―圓悟克勤―應庵曇華―密庵咸傑―松源崇岳。

㋐大力量人。松源の三轉語の中、之は第一第二を出して第三を略す、第三轉の語に曰く、「明眼衲僧、因甚麼、脚下紅絲線不斷。」此の第三轉を擧げざる意は、師の塔銘に第一第二を記して、第三を略するが爲なり。

㋑因甚。自分で自分の足を何故に擡げ得ないかと云ふ意。

㋒開口。口を開いて何故に舌の上にて饒舌り廻さんかと云ふ意。

㋓松源。松源和尚の五藏六腑を丸出しにして居るも知らん者のみと云ふ意。

㋔眞金。黃金の眞僞を識らんと

頌に曰く、「閃電光、擊石火。眼を眨得すれば、已に蹉過す。」

第二十二　迦葉刹竿

㊀迦葉、因に㊁阿難問うて云く、「世尊、金襴衣を傳ふる外、別に何物をか傳ふ。」葉、喚んで云く、「阿難」と。難、應諾す。葉云く、「門前の㋔刹竿を倒卻し著せよ。」

無門曰く、「若し者の裏に向つて一轉語を下し得て親切ならば、便ち靈山の一會儼然未散なることを見ん。其れ或は未だ然らずんば、㋕毘婆尸佛早く心を留む、直に而今に至るまで妙を得ず。」

頌に曰く、「問處は何ぞ答處の親きに如かん、幾人か此に於て㋖眼に筋を生ず。兄呼び弟應じて㋗家醜を揚ぐ、㋘陰陽に屬せず別に是れ春。」

第二十三　不思善惡

するには、須らく火中に投じて試驗する如く、悟道の眞僞を知るには先づ言句を以て試驗するとの意。

㋖香水海。印度の須彌山說にて九山八海を立つ、八海の中の一を香水海と云ふ。

㋗四禪天。欲色無色の三界の中、色界の初禪二禪三禪四禪天を指す。

㋘一箇。實に身體の置場がない、如何にせば良きか一句云へとの意。

㋙乾屎橛。此れは除糞の器なり、支那の山間僻地に於ては、大便所の傍に橛棒を横へ置き、糞し了りて之れに跨り、尻を着けて磨し去ること四五歩するなり、故に此の橛棒子には常に乾糞を止む、之れを乾屎橛と云ふ、我が國の木樋を以て糞筥となすと云ふ、今、佛の問に對して乾屎橛と答ふ、反語に非ず、倒語に非ず、雲門の五藏六腑を見よ。

㋚家貧。道は貧道より貴きはなし。

㋛摩訶迦葉。摩竭陀國の人、姓は婆羅門、父は飲澤、母は香至、佛弟子中に於て第一と稱歎せられ、滅後の如來と仰がる、後阿難に法を傳へて鷄足山に入り、慈氏の下生を俟つ。傳燈錄一に傳あり。

㋜阿難。王舍城の人、姓は刹帝利、父は斛飯王、佛の從弟なり、多聞博達を以て第一とす。傳燈錄一に傳あり。

㋝刹竿。寺門の前に立てる旗を云ふ。

㋞毘婆尸佛。法華經に本據あり、即ち過去七佛の一人にして、早くより心を留めても更に妙處を得ざるの因緣を擧ぐ。

㋣六祖、因に㋩明上座、趁ふて大庾嶺に至る。祖、明の至るを見て、卽ち衣鉢を石上に擲つて云く、「此の衣は信を表す、力をもて爭ふべけんや、君が將ち去るに任す。」明、遂に之を擧ぐるに、山の如くにして動せず、踟躕悚慄す。明曰く、「我れ來つて法を求む、衣の爲にするに非ず、願はくは行者開示したまへ。」祖云く、「不思善不思惡、正與麼の時、那箇か是れ明上座が本來の面目。」明、當下に大悟し、遍體汗流る。泣淚作禮して問うて曰く、「上來の密語密意の外、還つて更に意旨ありや否や。」祖曰く、「我れ今汝が爲に說く者は卽ち密に非ず、汝若し自己の面目を返照せば、密は卻つて汝が邊に在らん。」明曰く、「某甲、㋥黃梅に在つて衆に隨ふと雖も、實に未だ自己の面目を省せず、今入處を指授することを蒙つて、人の水を飲んで冷暖自知するが如し。今行者は卽ち是れ某甲が師なり。」祖云く、「汝若し是の如くならば、則ち吾れと汝と同じく黃梅を師とせん、善く自ら護持せよ。」

無門曰く、「六祖謂つべし、是の事は急家より出づと、老婆心切なり。譬へば㋧新荔支の殼を剝ぎ了り、核を去け了つて、儞が口裏に送在して、只だ儞が嚥一嚥せんことを要するが如し。」

㋣六祖。慧能大鑑禪師、新州の人、俗姓は盧氏、幼にして父を喪ひ、母子二人、家極めて貧し、一日金剛經を聽いて感ずるところあり、終に五祖弘忍禪師に就いて修行し、その付法となること六祖壇經の如し、此の則は慧能が下賤の身を以て五祖の衣鉢を繼ぎ、夜に入りて南方に走らんとする處を、慧明上座が跡より追ふて大庾嶺に到り、問答する因緣なり、傳燈錄三に傳あり。

㋩明上座。袁州蒙山慧明禪師、

㋥黃梅。蘄州の黃梅、卽ち五祖弘忍大師の住所なり、故に五祖を指す。

㋧新荔支。果物の名、龍眼肉の如き枇杷の類なり、此處は老婆心切の譬にして、果物の殼を剝ぎ取り、其の核を取り除き、正味の御馳走を口中に送在せしめ、嚥一嚥せしめるの意。

㋨描すれども云々。慧明の言下に大悟せしところを形容して、如何なる美術家も描し、畫き、贊すること能はざるを云ふの意。

㋩生受。生受に就いて異解多し、受とは領納の義、卽ち俗語を以て云へば「胡椒丸呑みでは駄目である、止めよ〳〵」と云ふ程の意か。

㋪前人。問ひし僧を指す。

頌に曰く、「㋫描すれども成らず畫けども就らず、贊するに及ばず㋬生受することを休めよ。本來の面目、藏すに處沒し、世界壞する時、㋭渠れ朽ちず。」

第二十四　離卻語言

㋮風穴和尙、因に僧問ふ、「語默は㋯離微に涉る、如何が㋰不犯を通ぜん。」穴云く、「㋱長へに憶ふ江南三月の裏、鷓鴣啼く處百花香し。」

無門曰く、「風穴、機、掣電の如く、路を得て便ち行く、爭奈せん㋲前人の舌頭に坐して斷せざることを。若し者裏に向つて見得して親切ならば、自ら出身の路あらん。且つ語言三昧を離卻して、一句を道ひ將ち來れ。」

頌に曰く、「㋳風骨の句を露さず、未だ語らざるに先づ分付す。㋴步を進めて口喃喃、知んぬ陽の人、陳の宣帝の裔なり、極めて求道心の深きこと此の則にても知り得べし。

㋫描すれども。世界の成壞に關係せず、本來の面目のみは光明赫々たるの義。

㋬風穴。汝州風穴延沼禪師、餘杭の人、初め鏡淸及び守廓に從ひ、後南院の惠顒禪師に就いて法を嗣ぐ。臨濟義玄—興化存獎—南院惠顒—風穴延沼。傳燈錄十三に傳あり。

㋯離微。僧肇法師の寶藏論にあり、默の極を離と云ひ、語の極を微と云ふ、卽ち語默離微は相對的の言なり。

㋰不犯。語默の二方面を犯さず、絕對の境界を問ふの意。

㋱長に憶ふ。已下の文意を云へば、天下の絕景たる江南の春三月、美い聲で啼く鷓鴣が類りに囀り、百花咲き亂れて何とも譬へるに言葉なしと云ふ程の意、是れ犯か不犯か、語か默か。

㋲前人。問ひし僧を指す。

㋳風骨。俗語にて云へば、眼を白黑さして驚き廻るとの意。

㋴家醜。內處事なり、迦葉阿難の兄弟が內輪事を表面に持ち出すと云ふ意。

㋵陰陽。別世界の春景色にして、兄弟の云ふに云はれぬ圓滿なる狀態を顯す。

ぬ君が大いに措くこと罔きことを。」

第二十五　三座說法

(ソ)仰山和尙、夢に彌勒の所に往いて(ネ)第三座に安ぜらる。一尊者あり、(ナ)白槌して云く、「今日第三座の說法に當る。」山乃ち起つて白槌して云く、「(ラ)摩訶衍の法は(ム)四句を離れ(ウ)百非を絕す、諦聽諦聽」といふを見る。

無門曰く、「且く道へ、是れ說法するか說法せざるか。口を開けば卽ち失し、口を閉づれば又喪す。開かず閉ぢざるも、(ヰ)十萬八千。」

頌に曰く、「白日靑天、夢中に夢を說く。(ノ)揑怪揑怪、一衆を誑譸す。」

第二十六　二僧卷簾

(オ)淸涼の大法眼、因に僧、齋前上參す。眼、手を以て簾を指す。時に二僧あり、同じく去つて簾を卷く。眼曰く、「(ク)一得一失。」

無門曰く、「且く道へ、是れ誰か得誰か失。若し者裏に向つて(ヤ)一隻眼を著得せば、便ち淸涼國師(マ)敗闕の處を知らん。然も是の如くなりと雖も、切に忌む(ケ)得失裏に向つて商量することを。」

頌に曰く、「(フ)卷起明明として太空に徹す、太空猶ほ未だ吾が宗に合はず。

(レ)風骨。この頌は雲門の偈頌なり、風骨とは風彩樣子の義。

(ソ)逆步。風穴の語に就いて口喃喃と理窟を述ぶれば、既に不犯の境界には遠く隔つとの意。

(ツ)仰山。袁州仰山慧寂禪師、韶州懷化の人、姓は葉氏、年十七にして出家し、諸方を歷遊す、終に潙山靈祐禪師の法嗣となる、傳燈錄十一に傳あり。

(ネ)第三座。五燈會元九、類聚五等には第二座とあり。

(ナ)白槌。人に注意を與ふる時に短き柱の頭を槌にて打つこと。

(ラ)摩訶衍。梵語、譯して大乘と云ふ。

(ム)四句。一異有無の四句を指す。

(ウ)百非。第一句は一非レ一、第二句は一亦非レ一、第三句は非レ非レ一、第四句は非レ非レ一亦非レ一、卽ち一に就いて四句あるが如く、異有無の三句に就いても又各四句あり、故に十六句となる、是れに三世の已起未起に配當して九十六非を得、更に初めの四句を加へて百非を數ふ、卽ち四句百非とは相對差別の偏見を總稱するの意。

(ヰ)十萬八千。大乘法に隔つる十萬八千も遠しとの意。

(ノ)揑怪。揑は捻衆、怪は奇異、卽ち靑天白日の幽靈物語を以て衆人を惑す、誰か之れを信ずるものあらんやとの意。

(オ)淸涼。昇州淸涼院の文益禪師、法眼宗の始祖、餘杭の人にして姓は營氏、七歲にして出家し、諸匠を歷訪す、終に前漳州羅漢桂琛禪師の法嗣となる。雪峰義存—玄沙師備—羅漢桂琛—淸涼文益。

爭か似かん空より都べて放下して、(コ)綿綿密密風を通せざらんには。」

第二十七　不是心佛

南泉和尙、因に僧問うて云く、「還つて人の與に說かざる底の法ありや。」衆云く、「有り。」僧云く、「如何なるか是れ人の與に說かざる底の法。」泉云く、「(エ)不是心、不是佛、不是物。」

無門曰く、「南泉者の一問を被りて、直に得たり(テ)家私を揣盡して(エ)郞當少からざることを。」

頌に曰く、「(サ)叮嚀は君德を損す、無言眞に功あり。任從あれ(キ)滄海は變ずるとも、終に君が爲に通せじ。」

第二十八　久響龍潭

(ユ)龍潭、因に德山(メ)請益して夜に抵る、潭云く、「夜深けぬ、子何ぞ下り去らざる。」山遂に珍重

(ク)一得一失。一人は得、一人は失ふとの意。

(ヤ)一隻眼。禪宗の宗旨眼、卽ち悟道を得たる心眼を指す。

(マ)敗闕。法眼禪師の失言。

(ケ)得失。文字に就いて得失の理窟を云へば、法眼禪師の心底は見えざるなり。

(フ)卷起。簾を卷き上げて日本晴の意。

(コ)綿綿。簾を垂れ、水も漏さぬ綿々密々の境界に到らざるべからずとの意。

(エ)不是心。佛に三百餘會の說法ありて、橫說縱說至らざるなし、然るに今南泉は說かざる底の法ありと云ひて、不是心、不是佛、不是物と答ふ、馬祖は卽心卽佛と云ふ、南泉は其の反面を答ふ、共に說明すること能はざる底の法なり。

(テ)揣盡。揣は稱量忖度の義、又

して簾を掲げて出づ。外面の黑さを見て、卻回して云く、「外面黑し。」潭乃ち紙燭を點じて度與す。山、接せんと擬す。潭便ち吹滅す。山此に於て忽然として省あり、便ち作禮す。潭云く、「子箇の甚麼の道理をか見る。」山云く、「某甲、今日より去つて天下の老和尚の舌頭を疑はず。」明日に至つて龍潭陞堂して云く、「㋓可の中箇の漢あり、牙劍樹の如く、口血盆に似たり、一棒に打てども頭を回さず。他時異日、孤峯頂上に向つて㋔君が道を立する在らん。」山遂に㋕疏抄を取つて法堂前に於て、一炬火を將つて提起して曰く、「㋖諸の玄辯を窮むるも、一毫を太虛に致くが若く、世の樞機を竭すも、一滴を巨壑に投ずるに似たり」といつて、疏抄を將つて便ち燒く。是に於て禮辭す。

㋐請益。論語の語、弟子の師に教を請ふの義。

㋑可中。德山省悟の披露なり。

㋒君。傳燈錄、會元、碧巖等みな君の字を我の字に作れり。

㋕疏抄。德山の今まで珍重せし金剛經の註釋本を指す。

㋖諸玄辯。是の二句は肇論の文にして、之は疏抄を燒くの弔文となす、卽ち經文の言句に拘泥して本心を究めざるを誡しめたるにあり。

㋗關。吾が宗の關門、卽ち悟道の妙境を透徹せざる以前の德山を指す。

㋘心憤憤。不平滿々にして勝他の意、卽ち獨に居りし時、自己の珍重せる金剛經を以て、敎外別傳の宗旨を滅却せんと云ひて澧州に來りしなり。

除の義にして、一家の私財を投げ盡しても何の役にもならぬとの意。

㋙郎當。浮浪の義、用をなさぬこと。

㋚叮嚀。南泉が叮嚀に答へたるは、却つて失言なり、無言なりしを可とす。

㋛滄海。年代久しき形容詞に用ふ、卽ち草田變じて海となると雖も、決して此の事のみは說くこと能はずとの意。

㋜龍潭。澧州龍潭崇信禪師、渚宮の賣餅家の子、姓氏は未詳なれど、少にして英異、荊州天皇道悟禪師の室に入りて法嗣となる、道悟禪師の法系に就いては古來頗る異說あり、一說は石頭の付法と云ひ、一說は馬祖の心印を受くと云ひ、或は當時二人の道悟ありと云ふ、眞僞容易に決すべからず、傳燈錄十四に傳あり。因に此の則は無門の評より讀み始めて、後本則を見るときは、文意甚だ明瞭となる。

無門曰く、「德山未だ㋝關を出でざる時、㋞心憤々、口悱悱たり、得得として南方に來つて、敎外別傳の旨を滅卻せんと要す。澧州の路上に到るに及んで、婆子に問うて㋟點心を買はんとす。婆云く、『大德、車子の內是れ甚麼の文字ぞ。』山云く、『金剛經の抄疏。』婆云く、『只だ經中に道ふが如きんば、過去心不可得、現在心不可得、未來心不可得と。大德、那箇の心をか點せんと要す。』德山、者の一問を被つて、直に得たり口㋠匾擔に似たることを。然も是の如くなりと雖も、未だ肯て婆子の句下に向つて死卻せず、㋡遂に婆子に問ふ、『近處に甚麼の宗師か有る。』婆云く、『五里の外に龍潭和尚あり。』龍潭に到るに及んで敗闕を納れ盡す。謂つべし是れ㋢前言後語に應ぜずと。㋣龍潭大いに兒を憐んで醜きことを覺えざるに似たり。㋤他の些子の火種あるを見て、郎忙して惡水を將つて驀頭に一澆に澆殺して、冷地に看來らば一場の好笑ならん。」

頌に曰く、「㋥名を聞かんより面を見んには如かじ、面を見んより名を聞かんには如かじ。然も鼻孔を救ひ得ると雖も、爭奈せん眼睛を瞎卻することを。」

㋝關。吾か宗の關門、卽ち悟道の妙境を透徹せざる以前の德山を指す。

㋞心憤憤。不平滿々にして勝他の意、卽ち獨に居りし時、自己の珍重せる金剛經を以て、敎外別傳の宗旨を滅却せんと云ひて澧州に來りしなり。

㋟點心。點茶の點と同義、卽ち少しく食して心を鎭むるの意。俗にいふこつけ。

㋠匾擔。恰も擔ひ棒の如く、口をへの字にして答を爲すこと能はざる狀を示す。

㋡遂問。德山の凡人に非ざるところ、卽ち婆子すら此の如し、必ずや近邊に大善知識あらんと思ひたるなり。

㋢前言。前言とは獨にありし時の言を指す、後語とは龍潭の處にて云ひし語を指す、卽ち德山の大敗闕を云ふ。

㋣龍潭。龍潭の德山を接せしは、自己の醜態を顧みずして兒を愛するに似たりと云ふが如し。

㋤他些子。德山に多少の法器があると云ひて、餘りに龍潭の老婆親切なることを說く。

㋥聞名。德山に就いての抑揚と見るべし、後の二句殊に佳

第二十九　非風非幡

六祖、因に㋑刹幡を颺ぐ、二僧あり、對論す、一りは云く、「幡動く」と、一りは云く、「風動く」と、往復して曾て未だ理に契はず。祖云く、「是れ風の動くにあらず、是れ幡の動くにあらず、仁者が心動く。」二僧㋒悚然たり。

無門曰く、「是れ風の動くにあらず、是れ幡の動くにあらず、㋓是の心の動くにあらず、甚の處にか祖師を見ん。若し者裏に向つて見得して親切ならば、方に知る二僧㋔鐵を買つて金を得。㋕祖師忍俊不禁、一場の㋖漏逗なることを。」

頌に曰く、「風幡心動、一狀に領過す。只だ口を開くことを知つて、話墮することを覺えず。」

第三十　卽心卽佛

㋗馬祖、因に㋘大梅問ふ、「如何なるか是れ佛。」祖云く、「㋙卽心是佛。」無門曰く、「若し能く直下に領略し得去らば、佛衣を著け佛飯を喫し、佛話を說き佛行を行せば、卽ち是れ佛ならん。然も是の如くなりと雖も、大梅多少の人を引いて、錯つて㋚定盤星を認めしむ。㋛爭か知らん箇の佛の字を說くも、三日口を漱ぐと道ふことを。若し是れ箇の漢ならば、卽心是佛と說くを見ば耳を掩ふて便ち走らん。」

頌に曰く、「青天白日、切に忌む尋覓することを。更に如何と問へば、㋜贓を抱いて屈と叫ぶ。」

第三十一　趙州勘婆

趙州、因に僧、婆子に問ふ、「㋝臺山の路、甚の處に向つてか去る。」婆云く、「㋞慕直去。」僧纔に行くこと三五步。婆云く、「㋟好箇の師僧、又恁麼にし去る。」後に僧ありて州に擧似す。州云く、「待て、我れ去つて儞が與に這の婆子を㋠勘過せん。」明日便ち去つて亦是の如く問ふ、婆も亦是の如く答ふ。州歸つて衆に謂つて曰く、「臺山の婆子、我れ儞が與に勘破し了れり。」

無門曰く、「婆子只だ坐ながら㋡籌を帷幄に解して、㋢要且つ賊を著くることを。知らず趙州老人、善く營を偸み塞を劫すの機を用ひて、又且つ㋣大人の相無し、檢點し將ち來れば、二りは俱に過あり。且く道へ、那裏か

し、鼻は救はれても眼は潰されたとの文面なれど、實は德山も氣持ちの良い悪りに入つたと褒むるの意。

㋑刹幡。刹とは國の義、今は寺の義に用ふ、寺に說法ある時寺中に旗を立つ、これを刹幡と云ふ。仁者はきみはなり。法華經にていふ。

㋒悚然。怖れた懷き、あつけに取られゝの意。

㋓不是心動。六祖の心動を掃蕩して、此の外に六祖の面目を見よとの意、心動を字の如く見るものを誡む。

㋔買鐵。鐵とは二僧の風動と幡動とを指す、金は六祖の心動を云ふ。

㋕祖師忍俊。六祖が二僧の水掛論を聞くに忍びず、飛び出して仁者心動と云ふは却つて六祖の失敗と抑揚す。

㋖漏逗。祕密を漏して他人に告ぐの意、玆は失敗とでも云ふべし。

㋗馬祖。漢州の人、姓は馬氏、容貌極めて奇異、牛行虎視、凡僧にあらず、南嶽懷讓の法嗣となる、傳燈錄七に傳あり。

㋘大梅。明州大梅山の法常禪師、襄陽の人、姓は鄒氏、馬祖の法嗣。

㋙卽心是佛。心は迷、佛は悟にして、迷心卽佛の意。

㋚定盤星。秤の目星、卽ち大梅も卽心卽佛と目星を定めし故、後人が目星に迷ふて如何ともする能はずとの意。

㋛爭か知らん。佛と云ふ字を聞くも汚れになると抑ふ。

㋜抱贓。青天白日なるに彼是云ふは、恰も盜賊が盜み物を抱いて愚圖々々云ふ如きもの、盜みましたと云ふより外はあるまいとの意。

㋝臺山。五臺山にして文殊を祀

頌に曰く、「問既に一般なれば、答も亦相似たり。(ノ)飯裏に砂あり、泥中に刺あり。」

第三十二　外道問佛

(オ)世尊、因に(ク)外道問ふ、「有言を問はず、無言を問はず。」世尊、(ヤ)據座す。外道贊歎して云く、「世尊大慈大悲、我が迷雲を開いて、我れをして得入せしめたまへ。」乃ち禮を具して去る。阿難尋いで佛に問ふ、「外道に何の所證あつてか贊歎して去る。」世尊云く、「(マ)世の良馬の鞭影を見て行くが如し。」無門曰く、「阿難は乃ち佛弟子、宛も外道の見解に如かず。且く道へ、外道と佛弟子と相去ること多少ぞ。」

頌に曰く、「(ケ)劍刃上に行き、氷稜上に走る。(フ)階梯に渉らず、懸崖に手を撒す。」

第三十三　非心非佛

馬祖、因に僧問ふ、「如何なるか是れ佛。」祖云く、「(コ)非心非佛。」無門曰く、「若し者裏に向つて見得せば、參學の事畢んぬ。」

頌に曰く、「(エ)路に劍客に逢はゞ須らく呈すべし、詩人に遇はずんば獻ずる。」

(オ)驀直去。眞直ぐに行けとの意。

(ヤ)好箇師僧。立派な形の坊主であるがと云ふて婆子は笑ふの意。

(ラ)勘過。婆子の腹底を吟味すること。

(ム)帷幄。戸帳なり、卽ち奥の間に居て千里外の必勝を籌る名將の婆子を云ふ。

(ウ)要且。賊の爲に夜討ちにせらるゝことを知らぬ、卽ち趙州に勘過せられたるを云ふ。

(ヰ)大人相。趙州もてく〳〵婆子の處へ行くは大人の樣子がないと、無門の力にて難辭を云ふ。

(ノ)飯裏。趙州の問には砂あり、刺ありとの意。

(オ)世尊。是の則、碧巖第六十五則と對照して見るべし。

(ク)外道。心外に法を見るものを

ること莫れ。(ア)人に逢うては且つ三分を說け、未だ全く一片を施すべからず。」

第三十四　智不是道

南泉云く、「心是れ佛にあらず、智是れ道にあらず。」

無門曰く、「(イ)南泉謂つべし、老いて羞を識らずと。纔に臭口を開いて家醜外に揚ぐ。(ウ)然も是の如くなりと雖も、恩を知る者は少し。」

頌に曰く「天晴れて日頭出で、雨下つて地上濕ふ。情を盡して都べて說き了る、只だ恐らくは(エ)信不及なることを。」

第三十五　倩女離魂

(オ)五祖、僧に問うて云く、「(カ)倩女離魂、那箇か是れ眞底。」

無門云く、「若し者裏に向つて眞底を悟り得

外道と云ふ、卽ち碧巖には四維陀典論を指す。

(ヤ)據座。ちよいと座り直すの義、碧巖には良久とあり、或は默然不對とあり、卽ち有言無言にあらざるところ、據座を以て採るべきか。

(マ)世の良馬。雜阿含經に曰く、「比丘有二四馬、一、鞭影卽驚悚、隨二御者意一、二、觸レ毛後如レ驚、三、觸レ肉、四、徹二骨肉一方覺」と。玆は鞭影を見て走り出す良馬の意、卽ち惜し氣もなく外道を賞讃せられたり。

(ケ)劍刃上。初の二句は危險を侵すの形容譬喩なり、卽ち外道との問答の樣子を云ふ。

(フ)階梯。一超直入如來地の境界を云ふ。

(コ)非心非佛。前の卽心卽佛の頌にして全同にあらず、白隱禪師も始めは同と思ひしに、六十にして初めて非心非佛の境に入ると云ひたり。

(エ)路逢。人を見て法說けの意、卽ち馬祖が是の坊主ならばと思ふて非心非佛と答へたるを云ふ。

(ア)逢人。人に逢ふて思ふ存分言ふ勿れ、馬祖が大悲心に溢れ、腹の中まで丸出しにせしは惜しいことと云ふ意。

(イ)南泉。南泉も年寄つて羞を忘れ、家内の祕密をさらけ出せしを云ふ。

(ウ)然りと雖も。しかし南泉の眞意を知る者は少いことであらうとの意。

(エ)信不及。學者の信なきものは如何ともすること能はざるを云ふ。

(カ)五祖。五祖法演禪師は綿州鄧氏の子、三十五歲にして出家し、初め敎相を學び、後、圓照及び浮山の禪匠を扣き、終

ば、便ち知らん殼を出でゝ殼に入ることは旅舍に宿するが如くなることを。其れ或は未だ然らずんば、切に亂走すること莫れ。驀然として㋙地水火風一散せば、湯に落つる螃蟹の七手八腳なるが如くならん。那時言ふこと莫れ、道はじと。」

頌に曰く、「雲月是れ同じ、溪山各異なり。萬福萬福、是れ一か是れ二か。」

第三十六　路逢達道

五祖曰く、「路に㋚達道の人に逢はゞ語默を將つて對せず、且く道へ、甚麼を將つてか對せん。」

無門曰く、「若し者裏に向つて對得して親切ならば、妨げず慶快なることを。㋛其れ或は未だ然らずんば、也た須らく一切處に眼を著くべし。」

頌に曰く、「路に達道の人に逢はゞ、語默を將つて對せず。㋜攔腮劈面に拳す、直下に會せば便ち會せよ。」

第三十七　庭前柏樹

趙州、因に僧問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」州云く、「㋝庭前の柏樹子。」

無門曰く、「若し趙州の答處に向つて見得して親切ならば、前に釋迦無く後に彌勒無し。」

頌に曰く、「㋞言、事を展ぶること無く、語、機に投ぜず。言を承くる者は喪し、句に滯る者は迷ふ。」

第三十八　牛過窓櫺

五祖曰く、「譬へば㋟水牯牛の㋑窓櫺を過ぐるが如き、頭角四蹄都べて過ぎ了る。甚麼に因つてか㋠尾過ぐることを得ざる。」

無門曰く、「若し者裏に向つて顛倒して一隻眼を著得し、一轉語を下し得ば、以て上㋡四恩を報じ下㋢三有を資くべし。其れ或は未だ然らずんば、更に須らく尾巴を照顧して始めて得べし。」

頌に云く、「㋣過ぎ去れば坑塹に墮ち、回り來れば卻つて壞らる。者些の尾巴子、直に是れ甚だ奇怪なり。」

第三十九　雲門話墮

雲門、因に僧問ふ、「㋤光明寂照遍河沙。」一句未だ絶せざるに門遽に曰

に白雲守端禪師の法嗣となる、即ち楊岐方會禪師の法孫にして、圜悟克勤禪師の嚴師なり、會元十九に傳あり。

㋗倩女離魂。倩女の因緣は剪燈新話に載す、即ち支那淸河に張鎰が季女倩娘あり、鎰の甥の王宙と許嫁の間なりしに、鎰は違約して賓僚に妻す、依つて倩娘は病床に就き、王宙は國を去る、途中に於て船に乘り行くこと數里、夜半倩娘の追ひ來るを見て共に居ること五年、遂に國に歸りて張鎰に謝せんと思ひ、王宙その事を語るに、鎰云く、「吾が女は病床にあり」と、驚いて王宙は舟中の倩娘を伴ひ來る、病床の女喜び迎へて合して一體となる、是れ何れの倩女を以て眞とするやと問ふの意。

㋘地水火風。死れば七顚八倒、沸湯の中に落ちたる蟹も同樣

㋚達道人。大道に體達せし人。

㋛其れ或は。一切時一切處に眼を着けて修養せよとの義。

㋜攔腮劈面。腮を裂ける位、顏の破れる位、横面へびしやりと拳骨を入れること。

㋝庭前柏樹子。日本の柏の木と違ふ、柏樹子の話、古今の老和尚も實に血の涙の修行をなせり。

㋞言無。柏樹子の言句に拘泥する勿れ、言句以上の處に向つて修行せよとの意。

㋟水牯牛。五祖法演禪師の垂示。水牯牛とは大牛のこと。

㋠窓櫺。人の住する家の明窓。

㋡尾巴。尻尾のこと、此の尻尾の爲に古人は血の涙を流して修行せり。

㋢四恩。國王の恩、父母の恩、三寶の恩、衆生の恩を云ふ。

㋣三有。欲界、色界、無色界を

く、「豈に是れ ㊀張拙秀才の語にあらずや。」僧云く、「是。」門云く、「㊁話墮せり。」後來㊂死心拈じて云く、「且く道へ、那裏か是れ者の僧、話墮の處。」

無門曰く、「若し者裏に向つて雲門の用處㊃孤危、者の僧甚に因つてか話墮すと見得せば、人天の輿に師と爲すに堪へん。若し也た明めずんば、㊅自救不了。」

頌に曰く、「㊆急流に釣を垂る、餌を貪る者は著く。口縫纔に開かば、性命喪卻せん。」

第四十　趯倒淨瓶

㊇溈山和尚、始め百丈の會中に在つて㊈典座に充つ、百丈將に大溈の主人を選ばんとす、乃ち請じて㊉首座と同じく衆に對して下語して、「出格の者往くべし。」百丈遂に淨瓶を拈じて、地上に置いて問を設けて云く、「喚んで淨瓶と作すことを得ざれ、汝喚んで甚麼とか作さん。」首座乃ち云く、「喚んで㊋木揳と作すべからず。」百丈卻つて山に問ふ、山乃ち淨瓶を趯倒して去る。百丈笑つて云く、「第一座、山子に輸卻せり。」因つて之に命じて開山と爲す。

㊁話墮。失言の意を云ふ。
㊂死心。黄龍の死心悟新禪師、會元十七に傳あり。石霜楚圓—黄龍慧南—晦堂祖心—死心悟新。
㊃孤起。孤危峭峻の意、即ち雲門の用處を云ふ。
㊄自救不了。人の濟度は扨て置き、自己の身の取り廻しにも難儀するものと云ふ意。
㊅急流。この頌は雲門の釣針に掛けられて命を取られたる僧の樣子を云ふ。
㊆過去。進退谷まるの意、難儀なる尻尾にあらずや。
㊇光明寂照。張拙秀才が禪月禪師の指教に依りて石霜禪師に參じ、入道の時の投機の偈の初めの一句なり。
㊈張拙。石霜楚圓禪師の法嗣、秀才とは博士と云ふが如きものなり。

無門曰く、「溈山一期の勇、爭奈せん百丈の㊉圈圍を跳り出でざることを。檢點し將ち來れば、重きに便して輕きに便せず。何が故ぞ、聾。㊋盤頭を脱得して鐵枷を擔起す。」

頌に曰く、「㊌笊籬並に木杓を颺下して、當陽の一突周遮を絶す。百丈の重關攔れども住らず、腳尖趯出して佛麻の如し。」

第四十一　達磨安心

㊍達磨面壁す、㊎二祖雪に立つ。臂を斷つて云く、「弟子未だ安からず、乞ふ師安心せしめよ。」磨云く、「心を將ち來れ、汝が爲に安せん。」祖云く、「心を覓むるに、了に不可得なり。」磨云く、「汝が爲に安心し畢んぬ。」

無門曰く、「㊏缺齒の老胡、十萬里海に航りして特特として來る。謂つべし是れ風無きに浪を

㊇溈山。潭州溈山靈祐禪師、福州長谿の人、姓は趙氏、十五にして出家し、二十三にして百丈禪師に參じ、辛酸苦修し、終に其の法嗣となり、司馬頭陀に請ぜられて湖南の大溈山に住し、四十年間大いに宗風を擧揚す、此の則は大溈山に請ぜらるゝ時の上座と溈山との法戰にして、これに依りて溈山は開山の選に入ることを得たるなり、傳燈錄九に傳あり、溈仰宗の初祖なり。
㊈典座。禪宗にて炊事掛の役を典座と云ふ。
㊉首座。弟子の上席にあるもの即ち華林の善覺首座を云ふ。
㊋木揳。木の株のこと。
㊌圈圍。物を圍むの義、即ち溈山も百丈の圓規内を出でないとの意。便重不便輕。典座の時は輕く、開山の時は輕からず、主に命ぜらるるゆゑなり。
㊍盤頭。炊事に用ふる切盤のこと、即ち溈山も典座の役は脱け出したが、却つて首には鐵枷を嵌めさせられたとの意。
㊌笊籬。勝手道具を一切打ち捨て、身邊の妨げを無くして溈山へ足を向けた、如何に百丈が住めんとするも如何ともする能はずとて、溈山を褒めたる語。
㊎達磨。初祖達磨大師、南天竺國香至國王の第三子、姓は刹帝利、初めの名は菩提多羅、後、出家して般若多羅に從ひ達磨と云ふ、師の遺命を奉じて晩年支那に來りて傳法す、傳燈錄三に傳あり。
㊏二祖。二祖慧可大師、初めの名は神光、洛京武牢の人、少にして老莊の學を習ひ、後、寶靜禪師に從ひて佛教に入り、更に達磨大師を少林寺に訪ふて心印を受く、此の則は

起すと。末後に一箇の門人を接得するに、又卻つて㋙六根不具、㋚咦。㋛謝三郎四字を識らず。」

頌に曰く、「西來の直指、事は囑するに因つて起る。叢林を㋟撓聒する、元來是れ儞。」

第四十二　女子出定

㋐世尊、昔、因に㋑文殊、諸佛の集る處に至つて、諸佛各本處に還るに値ふ、惟だ一りの女人有つて、彼の佛座に近いて㋒三昧に入る。文殊乃ち佛に白して云く、「何ぞ女人は佛座に近づくことを得て、我れは得ざる。」佛、文殊に告ぐ、「汝但だ此の女を覺して三昧より起たしめて、汝自ら問へ。」文殊、女人を遶ること三匝、指を鳴すこと一下して、乃ち托して梵天に至つて、其の神力を盡せども出すこと能はず。世尊云く、「假使ひ百千の文殊も亦此の女人の定を出すことを得ず、下方一十二億河沙の國土を過ぎて、㋓罔明菩薩あり、能く此の女人の定を出さん。」須臾に罔明大士、地より湧出して世尊を禮拜す。世尊、罔明に勅す、卻つて女人の前に至つて指を鳴すこと一下す。女人是に於て定より出づ。

初相見の處を驚ぐ。

㋕缺齒。達磨大師を指す、達磨は毒藥の爲に齒を缺くと云ふ。

㋙六根不具。慧可大師の左臂なきを云ふ。

㋚咦。大呼の意、笑ふ貌。

㋛謝三郎。是れは罪過の張本人は元來汝なりと云ふ方語、即ち達磨大師を飽くまで愚弄するの意。

㋟撓聒。惑亂の意、達磨大師が四天より來り、二祖に付囑するゆゑ、叢林を惑亂せしめたりと云ひて、達磨大師を抑下す。

㋐世尊。この則は諸佛要集經に出づと云ふ。

㋑文殊。文殊は根本の大智、即ち無漏の大智慧を代表せし人にして七佛の師なり。

㋒三昧。梵語にして正定とも正受とも云ふ、深く座禪三昧に入るを指す。

無門曰く、「釋迦老子、者の一場の雜劇を做す、㋔小小を通せず。㋕且く道へ、文殊は是れ七佛の師、甚に因つてか女人の定を出すことを得ざる。罔明は初地の菩薩、甚としてか卻つて出し得る。若し者裏に向つて見得して親切ならば、㋖業識忙忙として㋗那伽大定ならん。」

頌に曰く、「出得出不得、㋘渠儂自由を得たり。㋙神頭並に鬼面、敗闕當風流。」

第四十三　首山竹篦

㋚首山和尚、㋛竹篦を拈じて衆に示して云く、「汝等諸人若し喚んで竹篦と作さば則ち觸る、喚んで竹篦と作さざれば則ち背く。汝諸人、且く道へ、喚んで甚麼とか作さん。」

無門曰く、「喚んで竹篦と作さば則ち觸る、喚んで竹篦と作さざれば則ち背く、有語することを得ず、無語することを得ず。速かに道へ、速かに道へ。」

頌に曰く、「㋜竹篦を拈起して、殺活の令を行ず。背觸交馳す、佛祖も命を乞ふ。」

入るを指す。

㋔罔明。諸佛要集經を引ける事苑第五には、棄諸蓋菩薩の名を出す、初地の菩薩にして文殊菩薩よりは智力も神通も共に劣る。

㋕小小。一場の大々的大芝居を演じたるの義、釋迦老人は千兩役者であるとの意。

㋖且道。智力も神通も共に優れたる文殊が出來ない事を、劣りし罔明が出定せしめたと云ふは如何と云ふこと。

㋗業識。業識茫々の處其の儘が那伽の大定にして、煩惱妄想即大禪定の當體と云ふ意。

㋘那伽。那伽とは龍と翻ず、即ち座禪の行相の嚴格なることを形容す。

㋙渠儂。世尊を指すの言。

㋚神頭。或は文殊に命じ、或は罔明に勅して、種々の藝當を演じたが皆失敗なり、しかし

第四十四　芭蕉拄杖

㋑芭蕉和尚、衆に示して云く、「儞に㋺拄杖子あらば、我れ儞に拄杖子を與へん、儞に拄杖子無くんば、我れ儞が拄杖子を奪はん。」無門曰く、「㋩扶づては斷橋の水を過ぎ、伴つては無月の村に歸る。若し喚んで拄杖と作さば、地獄に入ること箭の如くならん。」頌に曰く、「諸方の深と淺と、都べて㋥掌握の中に在り。天を撐へ並に地を拄ふ、處に隨つて宗風を振ふ。」

第四十五　他是阿誰

㋭東山演師祖曰く、「㋬釋迦彌勒は猶ほ是れ他の奴、且く道へ、他は是れ阿誰そ。」無門曰く、「若し也た他を見得して分曉ならば、譬へば十字街頭に親爺に撞見するが如きに相似ん、更に別人に問うて是と不是とを道ふことを須ひず。」頌に曰く、「㋮他の弓を挽くこと莫れ、他の馬に騎ること莫れ。他の非を辨ずること莫れ、他の事を知ること莫れ。」

此の失敗も風流であるとのこと。

㋐首山和尚。汝州首山省念禪師、萊州の人、姓は狄氏、法を風穴延沼禪師に嗣ぐ、傳燈錄十三に傳あり。

㋺竹篦。師家の應機接物利生する道具、長さ尺五六寸、形少しく曲る、弓を截りて代用することもあり、此を用ひて自己の本分を示す。

㋻竹篦。一本の竹篦にて殺活自在の令を下す、背觸に涉る者は皆死漢なり。

㋼芭蕉。會元の中に於て芭蕉の名ある者六人あり、何れも此の話を載せず、依つて何れの芭蕉なるかを知らず、然れども古來の傳說には芭蕉山の慧清禪師となす、新羅の人、法を南塔の湧に嗣ぐ、卽ち仰山の法孫に當る。

㋽拄杖子。禪僧の持つ杖、此れ

第四十六　竿頭進步

㋾石霜和尚云く、「百尺竿頭如何が步を進めん。」又㋿古德云く、「百尺竿頭に坐する底の人、然も得入すと雖も、未だ眞と爲さず、百尺竿頭に須らく步を進めて、㌀十方世界に全身を現ずべし。」無門曰く、「步を進め得て身を翻し得ば、更に何の處を嫌つてか尊と稱せざる。然も是の如くなりと雖も、且く道へ、百尺竿頭如何が步を進めん。㌁嘎。」頌に曰く、「㌂頂門の眼を瞎卻して、錯つて定盤星を認む。身を拚て能く命を捨つ、一盲衆盲を引く。」

第四十七　兜率三關

㌃兜率悅和尚、三關を設けて學者に問ふ。「㌄撥

を擧揚して自己の本分を示す道具となす。

㋩扶過。人々具足の一拄杖子の用處を明す、實に有用のものなれど、認めて拄杖子であると爲さば、早や墮地獄とならねばならぬ、危險々々。

㋥掌握。此の拄杖子一本の突き加減に依つて、天下の宗匠の深淺も分るとの意。

㋭東山。五祖山の法演禪師を云ふ、無門は法演五世の孫なるがため、尊んで師祖と呼ぶ。

㋬釋迦。釋迦彌勒は等妙二覺なり、尊しと雖も修成始覺の人、本覺自性に比すれば猶ほ是れ他の奴。

㋮他弓。他と云ふと雖も外に求むること勿れ、須らく自己に取つて返して大いに實參實究せざるべからず。

㋾石霜。潭州石霜山慶諸禪師、廬陵新淦の人、姓は陳氏、年十三にして出家し、二十三にして受具し、後、道吾山圓智禪師の法嗣となる。

㋿古德。長沙岑禪師を指す、傳燈錄十に傳あり。

㌀十方世界。大悟に達し、更に轉身自由の境を得て、無礙自在に衆生濟度する樣子を云ふ。

㌁嘎。感投詞にして力を入れる時の語。

㌂頂門眼。第一義の心眼、卽ち摩醯首羅の一眼にして妄想を去つた所を頂門眼と云ふ。

㌃兜率悅和尚。隆興府兜率從悅禪師、贛州熊氏の子、始め道吾及び雲蓋等に參じ、後、寶峰克文禪師に就いて法嗣となる、會元十七に傳あり。

㌄撥草。徧歷の體なり、草を撥いて往來し、玄妙の處に參ずるの義なり。此の三關は現過未の三世と見よ。

草參玄は只だ見性を圖る、卽今上人の性、甚の處にか在る。」「自性を識得すれば方に生死を脫す、眼光落つる時作麼生か脫せん。」「生死を脫得すれば便ち去處を知る、四大分離して甚の處に向つてか去る。」

無門曰く、「若し能く此の三轉語を下し得ば、便ち以て處に隨つて主と作り、緣に遇うて宗に卽すべし。其れ或は未だ然らずんば、㊀麤飡は飽き易く、細嚼は飢ゑ難し。」

頌に曰く、「㊁一念普く觀ず無量劫、無量劫の事卽ち如今、如今箇の一念を覷破すれば、如今覷る底の人を覷破す。」

第四十八　乾峯一路

㊂乾峯和尙、因に僧問ふ、「㊃十方薄伽梵、一路涅槃門、未審し路頭甚麼の處にか在る。」峯、拄杖を拈起して㊄劃一劃して云く、「者裏に在り。」後に僧、㊅雲門に請益す。門、扇子を拈起して云く、「扇子

㊀麤飡。丸呑みは胃の爲に害なり、良く咀嚼して十分に骨折り、仔細に吟味して修行せよとの意。

㊁一念。一念とは正念なり、正念とは無念なり、この一念を明め得ば自由の妙境を得るとの意。

㊂乾峰。師は洞山良价禪師の法嗣、傳燈錄十七、五燈會元十三に傳あり。

㊃十方薄伽梵。此の句は楞嚴經第五に世尊の阿難に示し給ふ偈なり、薄伽梵とは佛の梵語、涅槃は佛の境界とも云ふべきものなり、卽ち偈の文意は、十方皆是れ佛、この佛の境界に行くべき路は一本のみと云ふこと、玆は其の一本路を問ふ。

㊄劃一劃。空中に一の字を書くこと。

㊅雲門。雲門久しく乾峰に師事し、其の家風を知るがため請益するなり。

㊆三十三天。印度の須彌山說に於て其の頂上にありと爲し、其の主を帝釋天となす。

㊇一人。一人とは乾峰を指し、他の一人とは雲門を指す、兩人共に言ふことは異なれども、各々一隻手を出して宗旨を擧揚す。

㊈直底。直は眞の字の誤り。

㊉正眼。已下無門和尙が本分の位地に立ちて二師を抑下す、實は卓上の意なり。

㊋著著。圍碁より出づ、一手一手に先手を取ることを指す。

跳して㊆三十三天に上つて、帝釋の鼻孔に築著す、東海の鯉魚、打つこと一棒すれば雨盆の傾くに似たり。」

無門曰く、「㊇一人は深深たる海底に向つて、行いて簸土揚塵し、一人は高高たる山頂に於て、立つて白浪滔天す。把定放行、各一隻手を出して宗乘を扶竪す。大いに兩箇の馳子相撞著するに似たり。世上㊈直底の人無かるべし。㊉正眼に觀來れば、二大老、總に未だ路頭を識らざること在り。」

頌に曰く、「未だ歩を擧せざる時、先づ已に到る、未だ舌の動せざる時、先づ說き了る。直饒ひ㊋著著機先に在るも、更に須らく向上の竅あることを知るべし。」